

大番米

政所米

宗兵部博
多代官卜
ナル

後生菩提
ノ爲ニ美

給宮寄進寶大寄進職事云々ノ事

同國右所同加納役方大番々米方卅石事

同在所國友大番々米等事

同國南郡種村番米事刑部卿殿御
自筆御奉書

同國南郡桐原大番米事

同國八坂政所米事

攝津國大番米事

〔對州編年略〕中筑前 文明十年戊戌以宗兵部被爲博多代官了

寄附

〔愚溪寺文書〕濃美

〔從後卷〕
自大墳殿寄進狀

奉寄進ける後き場之東在所之事

合一處者

東限御寺之門境東之列木
西限白山之大道
南限寶墳之疆
北限御寺之山

右件在所爲雲松元祥居士之後生菩提永代奉寄進愚溪禪菴に所實正也此

濃愚溪庵
ニ寄附ス
河村基貞

遺言ニ依
リ後生菩
提ノ爲ニ
美濃性海
寺ニ寄附
ス
堺爲正

上者於子孫不可有煩之儀者也仍爲後證寄進之狀如件

文明十年戊戌正月十六日

河村又五郎
基貞(花押)

進上 愚溪菴方丈衣鉢閣下

〔性海寺文書〕前越

奉寄進本庄郷藤澤名内今泉別相事

合公田貳段者

右彼田地者妙德禪尼爲自領間任遺言爲基於性海寺當住持色呼御能化へ、
末代奉寄進處也子々孫々不可有違亂候仍寄進狀如件

文明拾年戊戌正月十七日

堺四郎兵衛尉
爲正(花押)
同主計亮
盛正(花押)

性海寺

〔東寺百合文書〕〇七一之二十

〔從後卷〕
めう行寺

(花押)

奉寄進 田地之事

本所勅旨
東寺西院
燈明料所

合壹段者 本所勅旨田
右件田地者、増進比丘尼當寺へ雖爲寄進之、依有子細、東寺西院燈明料所 仁、
奉永代寄進之處實正也、然者不可有他之妨者也、仍爲後日永代寄進之狀如
件、

文明十年 戊戌 五月三日

妙行寺納所
忠舜(花押)

筑前雷山
造營田

〔大悲王院文書〕

○坤 筑前

奉寄進雷山御造營田事

岸上、小元節供田正念

片山七百五十田彌四郎

ちこくに六百田

壹段小一貫田

壹段 中坊

つくらその六百田

たがこり四百田、少屋坊亥十郎

壹段同屋敷

尾原六百田、上部入ふちか本廿八分

壹段 大念、佛時、百文、可納

かさとや七百田通金

六十歩

こう四堂百田、兵衛問二郎

壹段

けすその六百田

五月節供田六百、田十郎三郎

小中坊

五百田、兵衛二郎

入壹段

たきかもし三百田、九郎

いもうの井手料八百田

いもうの畠田二百田

三百歩

六十歩助四郎

一所六郎四郎

ちやうろその六百田

少尾原六百田

一所六郎四郎

壹段 甘露寺分

右此田地之事、被勤諸役殘米之事、爲御造營物中、御坊之被取納、連々加修理、
當山無破壞様、衆徒御同心之御奔走肝要候、仍寄進狀如件、

世戸善雄

文明十年 戊戌 八月廿二日

世戸伊豆入道
善雄(花押)

〔日吉神社文書〕

四

奉寄進 畠半、十禪師

合半者、西付在之、七日ニサウメン、

右補生郡得珍保堂林面在之、

四至限、東類地、南左近作、

西ヨコ道、北右馬二郎作、

右件奇進 畠者、爲兵衛二郎聖靈頓證菩提也、仍奇進如件、

文明十年 戊戌 十一月四日

兵衛太郎(花押)

賣買、

〔潮崎稜威主文書〕

二

本錢返且那之事

□拾五貫文者

□件且那者、依有用要、光勝房相傳之、□坊、讚岐國之且那知行分一圓、
下一族共半分を、十聖房へ戌年より來酉年まで十二年期を、現錢拾五貫文

近江得珍
保堂林面

後世菩提
ノ爲ニ寄
附ス

本錢返

且那ノ價

賣渡申處實正也、宿坊道者小物萬を當分可分申候、借錢等之事ハ、本錢返事候間、本主として道遣可申候、尙々先達旦那自定賢坊分ハ、一人も不殘賣渡申候處實也、若此旦那違亂煩出來候者、伊勢之旦那被懸可申候、又天下一同之德政入候共、全不可有相違候、仍爲後日、本錢返狀如件、

文明拾年
卯月廿日

賣主光勝房幸祐(花押)

〔東寺百合文書〕

○山城之十六

〔端裏書〕

めう行寺

(花押)

賣渡 作職之事

合壹段者 在山城國紀伊郡佐井佐里八坪四之細本也、字號來生本所勅旨田也、

右件之作職者、增進比丘尼當寺へ有寄進之、數十年寺家雖爲知行、爲造營沽脚之、仍直錢四貫文、東寺西院燈明料所 仁賣渡處實正也、但雖可副本證文等、文明六年七月十三日炎上之時、燒失間不副候、仍作職分者、每年四斗宛可有之、万一就此下地違亂煩出來之時者、於公方爲寺家可明申者也、仍爲後日永代賣券之狀如件、

作職ノ價

文明拾年 戊戌五月三日

妙行寺納所
忠舜(花押)

〔本蓮寺文書〕

○備

〔端裏書〕

宗一宮内沽券也

堂屋敷

永代沽渡申則弘名内畠之事

合廿代者 宛直錢貳貫文也、

在坪關浦之法花堂東垣副

四至 東限類地、西限法花堂屋敷、南限此畠高岸、北限橫道

右件則弘名内、畠瓦依有直物要用、同村住人道顯五郎太郎方、永代沽渡所申在地明白也、親疎自他之中不可有違亂煩候、若於背此旨輩者、此支證明鏡仕、沽渡候上者、時領主而可有御成敗候、又正稅之公事物等者、公方破付移進之候、仍後日沽券之支證之狀如件、

文明十年 戊戌陸月廿六日

關之宗一
宮内(花押)

則弘名
正稅破付
注文

百文

文明十年雜載

公事錢

卅文

道夫代

四升六合 廚米 廿四文 駄鹽代

九文 廚菜代

十六文 房七錢

七合五夕 舟子三季分

卅八文 同賃代

已上關宗一宮內分

文明十年_{戊戌}六月廿六日公帳_ナ 令移進候

(端渡書) 則弘 五郎太郎賣券

永代賣渡申則弘名內畠瓦之事

合廿代者 宛直錢貳貫文

在所關浦法花堂東垣副公事物者前文在之

四至_{東限類地} 西限法花堂屋敷_{北限此畠} 南限_{此畠} 高岸

右件畠者則弘名內依有直物急用當浦法花堂_仁限永代沽脚處_仁在地明白也同自宮內殿沽券文相副渡申處以實正也若天下一同御德政又者不可有親

畠

田地ノ價

類他人之中違亂妨者也萬一背此旨輩出來候者可被盜人沙汰者也仍爲後胤龜鏡沙汰永代文書如斯

文明十年_{戊戌}六月吉日

道見五郎太郎 宗吉_(花押)

〔田代文書〕

〇七 筑後

賣渡申田地新立券文之事

合一反者_{字西田井鷹城} 但大_ヲ一_反ニ_成テ_賣申也

在和泉國大鳥庄上條

限四至_{東地頭方田} 西_{千原方田} 南_{清久鹿田} 北_{地頭方田}

右件之田地者濟全買得之私領也然今依要用有直錢貳貫九百五十六文_仁限永代田代方へ賣渡申處明白實正也於本券文者引失候間不相副候若於此下地違亂有輩者可爲盜入者也天下一同之德政同亂行候共於此田者不可是非之子細申候仍爲後日新立券文之狀如件

文明十年_{戊戌}七月十八日

勸學院 賣主濟全_(花押)

〔大津島神社文書〕

〇四 近江

き去申上ハ、毎年一升さりのきやう一といつ、汝王あんへさる可物也

たゝますいそんの年ハ、さる可からず、臨時ノ過役何事もかゝるましく候、

賣渡進 新放券文田地之事

合玖拾歩者、字庄ササイ東ノナラ本ニ在之也、請御文、但德サ三斗七升者宮斗定

右件田地之元者、尼公田先祖相傳之私領也、雖然依要用有之、現錢貳貫貳百文ニ限永代、奥嶋如住庵、仁賣渡申處在地明白實正也、若天下一同之徳政之儀有謂とも、彼於爲地違亂妨不可申候、自然相違之儀申輩在之者、爲公方可處罪科者也、其時一言子細不可申候、仍爲後日放券之狀如件、

文明十年八月十一日

南左衛門(花押)
東左衛門(花押)

これハ汝王あんより御きまんと也、まかりさいへ共、四月の御さいれいの御ミらくたいてんあらハ、追口可物也、

〔賜蘆文庫文書〕

二十五香取文書三

依要用有本錢返賣渡田之狀之事

同

合本錢壹貫五百文者、

右件ノ田之坪ハ、やもとの下かど田□□を、明年つちのどの斗之年之作毛□候て、來らんうしの年之作毛まで十五□(申カ)本錢返ニ壹貫五百文ニ、万雜公事を停、□賣渡處實正也、若彼田年きたり□相違する事候者、同々どの所迄立かいいふし候へく候、尙ふさふこ候ハ、本錢一こいを□沙汰いふすへく候、此上御とくせへ成候とを、いきあるましく候、仍爲後日□之狀如件、

文明十年 戊戌 九月三日

御手洗水直常

〔永嚴寺文書〕

前〇越

永代賣渡申候田地之事

合壹段者、在所者在本券、斗代壹石代也、升者町定

右件ノ田地者、依在要用、現錢伍貫伍百文ニ限永代、うり渡申候上者、いさゝか親類兄弟、又いかやうなる人躰、ふても候へ、於此田地にて違亂煩申候者、出來候ハ、公私御罪科ニ行候へく候、仍爲後日證文如件、

文明十年 戊戌 十月廿一日

四郎大夫内(略押)

田地ノ價

徳政

任此賣券之旨不可有相違者也仍如件

修理亮(花押)

文明拾十月廿一日

〔朽木古文書〕

乙料足證文
五十五號

吉田源六、き方へるい代うり_下_地、公方公事なしにて候間、それへめされ候事、千万目出候、仍後日ために一_(一)狀如件

文明十年十二月十四日

政所石黒助太郎
信秀(花押) 宛名

政所

貸借

〔朽木古文書〕

乙借米證文
四十九號

(端裏書)
借狀

借用申米之事

合九拾壹石七斗六升三合者

右件米者、鳥羽庄御年貢之内おもんて、當秋石別六_二り加利平、御さん用候てめさるへく候、仍御借狀如件

文明十年正月晦日

富倉藏人丞
藤久(花押)

利子一石
二六割

岩神殿
まいる

〔親元日記別録〕

中

修久

飯加州

一新次郎修久

(文明十年下間)
統領太郎右衛門孫也

泉
慈嚴軒永

同前

土御門京極材木屋太郎三郎ニ、寛正四七六借與十貫文事、無沙汰云々、

好尊

一 慈嚴軒永泉

同日、

好尊

清式大

禪才監寺、借與四貫文事、無沙汰云々、禪才令落墮號森云々、

好尊

一 内侍原好尊

一七廿八、

好尊

城州西院庄内給主得分佃兩名公事錢等事、爲質券五百貫文正盛都聞

好尊

清泉州

ニ合借用、長祿二以來至應仁元十個年間、貳千石直納之無盡期云々、

好尊

一 一條道場重一

一七廿八、

好尊

松波三河入道妻、要脚合借用之由、號召遣少女申之催促、一向不及覺悟云々、

好尊

合

松對 八九

好尊

清泉州

一 相國寺梵泉都寺 一 九廿一、

好尊

宇治平等院借錢、兩度ニ五十八貫文事、任借書之旨、以寺領年貢可引取

好尊

之由、御下知事、

中村章尙

同前
一 中村新次郎章尙 同日

權大納言局

飯彦左
一 權大納言殿御局御女房茶子 十廿二

宇野宗次

松對
一 宇野與次宗次 同日
中村左衛門次郎ニ借與三千疋事、無沙汰云々、

一 乘寺藪里兩郷地下人等ニ、連々借與米錢事、催促候處、重而以一行乍

等持寺

請乞無沙汰云々、
同前
一 等持寺雜掌 同日

利子三文

當寺祠堂錢 二文 五十貫文事、文正元十辻與三郎實秀合借用候、無沙汰

等持寺妙祐

同前
一 等持寺妙祐都官 同日

利子三文

當寺物百五十貫文、三文 文正元閏二辻次郎左衛門數秀合借用之、且九

北村盛貞

清泉州
一 北村隼人佐盛貞 同日
十貫返辨、相殘分無沙汰云々、

富田藤左衛門尉合錢五十貫文事、四十貫文返辨畢、相殘千疋事、合錢弃

德政

白井久次

承俊

破被成御下知之上者、不可致沙汰候處、切々謹責迷惑云々、

清式大
一 三井寺南院大樹坊辨公 十二廿

大津濱九郎五郎同八町彦太郎 八貫文預置候處、號德政不返辨云々、

清泉州
一 白井三郎右衛門尉久次 十二廿四

土佐彈正ニ預置六十貫文事、無沙汰云々、

同前
一 善光承俊 同日

金山方ニ預置元三料廿六貫四百文事、無沙汰云々、

合松豐 文五十三

讓與、

〔塚原周造氏所藏文書〕

ゆつり渡得九名事

合壹名者

右かの田地ハ、ふたいさうてんじ地也、去るよなふれんせん坊狩野方
□ かうゑんをもつて、おさへてもつり狀をこいとるといへ共、今のやん
ゝよ御せいといの時分ふるうへのいせんもつりやをくひりへし、ちやく

したるよよつて、四郎よゆつり候處也、さら／＼に(元也)のさまたけあるをうらす候、仍後日ためゆつり狀如件、

こゝなへ入道
盛在判

文明拾年二月吉日

〔鰐淵寺文書〕〇二 出雲

讓與

出雲鰐淵寺櫻本坊舍敷地

出雲國鰐淵寺櫻本坊々舍敷等事

合壹字者、

右坊舍敷地等者、宣祐相傳之所也、然於以前、雖讓德一九仁當坊於合退出之間、悔還之、奉馮守祭律師、永代讓與之處明白也、然上者、於後世菩提特可被致懇志、尙以云自門、云他門、聊不可有競望之儀、仍讓狀如件、

文明十年戊戌六月十一日 法印宣祐(花押)

〔中山文書〕江〇遠

遠江笠原莊高松神主職

笠原庄高松神主職之事

右彼御神領者、惟重代々相傳所也、然、嫡女楠若子孫養子と云て、千代熊丸に御神領一圓に讓渡者也、但神事祭禮等無懈怠可懃候、爲若親類一族中有違

亂輩者、以公方御成敗、堅可處罰科者也、仍而讓狀如件、

文明十稔戊戌十二月十七日 惟重(花押)

契約、

〔長祿寺文書〕〇三 山城

(瑞雲) 祠堂錢之狀

清涼院祠堂錢

契約申清涼院祠堂錢之事

右本錢參佰貫文之内、毎年貳月晦日仁、自文明十一年己亥至癸丑之歲十五ヶ年仁、貳拾貫文宛、無懈怠可返辨申候、若無沙汰之時者、長福寺領雖何在所、可被押召候、仍而以評議所定置之旨如件、

文明十年戊戌三月十六日 納所 德派(花押)

住山元莊(花押) 慈誥(花押)

藏龍院 慈晃(花押) 慈柏(花押)

瑞雲院 紹懋(花押) 維那 紹鶴(花押)

心祐院 心祐(花押) 慈島(花押)

清涼院祠堂

學藝、遊戲、

〔代始和抄〕

依僧宗祇所望馳筆畢、

文明十年二月

御名

此抄一條禪閣御作也、重尋申候條々追書加之畢、宗祇

〔寶生院經藏圖書目錄〕二十

一 瑜祇塔圖相承

一冊

奧書曰、文明十年戊戌三月廿一日、於江州惣持寺道場、奉授及道阿闍梨畢、佛子及實、^四五

〔寶生院經藏圖書目錄〕十六

一 祕密灌頂

一通

宛書曰、文明拾年戊戌四月二十八日、授與祐俊、傳授大阿闍梨位法印政祐、花押、

〔後拾遺和歌抄〕

代始和抄

一條兼良
宗祇ノ請
ニ依リ代
始和抄ヲ
著ス

瑜祇塔圖
相承

祕密灌頂

甘露寺親
長後拾遺
和歌抄ヲ
書寫ス

二判問答

一條兼良
二階堂政
行ノ問ニ
答フ

花嚴宗論
義抄

阿彌陀

學藝、遊戲、

〔代始和抄〕

依僧宗祇所望馳筆畢、

文明十年二月

御名

此抄一條禪閣御作也、重尋申候條々追書加之畢、宗祇

〔寶生院經藏圖書目錄〕二十

一 瑜祇塔圖相承

一冊

奧書曰、文明十年戊戌三月廿一日、於江州惣持寺道場、奉授及道阿闍梨畢、佛子及實、^四五

〔寶生院經藏圖書目錄〕十六

一 祕密灌頂

一通

宛書曰、文明拾年戊戌四月二十八日、授與祐俊、傳授大阿闍梨位法印政祐、花押、

〔後拾遺和歌抄〕

〔奧書〕
本云、

後拾遺抄、以新相公羽林朝臣、^{實隆}本書寫之、于時文明十年五月十八日終功畢、

按察使藤原親長

一校合了、

〔二判問答〕

二階堂山城判官政行問題也、愚管勘付之、

文明十年六月 日

後成恩寺禪閣、二階堂判官政行給之物也、即御自筆也、 權大納言御判

〔隨神舍集古圖說〕一

花嚴宗論義抄

文明十年 戊戌八月四日

右筆順圓

〔寶生院經藏圖書目錄〕九

一 阿彌陀

一冊

奧書曰、文明十年戊戌八月十七日、成純、

〔寶生院經藏圖書目錄〕七

文明十年雜載

三摩耶戒

一三摩耶戒

一軸

奧書曰文明十年戊戌九月三日於如意輪寺奉傳授畢稱非器之不可授由蒙嚴命具如先賢掟示預了權律師宥增

〔寶生院經藏圖書目錄〕 十五

一辨天等祕事

八通

荒神灌頂

荒神灌頂

一通

奧書曰文明十年戊戌九月廿一日授與覺實傳燈及實示之

辨財灌頂
二重疏

辨財四重疏 御流

一通

奧書同上

〔寶生院經藏圖書目錄〕 十六

同四重疏

一辨財四重疏 御流

一通

宛書曰文明十年戊戌九月二十一日授與覺實傳授大阿闍梨權大僧都

及實示之

不動祕印

一不動祕印

一通

宛書曰文明十年戊戌九月二十一日授與覺實傳授大阿闍梨權大僧都

辨財灌頂
初重疏

一辨財灌頂 四重疏

一通

及實示之

奧書曰文明十年戊戌九月二十一日授與覺實傳燈大阿闍梨權大僧都

及實示之

〔寶生院經藏圖書目錄〕 二十

不動斷末
覺苦法

一不動斷末覺苦法

一通

奧書曰文明十年戊戌九月廿一日受者覺實傳授大阿闍梨位權大僧都

及實示之

〔寶生院經藏圖書目錄〕 十五

印信

一印信 十一通

第四通 文明十年 戊十月十九日舜海示宥然

〔寶生院經藏圖書目錄〕 九

兩部合行
次第

一兩部合行次第 齋惠之

一冊

奧書曰兩界合行作法曼荼羅供及一壇許可一壇灌頂之護摩等令合行是宗最極祕決云々文明十年戊戌十二月五日齋惠

〔寶生院經藏圖書目錄〕

一釋論

殘欠
一冊

奧書曰、文明十年極月十二日、根來寺大傳法院別院於地藏院書寫畢、是偏爲上求并下化衆生也、覺俊房、

〔宇和郡舊記〕

元

一靈岩山安養寺

本尊阿彌陀 禪宗開基不知、無事貢

伊豫安養寺大般若經

此寺、^{烟壹反九畝}大般若經アリ、奧書、

延寶九迄百四年、

文明十年戊戌暮冬十三日、山伊與州字和庄巖野靈岩

〔實隆公記〕

五

二月廿六日、己丑朝間陰、自午後雨濺、入夜雷電降、^(第九)如車軸、

千載和歌集

今日千載集上料紙遺藏人左少辨許、^{可令}之由所望也、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文

三月八日、庚午、晴、師富朝臣入來、^略中、公卿補任一冊

後、^(三)令書寫持來、

〔兼顯卿記別記〕

○岩崎文

八月十一日、子、晴、自晡程降雨、^略中、此次公卿補

任後嵯峨、後深草、龜山三代之分借用之、正親町本令欠間、爲書寫借請者也、中院前大納言家本也云々、近年有子細、彼朝臣所持者也、

十三日、寅、晴、入夜月明々、^略中、自勸修寺大納言許、公卿補任二帖、^{高倉院、安到}

新古今和歌集

來、予書寫事詠付故也、早速書寫、尤祝著之由、謝遣之者也、本二帖同到來者也、^略下

〔實隆公記〕

五

三月一日、癸亥、晴、早旦退出、行水、今日新古今愚本立、^(庫カ)不出

源中最祕抄

仕、^略番之餘屈散々式也、

廿四日、^(因)戌、朝日雖現、陰雲不散、時々猶細雨、^略源中宸祕抄今日立筆、朝間行水、四辻春日短冊令清書遣之了、

〔兼顯卿記別記〕

○岩崎文

八月十一日、子、晴、自晡程降雨、^略中、自內府除目

執筆硯、^{累代相傳}并春玉祕抄八卷、以師富朝臣送賜之、先公可被寫置硯并彼

祕抄由、連々御懇望之處、其時分預置太和邊、只今召寄間、任遺命被恩借由被

命、誠懇切之芳命、不知所謝者也、普代舊不空者歟、尤自愛々々、

十二日、^(辛)陰、入夜降雨、^略中、彼祕抄校合者也、

十三日、^(壬)晴、入夜月明々、午半剋許、先參小河殿向春日局、條々有相談旨、小時

歸宅、則向內府亭、彼兩種恩借之儀懇謝之、但於硯者、先令返獻、可然石等相尋、

重而可寫置之由、約諾者也、於春玉抄者、可令書寫者也、以次頃之閑談、公事進

俱舍論

春玉祕抄
廣橋綱光
書寫七
サトシテ果

退等事也

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 八月九日

一訓英一瓶一盆持參、同學抄事仰合事、略○下

十九日

一同學抄沙汰立之、去朔日より書之、自三乃料紙到來次第之書之、寫本湯屋坊、令借用之、自兼親得業方、今日一帖分書立之給了、緣起總標段也

〔晴富宿禰記〕

十一月三日、酉晴、予懷中年代記六十圖、先年結城懇望之間書

與之、布施下野英基所望云々、仍又書之遣結城、可有傳達布施之由申遣也、返

報繼左、○返報所見ナシ

〔晴富宿禰記〕

二月十日、卯晴、前殿下殿、被下御書、荒久波集序、有御不氣之事、文字等寫本有誤者、可直進之由被仰、令電覽少々可爲此分歟之旨、有令申之所

〔實隆公記〕

五 四月廿一日、癸丑晴、早旦行水、晝間參竹園、詞花□□校合之、梶井殿御出京之程也

〔兼顯卿記別記〕

庫○岩崎文 八月十二日、丑陰、入夜降雨、略○中 町黃門來臨、終

同學抄

懷中年代記六十圖

荒玖波集序

詞花集校合

江次第抄

光源氏物語

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 七月廿八日、小雨

日閑談、江次第抄爲校合、招寄大外記師富朝臣間、同入來

一光源氏物語予近日披見之、此物語の紫式部作分也、西宮左大臣事思出之、自須磨卷書初之、今夜の十五夜をまゝ、今之處より書初云々、此書二色々

祕記口傳在之、紫明抄、河海抄、奥入花鳥餘情抄、巨細令注了

一桐壺源氏誕生至十二歳此桐壺の取語テ爲名

二帚木歳十六以歌爲名、と、木々の心を去らて、

空蟬同夏以歌爲名、うつ蟬の羽よをく、

夕顔同自夏以歌并語爲名、心あてにこれると見る、

三若紫三月七歳自以歌爲名、手よ摘て、

末摘花十七歳以歌并詞、なほのしき色とも、

猶の末摘花、よかひやあまさしいてふりと詞也、

四紅葉賀八十月以詞爲名、

五花宴十九以詞爲名、

六葵自廿一以歌爲名、とかなしや人の、

七柳廿四夏至

以詞并歌爲名、神垣の玄るしの杉も、

八花散里廿四夏

以歌爲名、みち花の香茂なつかしき、

九須磨廿五夏

十明石廿六夏三月廿七

以歌并詞爲名、旅衣もうらかなしきよ、なげき佐

、明石の浦、

十一身盡廿七夏

以歌爲名、身をたくしこふる玄るしに、

蓬生廿七夏

以歌并詞爲名、よつねても我こり玄けき蓬の軒を詞

關屋廿八夏九月廿九

以詞爲名、關屋よりはとを佐を出る旅すの

十二繪合卅世以詞爲名、

十三松風卅世

以歌爲名、身をかへて獨るへせる山里、

十四薄雲卅世

以歌并詞爲名、入日さけ峯にたなひらにかかるゝ、

十五朝顔卅世

以詞爲名、見しをりの露をすれぬ、

十六乙女卅世

以歌并詞爲名、乙女子も神さひぬらん、

十七玉鬘卅世

以歌爲名、戀わさる身のりれなりら、

初音卅世正月

以歌并詞爲名、年月を松よひられて、

小蝶卅世三月

以歌并詞爲名、花ののゝ小蝶を、

螢卅世六月

以歌并詞爲名、こゑいせて身をのぞ、

床夏卅世六月

以歌并詞爲名、なてしこの床夏

篝火卅世六月

以歌并詞爲名、かゝり火こ立ちぬ戀の、

野分卅世八月

以詞爲名、

御行卅世二月

以歌爲名、うちきらし朝くもりせし、

藤袴卅世七月

以歌爲名、れなし野ゝ露こやほるゝ、

檣柱卅世七月

以歌爲名、今のとて宿あれぬとも、

十八梅枝卅世九月

以詞爲名、辨少將拍子をとりて、梅かえ、

十九藤裏葉卅世九月

以詞爲名、御時よくはうとれて、藤のうら葉、

廿若菜上卅世四月

以詞爲名、

同下卅世四月

以詞爲名、(廿七)四十六七、

廿一柏木卅世四月

以詞歌爲名、柏木よ葉守の神の、

廿二横笛卅世九月

以歌爲名、横笛の玄らへの琴よ、

鈴蟲 五十、以歌并詞爲名、大方の秋をいうしと、

廿三夕霧 五十、冬、月、以歌爲名、山里のあはれを、

廿四御法 五十一、自、以歌爲名、ふえぬへきみのり、

廿五幻 五十二、正月、以歌爲名、大空をかよふ幻、

廿六雲隱

廿七句兵部卿 至、十四元服、一名の薫中將卷、以詞爲名、

紅梅 九、十、以詞爲名、此東のほまふ軒ちのき紅梅のいと面白く

句たる哉、詞

竹河 至、十四五、以詞并歌爲名、竹河の橋よりいてし、

以上四十四帖

宇治卷の、大貳三位とて、紫式部之女作分云々、

一橋姫 以歌并詞爲名、橋姫の心をくまて、

二椎本 以歌爲名、立よらむのけとこのみし、

三上卷 總角、以歌并詞爲名、上卷になあき契をむすひこめ、

四早蕨 以歌并詞爲名、此春のふれにのを見せん、

五宿木 一名ハ、以歌并詞爲名、やどり木とれもい、り、る鳥のこゑも、

六東屋 以歌并詞爲名、さしとむる葎やまけき、

七浮船 以歌爲名、橋のこしまの色ハ、

八蜻蛉 以歌并詞爲名、ありとて手にのどられす、

九手習 以詞爲名、なくさめの手習を、行のひまよの玄給とあり、詞、

十夢浮橋 一名ハ、法師とつめる道を、まるへにてれも、まぬ山にふみまよふ哉

以上十帖、都合五十四帖也、

清少納言之作、加卷々名、

櫻人 巢守 八橋 さしくし 花見 嵯峨野上下

古物語名

伊勢物語 竹取く うつや 狹衣 辨作者大貳三位 正三位

隱蓑 岩屋 おちくや 住吉 濱松 こまのく少

草子 枕 かよ野之少將 同 唐守 藐姑射

一源氏數本事 世尊寺先祖 行成卿 自筆、今世ニ 源光行 以八本之校 世尊寺先祖 二條帥 伊房本

文明十年雜載 一七九

黄表紙

冷泉中納言朝隆本

久我殿元祖之兄弟
堀川左大臣俊房本

號黃表紙

從一位麗子

當家一條殿相傳本、土御門左大臣女、號京極北政所

法性寺關白本 唐紙小草子、號尙侍殿本

五條三位俊成卿本

京極中納言定家本、號青表紙

青表紙
源氏物語
期流布ノ時

一源氏ハ寛弘始、一乘院御代ヨリ出現ノ、世間ニヒロマル事、康和ノ末堀川院御代也、

水原抄

一水原抄 諸大夫 大監物源光行作也、

一紫式部ハ、鷹司殿官女也、相繼テ上東門院ニ祇候ス、

紫式部ノ墓

式部之墓所ハ、在雲林院ニ、白毫寺南也、

式部ハ、檀那院贈僧正ニ許可 天ヲエ 天台一心三觀ノ血脈ニ入云々、

河海抄

一河海ハ善成公作、善成公ハ丹治氏忠守朝臣ニ傳ヘリ、

紫明抄

紫明ハ十卷、親行作、親光子也、親行之法名素寂、

一源氏物語、村上天皇后大濟院安子 九條右大臣女 ヨリ、一條院后上東門院ニ御所

望之間、上東門院ヨリ藤式部承テ作之云々、

上東門院ハ、御堂關白御女、後一條院、後朱雀院二代國母也、御歳八十七歲、

法名清淨覺、

一源氏ニ作事ハ、

宇多天皇

仁和一、寛平九、醍醐天皇 昌泰三、延喜八

朱雀院

承平七、天慶九、朱雀院ハ三條朱雀也、號後院

村上天皇

天慶十、天徳四、應和三、康保四

冷泉院

安和二

以上、此等御代事ヲ下心ニハ書作也云々、

一衣の色、汝人のさまより定まる事、

紅梅ハ、紫の上

紫の上、明石中宮

山吹ハ、夕良の内侍

白ハ、明石上

柳ハ、末摘花

青ハ、

空蟬

あさ花田ハ、花散里

源氏年のとてに、あさくくに御装束くとり給を、紫の上のきさる物、人

こ似ぬひのくしく待らんかし、その許へのさりきなくて、人のあさ

ちをさしとあらんの御心なめりとて、ささめられきるよし、玉かつら

の巻こ見えさり、

人々のあさちを花よごさる事、若菜の下巻こ見えさり、

女三宮 二月、さほして、鶯の青柳風にみたるぬへたり

明石中宮 よたか、さねなく、みゆたる、朝の松の心地か、給りて

紫上 さへて、あたり、さきよきよみすく、花にいと、櫻もさ

明石上五月待花とちそふの色も香もさもに
夕顔内侍頭八重山吹のみとれる色思いてとる露の

居所事

二條院源氏母更東院故院の東也六條院六條京極也四丁をつきこめて
作給ておほつゝなき人々をさへすませ給へり様々の心むきよま
のひて紫の上の御方の春の花の木敷をつくしてうへ御まへちのき前
栽こつゝしこうとい春のもの茂るさあけめて秋の物の村々々の
のにまるせられたり

中宮の御方のもとの山こき紅葉ともうへ遣水のこゑまはるへきい
ととも多てくへられ瀧をとして秋の野をはるくつくれり其心
こあひてふたりのさまをうつされりきり

花散里の御方の夏のさきこよれりまへちのくせんさいこのくれ竹杉
松のやうなる木立をもしろき山里めきてりみゆる卯花垣ねこま
して昔おほゆる花たちをなわゆる春の秋の花まえく春の秋の花ま
せたり東をもての馬場この夏のかまへをまなひて埒なとゆひりし

て夏の御すゝみ所也

明石の御方の冬の始より朝霜えんこむすふへき菊のまのき包れひこ
りのや也ことならぬ深紫うつし植なとして朝ことこさひしき也

春宮のおのしまはまの故宮を所の家よやおほゆる摘空蟬なん
とゐすまへすませ給へりと乙女の巻こ見へり此等の皆源氏の家也

三條の葵の上の家夕霧の大將つゝへ給へり

三條宮薄雲の女院御所也宇治の宮の川よりの北宮も大姫君もうせ給
て後薰大將御堂を造らる

揚名介か家の五條をたり大貳のめどの家の隣也夕貞の君の物よこ
られしなよかしの院の名をまらに

〔晴富宿禰記〕

二月廿五日戊晴向吉田三位許謝昨日來談又清話移刻有一

獻此時分修理大夫忠直來三品亂後稽古去年講釋日本紀事等予傳聞之旨
語出之處條々正解也舌佛教儒道爲神道之根元趣等令演說誠驚耳者也次立
寄湛碧庵晚飡舉盃了

〔東院年中行事記〕

八 六月三日晴癸巳略中 春滿丸元三抄覺始之

佛教儒道
ハ神道ノ
根元

元三抄

律
官庫記

ハツカシ

日本書籍
目錄

北山記目
錄

兼敦朝臣
記

大學
老子經

五十首和
歌
甘露寺親
長第當座
和歌會

〔晴富宿禰記〕

二月八日、丑晴陰不定、日野中納言廣光卿、町來臨、爲慰亂世十年之懷、不顧異躰參候云々、誠且述鬱陶律第一并目錄一卷、官庫記一條殿并天佑和尚一卷借之被歸了、暫於書院談公事、座右量御記有之、被披閱、節會見參祿法、此祿法一條禪閣祿法ホカト讀之由、被仰之旨語之、又攝家御系圖懸之、御堂殿御名ノ長ノ字、ヲサト讀之說有之、禪閣者何ト被仰哉之由、令申之處、其一說モ有レトモ、只ナカト讀也ト被仰之旨被語也、又防鴨河使ノ讀様不審之間、ハツカシト讀候由答了、差一蓋自他傳盃及數度、移刻之後、被歸、達年來之本望、散鬱念候條、頗被感悅、

九月四日、壬戌九月節、日本書籍目錄都護被借之間、今日遣之了、

十二月一日、子戊雨降、北山記目六、日野中納言廣光卿返之、

十九日、丙午晴、應永六年冬兼敦朝臣記、借吉田三位文書紛失之處、此記部類相殘云々、可然事也、

〔兼顯卿記〕

六月廿一日、辛亥、晴、大學一部或一帖二帖、老子經一册感得之、

〔親長卿記〕

正月十四日、晴、詣善法寺許、有五十首披講、於歌者兼日人々詠之、

〔實隆公記〕

三月廿一日、癸未、晴、於都護亭當座和歌、有基綱朝臣連會、

三條西實
隆、蜷川親
元ヲ招キ
十首和歌
興行

飛鳥井雅
康第宴

十五首當
座和歌

山家深雪詠之、

〔蜷川親元日記〕

二月十六日、己酉、天晴、夜雨、雷發聲如曆、

一於武田殿國傳夢想法樂百首披講あり、飛鳥井前大納言殿入道榮雅冷泉爲廣招月

正般、已下、講師政孝杉原七郎、當座よ尋花竹山路といふことををのゝ詠し

て、一首追而被講之、其後勸盃あり、

〔實隆公記〕

二月廿二日、乙卯、霽、行水、爲後鳥羽院聖忌之、十五首續歌

興行之摸法樂、

〔親長卿記〕

四月廿八日、陰、自午剋許雨下、自德大寺大納言實淳許、昨日

有音信、今朝可來一續張行云々、即罷向、有朝飯、參會人々、內府公教左大將信

量、源大納言雅行、予、勘解由小路前中納言、前藤宰相永繼、民部卿忠實、右兵衛

督雅康、右大辨宰相兼顯、新三位爲廣、基綱朝臣爲高、長直朝臣等也、此外長興宿禰、

德大寺實
淳第五十
首續歌

十五首續
歌

武田國信
夢想法樂
百首ヲ行

師富朝臣、貞久、縣主等也。有五十首續歌。講師基綱朝臣、讀師左大將也。披講畢、及大飲、入夜冷甚、留滯畢、無興也。

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

四月廿六日、戊午、晴、自德大寺以大外記師富朝臣、明

後日、廿八、可張行一續、自朝飯可來之由被命、必々可罷向由返答、

廿八日、庚申、雨降、早朝向德大寺亭、五十首續歌披講之、出題右兵衛督雅康卿、

讀師左大將信量卿、講師基綱朝臣、予二首詠之、朝飯以前先各取題、飯後講之、

內相府以下十餘人、自兼日依招請罷向者也、終日大飲也、及天曙歸宅、沈醉之、

外無他、折五合、柳二荷隨身之者也、

廿九日、辛酉、雨降、自晚雨脚休止、○中退出之次向德大寺亭、昨日之儀謝之、則

被對面、懇被謝之、

五月二日、癸亥、雨脚尚不休止、德大寺大納言來臨、先日會合之儀、祝著之由被

謝之、懇切之芳言、尤祝悅之旨、謝之、頃之雜談、

〔兼顯卿記別記〕

○岩崎文庫所藏

四月廿六日、晴、自德大寺以大外記師富朝臣、明

後日、可張行一續、自朝飯可來之由被命、必可參由返答、

廿八日、降雨、向德大寺亭、朝飯以前先各取和歌題、飯以後披講、五十首續歌也、

雅康出題

三十首續歌
甘露寺親
長第褒貶
歌合

飛鳥井雅
康第和歌
會

伊勢貞宗
第月次和
歌會

予二首詠之、讀師左大將、信量卿出題發聲、右兵衛督、雅康卿講師、姊小路中將、基綱朝臣也、終日大飲亂舞、及曉更歸宅、沈醉之外無他、折五合、柳二荷令隨身者也、入夜武田大膳大夫入道父子、伊勢守父子有近所推參、頗大飲也、廿九日、雨降、○中略歸路向德大寺亭、昨日之儀謝之、對面、懇被謝之、入夜歸宅、休息之外無他者也、

〔親長卿記〕

九

八月廿一日、晴、新中納言、量光新三位、基綱去年十二月十三日

位記之由、以源大納言、被仰、元長宣下了、等來、其外武邊、有三十首續歌、

九月十二日、雨下、今日於予亭有褒貶歌合、入來人々、勸修寺大納言、勘解由小

路前中納言、中御門中納言、新中納言、量光姊小路三位、基綱頭右中將、宣親朝

臣、長興、宿禰、俊通、飯尾為信、加賀清房、五條為親、良世等也、終日催興、

〔兼顯卿記別記〕

○岩崎文庫所藏

七月五日、乙丑晴、夕立、七夕詠歌共獨吟之外無他、

〔蜷川親元日記〕

六

二月廿七日、庚申、天晴、

一於飛鳥井殿御歌あり、

三月十五日、丁丑、天晴、雨、

一貴殿御歌會、月次、日ノ條、異事ナシ、

文明十年雜載

布施英基
第月次和
歌會
重陽佳節
廣橋兼顯
百首著到
和歌ノ興

四月六日、戊戌、天晴、

一 布施野州月次會、飛鳥井殿御出、

〔兼顯卿記別記〕

○岩崎文庫所藏

九月九日、卯朝程雨降、重陽佳節、酌菊水延年齡、

寔不老仙藥也、尤珍重々々、○中自今日百首著到和歌張行、爲稽古也、人數町

黃門、新黃門、冷泉三品、菅少納言長直朝臣、大外記師富朝臣、大館刑部大輔政

重等也、題者冷泉三位、今日之題正朔子日也、愚詠如此、

あら玉のとしも今朝より立春のまゐるへこやりてひく小松

〔兼九〕

○中自禪閣有賀札、殊付菊送賜、一首金玉、彼是可謂面目、件尊翰續左、短冊同

雖可續加、隨躰可入見參、室町殿并宰相中將殿見參之間、追而可續加者也、件

御詠如此、

をく露やつもりてちちとなりこけむ々ふをせにさく菊の下水

贈答愚詠

けふことにさきそふ花の色よりもなさけそふりた菊の下とつ

〔大乘院寺社雜事記〕

五六十 四月八日、

一同手習頭十疋下行之、日連歌在之、

日連歌

月次連歌

夏中連歌

千句

五月廿一日、小雨

一 於部屋連歌在之、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

五月十二日、癸酉、雨降、少納言長直朝臣入來、終日雜

談連歌一折、催雨中興、家僕計也、發句少納言沙汰之、

〔尋尊大僧正記〕

九 二月九日、

一 於竹内連歌法樂在之、

廿五日、

一月次連歌内々有之、

〔大乘院寺社雜事記〕

六七十 七月八日、

一 夏中連歌至今日結日之間、百韻在之、清賢法眼之所同前、

〔尋尊大僧正記〕

九 二月十日、

一 風呂千句在之、於堯善部屋也、開白發句申、句予遣之、題梅

立かへる年々梅のさかり哉

〔大乘院寺社雜事記〕

六六十 九月四日、

一 部屋千句連歌至今日三ヶ日了、

文明十年雜載

〔晴富宿禰記〕二月廿五日子戌晴晚官務來於北野會所上月將監始萬句今日開白招引之間自今朝向之云々其歸路來候

〔蜷川親元日記〕六 二月十三日丙午時正天晴霰降

一仙館院景隆武田殿請待和漢聯句百句あり親元罷出

〔兼顯卿記〕庫所藏文 六月卅日庚申晴晚頭夕立聊洒早朝勘解黃門入來勸朝飯二條前宰相菅少納言大外記賀首座下家司伊勢左衛門盛富等入來和漢聯句連歌以下各云ステ及晚各歸

九月二日庚申天晴終夜聯句張行高濤卿長直朝臣師富朝臣賀首座建藏主等人數也

〔兼顯卿記別記〕庫所藏文 九月二日庚申天晴秉燭程勘解由小路前黃門菅少納言大外記宗賀首座等入來就庚申聯句張行師富朝臣執筆○中略義行

〔兼顯卿記別記〕庫所藏文 八月十七日丙晴入夜雨降○中以次詩歌會可張行愚作詩歌之間何ニテモ必可申請由申送者也件題如此禪閣御出

〔親長卿記〕九 正月廿日晴○中今日招樂林綾小路中納言元長傳郢曲

兼顯卿詩會

甘露寺元長綾小路有俊二郢曲ヲ受ケ

元長樂奏始

元長山井景益二萬秋樂ヲ受 山科言國豐原統秋ヲ受ク 甘露寺親長第樂習禮

花山院政長第蹴鞠

德大寺實淳第蹴鞠

二月六日晴今日元長有樂奏始園前中納言二條前宰相資冬四辻宰相中將季經地下輩緣秋朝臣景康朝臣慶秋景兼景益夏快安倍季繼等來

六月廿五日晴○中元長今日万秋樂相傳也師範景益也

〔歷代殘闕日記〕八十七言國卿記 六月廿五日万秋樂一具傳授剋限申予著直衣南面東押板之上兼奉懸妙音天豐大夫將監統秋著狩衣

〔親長卿記〕九 七月三日晴今日於此亭有樂習禮園前中納言基有四辻宰相中將季經地下輩緣秋朝臣慶秋景兼景益兼熙景俊安倍季繼等也万秋樂合奏云々差一盞了

〔親長卿記〕九 四月廿六日晴及晚於花山亭有鞠政長七月廿七日晴於花山院大納言亭有鞠予新中納言量光右兵衛督雅康政顯元長享清法印等也於此亭鞠事連々張行之

八月十七日陰於花山亭有鞠源大納言花山院大納言予新中納言頭左中將宣親朝臣先之來永繼卿除元長以量等也入夜雨下

〔兼顯卿記〕庫所藏文 六月二日壬辰晴○中略天皇御讓位ノコトニ直向德大寺亭有鞠會自兼日可來由有音信仍罷向但已秉燭程也仍鞠事終三十

首有當座、二首詠之、終夜大飲酒也、及曉天歸家、

〔兼顯卿記別記〕

○岩崎文 庫所藏

七月八日、辰晴、略○中自德大寺有音信、只今右武

衛入來之間、一足可張行可來由也、必可參由返答、雖然南都東北院雜掌、數剋有相談旨間、寫剋既及黃昏間、遣使者就南訴不得隙之間、不可參由申遣者也、八月十一日、庚子晴、自晡程降雨、略○中及晚直向德大寺亭、心閑雜談之後、有蹴鞠予近比數个年一向打置之間、令辭退處、亭主再三懇望之至、立加者也、頗非無其興、亭主予、大外記師富朝臣、其外無外人、宮內少輔懷兼青侍少々等也、鞠以後、被勸一盃、頃之後歸家、于時亥剋許歟、連々可張行蹴鞠、必々可來由被約束者也、○兼顯卿記 異事ナシ

〔兼顯卿記別記〕

○岩崎文 庫所藏

七月七日、丁卯申斜向結城下野守宿所、立花繁多之由聞及間、連々見物大切之由約束之間、内々以進藤三郎左衛門尉長泰、可一見由申送之間、罷向者也、立花興頗驚目者也、十五瓶各凝風情、尤非無其興、亭主出會勸盃酌之興、雖令辭退再三懇望之間、逗留催其興者也、三獻後歸家、令持太刀賜亭主、歸宅後奈良瓜一荷、同酒一荷送之、自南都折節見來之間、可賞翫由申遣者也、

兼顯卿記
立花ヲ見
政藤第ノ
ル

茶會

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 八月二日

一一乘院殿茶事頭修南院僧正也、陽明入道殿入御、及夜陰大酒云々、

〔實隆公記〕

五 四月廿二日、甲寅、朝間晴、自午後雨降、略○中於頭中將□□海

平家物語
ヲ語ル

語平家、非無其興、

〔兼顯卿記別記〕

○岩崎文 庫所藏

九月六日、甲子晴、略○中座頭泊一初而來、平家物語

三句語之、今夜可逗留仰舍者也、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 七月十六日

一念佛之風流在之、於太刀牢六方以下見物、中市、舞車、城土郷、舞車十七日、

一同風流、藥師堂歟、舞車、北市、舞車、今辻、舞車、自餘郷々ハ、兩日共以成寄郷了、

一兩門跡力者御童子事ハ、風流方不相加于出錢、於藝能警固者、如郷民可致其沙汰由也、三條之角振之松菊丸、芝座椿堂之鶴若丸、各當門跡御童子也、今度自地下出錢事雖申之、不出錢者也、一乘院方郷々如然云々、鶴御童子之内千松丸ハ、先年之風流之時より、別而致所望、相加于人數了、今度同前、其餘次郎丸以下ハ不然也、

念佛風流
舞車

懸錢用錢
課ス奈良ニ

今度高島神人共ニ申付之、色々歎申入閣之云々、凡今度風流希有之題目也、奈良中時々剋々懸錢用錢等無法量、地下人等令迷惑時分也、春圓大之所爲、六方興行之故申懸之云々、

〔東院年中行事記〕

八 七月十六日、丙子、念佛風流爲六方鄉民ニ下知之、今

日ハ新市并城戸兩所分沙汰之、太刀牢庭へ寄之、何モ舞車云々、

十七日、丁丑、得業房來臨、念佛風流、河上三條北市今日沙汰之云々、

疾病、死亡、

壬生晴富
痔ヲ疾ム

〔晴富宿禰記〕三月二日、甲晴、洞松庵祖心房來、張行小飲、有閑談、明淨坊來會

予兩三日痔、下血以外之間、今日加灸治腰也、此灸腰之痛之療治也、又宜下血之療治、元來度々効也、

〔東院年中行事記〕

八 八月十六日、乙巳、陽明若君様御腹氣、自今月初比出

來、于今無御本複之間、爲御祈、於門跡大般若經被轉讀之、良家 十八、西座 一人、被相催之、予所勞之間、代官進之、行專房參勤了、

〔正任記〕

十月三日、

一自去月十六日、杉美作守重道不例、近日以外也、仍至彼宿御出之、平臥躰也、

杉重道疾

近衛政家
ノ子疾ム
大般若經
ヲ大修シテ
本復テ祈ル

大内政弘
神馬ヲ箱弘

崎社ニ祈
セ之ヲ寄

三條局疾

則爲上意御寄進御神馬於宮崎也、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十六 七月三日、

一九四郎左衛門自京都下向、京都無殊事、禪閣御書持來、三條局違例以外云々、瓜三十遣丸方了、

八月三日、

一三條殿違例以外之間、專實上洛、寬明同道之、

〔晴富宿禰記〕

二月十二日、乙晴、今朝妙覺寺住持入滅、累日心氣所勞云々、今

日一向衆金品寺坊守尼公、故坊主 自御構歸綾小路坊城屋舍之時、於路次盜人剝衣裳、剩令打擲之間、頭破損、於四條坊門堀川邊死去云々、

三月廿日、壬晴、妙蓮寺佛性院日慶、昨日十九酉剋入滅、老病不苦、如平生而閉

眼、上人日應僧正、向佛性院相看之間、不知其期之樣也云々、八十二歲也、

廿二日、甲雨降、官務飯後歸上宿、向妙蓮寺、予佛性院日慶事、上人并佛性院跡

門前、謁大成坊真如坊等了、

〔天龍寺妙智院過去帳〕

城○山 朔日、天潤梵富都寺禪師、妙智院開基之達

戊九

梵富

佛性院日慶

妙覺寺住持

專嚴

書寫ノ聖
教數百合

有馬則芳

文明十年雜載

〔大乘院日記目錄〕三

十二月廿二日、專嚴僧都入滅、

〔尋尊大僧正記〕十

十二月廿三日、

一專嚴乘緣房僧都、昨日圓寂云々、不便、一期之間ニ令書寫聖教共數百合在之云々、訓英相續云々、

〔赤松諸家大系圖〕一

○播磨

元家

上野、介、兵部少輔

則芳

出羽守、永享十二年生、
文明十年卒、三十九才、

澄利 有馬刑部少輔、太郎、長祿廿年（○）生、

散狀

文明十一年己亥

正月戊大
午朔盡

一日、戊午北小路第二在シ、四方拜等ノ諸儀ヲ停メテ、平座ノ儀ヲ行ハセラル、

〔歷代殘闕日記〕

八十八
勅裁案

元長卿記

文明十年、

元日平座事

平座任例可令申沙汰給候、仍執達如件、

十二月十一日

（原在數）
藏人大内記殿

（廿四）
左少辨元長

平座任例可被致沙汰之條如件、

十二月十日

（中原御高）
四位大外記殿

左少辨判

（壬生繁久）
四位史殿 少辨判

平座可令參仕給者、依天氣言上如件、元長誠恐頓首謹言、

文明十一年正月一日

文明十一年正月一日

十二月廿四日

勸修寺大納言殿

左少辨元長 奉

一九八

〔親長卿記〕

九

文明十年十二月卅日晴入夜雨下略○中平座散狀進上室町殿付右大辨宰相也平座參陣御訪_{三百}到來

〔親長卿記〕

十

文明十一年正月一日午天晴午後雷鳴雨下早且行水拜天地四方諸神佛等次祝著之儀如先々及晚元長參內御祝之儀如常云々平座也元長奉行上卿勸修寺大納言_{教秀}其儀大略如去年云々予依不具不參內依深泥奏聞之儀爲雨儀云々

〔晴富宿禰記〕

正月一日

午自曉天雨止未剋又大雷雨電申刻快晴日光明晚慶雲盈元日節會平座也上卿勸修寺大納言_{教秀}卿辨左少元長_{職奉行}外記權少外記安倍盛俊_{兼帶}史新大史高橋俊職等參陣宜陽殿獻盃一獻見參二通_{次侍從}被下外記錄法年々有之由申之間令用意之處依上宣略之云々元日不可有錄法之條勿論六位外記御訪三百疋也可爲史之帶之處新史俊職就言上之御昇進用錢有餘分之間被下行三百疋俊職參陣了共以傳奏_{廣橋}折帛飯尾近江守松田對馬守兩人加下書於定泉坊請取云々

奉行甘露寺元長
上卿勸修寺教秀
雨儀

幕府訪料
ヲ出ス

見參祿法

二日_未天晴盛俊兼權少外記參陣見參錄法_實之間相尋局務_{中原}四品外史之處不能指南一向可令闕御事之支度也云々仍予見參等書與了舊冬遺狀於局務其返事繼左又見參等如此

合見參次侍從五位已上

關白

權大納言藤原_{朝臣}□_{氏也}教秀

文明十一年正月一日

合見參非侍從五位已上

正五位上藤原朝臣元長

文明十一年正月一日

合見參五位已上

大臣一人

料絹五十疋

料綿四百屯

大納言一人

料絹三十疋

料綿二百屯

文明十一年正月一日

一九九

文明十一年正月一日

應下

絹二千疋

綿一万屯

用

絹百七十五疋

綿千六百五十屯

殘

絹千九百廿疋(八カ)

綿九千四百屯(二カ) (五十カ)

文明十一年正月一日

臨期依上卿宣略錄法了云々於元日者勿論但亂後平座每度有錄法云々不

幸々々々

元日平座

上卿

勸修寺大納言 敬秀

亂後平座
リニ祿法ア

巡役先ッ
參陣

辨

元長 藏人左少辨

現任事承候來正月小敍位以後可書進候心事猶難盡筆舌候也

寔先日白地立談尤雖卒爾候還而超于曾遊計續之思候歟旁可參謝之處諸
篇不得隙候間兎角消日月候懈怠之至候爲恐候抑元日平座當局六位參陣
事彼新任儀御沙汰之次第物恐之間各相殘所存候但御推任之上者不及是
非候任亂後例爲巡役先參陣事不可有相違候雖然局中故實等風諫儀亡父
經歷以後不及其沙汰候間當流之說不分明候清家定而不可有和談候歟然
者如見參之儀可爲如何候哉歲內無餘日候於明春者必々以參賀可述蓄懷
候恐々謹言

十二月廿五日

壬生殿 御報

師富

師富

〔長興宿禰記〕

中 正月一日午雨降雷鳴甚發聲後聞雷田舎四方拜不及沙
汰御藥小朝拜同前近年依亂中一向無沙汰自去年世間雖仰太平公私未復

文明十一年正月一日

諸國守護
公家ノ所
領ヲ押領
ス大合選
近ノ巡年

文明十一年正月一日

二〇二

舊儀、公家中所帶等、諸國守護兵革中押領、各不返渡、仍人々出仕拜趨、不可事
行之間、諸事御前公事等無興行、今年當大三合選近之巡年、可有御慎之由、自
去年陰陽道捧勘文、尤有其恐者哉、

今夜節會停止、被行平座、來五日被行小伎位、將軍宰相中將殿可被被從二位、
仍今日先被行平座、諸司御訪等下行物、及武家御沙汰、舊冬被下行之、

上卿勸修寺大納言教秀卿職事藏人左少辨元長兼、官方、右大史高橋俊職、權少
外記安倍盛俊左少史去年、初兼任外記、內豎川忠康等參陣之、降雨之間、爲雨儀云々、外記
史御訪各三百疋被下之、

〔後法興院政家記〕四 正月二日、己未晴陰不定、時々小雨下、傳聞、元日被行平
座云々、

〔武家年代記〕上 文明十一己亥正朔、被行平座、

○二日以後ノ御祝、便宜左ニ合被ス、

〔親長卿記〕十 正月二日、雨時々下、元長參內、依御祝也、

三日、晴、元長參內、

七日、晴、元三也、及晚參內、直衣、依不具當年未出仕、今日始出仕、先有御對面、於

二日
三日
七日

圓教寺塔
婆炎上

御前暫及御雜談、○中入夜御祝之儀如常、天酌天盃祝著々々、於宮御方同被
下御盃了、祝著了、

雷雨アリ、大和金峰山神社並ニ播磨圓教寺等ニ震ス、

〔晴富宿禰記〕一 正月一日、午、戊自曉天雨止、未刻又大雷雨電、申刻快晴、日光明、晚

慶雲盈、○中後聞、今日雷落、播磨書寫山塔婆炎上云々、國々慎之由占之云々、

應永廿三年正月九日、北山九重塔爲雷火炎上、正月雷電先蹤也、

文明十二年正月十八日、己未二月節、曉天雨雷鳴、又辰下刻雷鳴、其後風吹、□□

□□電甚急、今日又雷鳴、去年正月一日雷電、諸國同前歟、播磨書寫山塔婆
落燒了、希代事也、

〔長興宿禰記〕中 正月一日、午、戊雨降、雷鳴甚發聲、後聞、雷田舍

〔大乘院日記目錄〕三 正月一日、電光吉野上社ニ落給、

十三日、書寫大塔雷火燒了、元日事也、

〔大乘院寺社雜事記〕六十 正月朔日、午、戊

一雨下雷電、後日ニ聞之、吉野上御前ニ落了、未聞先例、天下

廿二日、

文明十一年正月一日

二〇三

金峯山上
社ニ落雷

文明十一年正月一日

二〇四

一吉野之山上ニ去朔日電光鐘ニ出現大鐘也云々天狗所爲也、不思儀事也云々、

二月十三日、

一播磨國書寫山大塔元日雷ニ炎上了天下凶殊更爲守護不吉事也云々、

〔和漢合符〕^十 文明十一、己正月一日、雷鳴雹降、

〔參考〕

〔播陽萬寶智惠袋〕

書寫山圓教寺略記

五重塔延文五年に焼く畢ぬ、應

安三年より供養後十三年を経て、文明十一年己亥正月一日より又雷火ありつ

て、五重塔ごとくを焼失、永正年中、勸進を催まといへともなりた、空

く畢ぬ、略上

〔播陽萬寶智惠袋〕

播州書寫山一見記

一五重塔、文明十一亥年焼失、于今

不造立、名塔庭、

管領畠山政長、幕府ニ出仕ス、

〔長興宿禰記〕

中

正月一日、戊午雨降、雷鳴甚發聲、

略中武家管領左衛門督政

長朝臣、畠山出仕、張輿、大口直共騎馬三人、其内一人直垂大口也、室町殿奉公

亂後初度
ノ出仕

早ク退出
シ歸參連
ル伊勢貞宗
ノ斡旋ニ依
リ救サ

足利義尙
廣橋兼顯
三條西實
隆
土御門有
宣

役者、御供衆、諸大名等、各直垂大口出仕、一亂（以カ）後初度出立也、嚴儀可謂珍重哉、

二日、未己義尙ノ近臣一色政熙、上野政直、安東宗康等、懈怠ニ依リ、共ニ譴ヲ承ク、

〔晴富宿禰記〕

正月二日、未天晴、

後聞一色（政熙）上野利部少輔、安東、以上三人也云々、

（伊勢貞宗）以下四人、暫

可祇候之由被仰候處、片時退出、剩歸參連々間、各突鼻、後日伊勢守種々執申之間、御免云々、

五日、戌臨時敍位、正三位足利義尙ヲ從二位ニ、正四位上廣橋兼顯、同三

條西實隆ヲ從三位ニ、細川政國ヲ從五位下ニ敍ス、

〔公卿補任〕

三四十

參 議正三位源義尙（尙）十五、右近中將、征夷大將軍、正月五日從二位、

正四位上藤兼顯（兼顯）廿一、右大辨、正月五日叙從三位、

同實隆（三條西）廿六、右近中將、正月五日叙從三位、

非參議從三位安有宣（土御門）正月十一日叙正三位、

〔歷名土代〕

文明十一年正月二日 五日

二〇五

文明十一年正月五日

正親町三條實興

正四位上藤實興

文明十一正五

中山宣親

正四位下同宣親

同十一正五

正親町三條實統

從五位下藤實統

同十一正五

河鱒實治

藤實治

同十一正五

姉小路濟繼

同濟繼

同十一正五

細川政國

源政國

同十一正五

上卿中御門宣胤
右筆廣橋兼顯

〔後法興院政家記〕

正月五日王晴陰雪花散是日於陣被行小敘位上卿

中御門中納言宣胤卿右筆右大辨宰相云々今夜奏慶嗣賢四品事并公益卿

息敘爵事等執申畢

八日丑天晴敘位敘人尋記之

從二位源義尚

正三位安倍有宣

從三位藤原兼顯

同實隆

正四位上同實興

正四位下同宣親

正五位下源久任

狛則行舞人

高階賴久

豐原直秋樂人

藤原基富

從五位下同實統

同實治

同濟繼

源政國

御教書案

廿一日丑晴大外記師富朝臣來持參聞書以外遲々也

〔親長卿記〕

九 文明十年十二月廿五日晴略○中自頭中將實興朝臣許送書

狀云昨夕雖參申予他行之間歸宅明年正月五日臨時敘位申沙汰御教書案

注給之可直給云々

明年正月五日催淵醉之時明年正月二日可有殿上淵醉如此催之可爲准

來月五日可被行臨時敘位可令參仕給者依天氣上啓如件

十二月廿五日奉行左中將、

謹上、中納言殿

參議

依天氣

十二月

謹上 右大辨宰相殿

辨

可令早參給者依

十二月十日

文明十一年正月五日

文明十一年正月五日

謹上 左少辨殿

任例可被申沙汰之狀如件

十二月廿五日

判

藏人大內記殿

任例可被催沙汰之狀如件

十二月

左

四位大外記殿

四位 史殿

御案分無相違，但少々愚存分注付也。

〔親長卿記〕

正月五日晴，申刻許元長參內，下委今夜小折紙事可申之由。申含了，何様今夜可被下云々，人々所望折紙少々進上了，進上室町殿小折紙，付右大辨宰相了，夜景中御門中納言宣胤，自予亭著裝束參內，今夜上卿也，今夜有臨時敍位，頭中將實與朝臣奉行也，雖然當日參任不具故障，宰相中將殿

奉行正親
與三條實

敍位ノ儀

義一 二品事，敍位之時御佳例云々，仍被行臨時敍位也。抑敍位儀事當時皇居無其禮仍於陣被行臨時敍位也，去年如此武上卿中御門中納言辨元長也，令同道參內，右大辨宰相兼顯，申拜賀參陣云々，仍相待參仕之間，移剋云々，暫先中御門中納言著陣奏慶之後未著陣，今日藏人方吉書許用之。元長兼仰出，其儀并敍位進退等，去二日來臨之時，書次第談合，予相違之處者，令諷諫了，其儀如例歟。次有敍位，於與座仰々詞歟。今日可被行臨時敍位之時，召仰諸司，予今案仰詞也，日事猶以有仰，况於臨時處分哉，但去年也，職事者仰々詞於上卿歟，勸修寺大納言不及次第之下，知之由中御門黃門相尋之時，返答云々，無謂由存之仍辨之外，記等如例可召仰，小折紙以勅筆被遊下者，元長寫之，可下上卿之由仰含了，今夜敍人

從二位源義一尚 元從三位

正三位安倍有宣

從三位藤原兼顯

同 實隆

正四位上藤原實興

正四位下藤原宣親

文明十一年正月五日

文明十一年正月五日

正五位下源 久任

狛 則行 舞人

高階 賴久

豐原 直秋 樂人

藤原 基富

從五位下藤原實統 實興朝臣弟云々、

同 實治 公益卿子云々、

同 齊繼 基綱卿子云々、

源 政國 細川右馬頭云々、武家之輩載小折紙事希歟

十日、雨下、參賀室町殿、宰相中將殿等、相公羽林二品御□□御禮、今日進上御太刀於兩御所、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏 文明十年十二月三日、庚寅晴、○中予來正月、小敝位

陣執筆可勲仕由、内々申入、神妙之由勅答、其以後納言昇進事可申請由、同申入者也、

文明十一年正月二日、己未雨降及晚霽、○中入夜町黃門賀來、太刀金被隨身來

甘露寺親
長太刀ヲ
義政父子
ニ贈リ紋
位ヲ賀ス

兼顯敝位
參陣清書
執筆拜賀
著陣ノ儀
ヲ習禮ス

人々ノ一
級所望ノ
書狀ヲ奏
達スヲ奏
兼顯執奏
ノ人々

近衛政家
執奏

義政執奏

二一〇

五日、敝位參陣清書執筆并拜賀著陣等習禮沙汰之、著陣次第令新作被隨身之、大外記師富朝臣同有□席（此カ）及半更□歸宅（各カ）、

○上文關ク、恐ラク仰也、則爲御使參禁省申入處、可被載小折紙由勅答也、人

々一級所望之書狀共、同可令奏達者也、

一級所望人數余執申分、

正三位有宣卿 勅許

從三位實隆卿 勅許

正四位上實興朝臣 勅許

正四位下宣親朝臣 勅許

正五位下基富 勅許 少將也、

從五位下藤原實治 勅許 陽明被申、公益卿息也、

同 濟繼 勅許 少路三位息也、

源 政國 勅許 室町殿御執奏也、

此外

從三位雅國朝臣、不許、江邊中將也、

文明十一年正月五日

二一一

支明十一年正月五日

從四位下嗣賢不許藤口也
陽明被申

日野拾遺山名一色以下公武面々多以賀來

日ノ上文關ク、七
條ナリ

聞書

從二位源 義一

正三位安倍有宣

從三位藤原兼顯 藤原實隆

正四位上藤原實興

正四位下藤原宣親

正五位下源 久任 狛 則行

高階頼久 豐原直秋

藤原基富

從五位下藤原實統 藤原實治

藤原濟繼 源 政國

支明十一年正月五日

〔歷代殘闕日記〕

八十八
兼顯卿記

拜賀著陣
日時

支明十一年正月五日

擇申御拜賀著陣日時

今日五日壬戌

支明十一年正月五日

從三位安倍有宣

遣笏身固事仰舍者也

秉燭以後則著楚々裝束有文玉帶後勸一獻今夜來臨人々源大納言雅行藤大納

言資世卿兵部卿宗綱卿町中納言廣光卿新中納言量光卿西河前宰相房經卿大外記富

朝等入來此外內府德大寺以下榼等送之衆數輩也三獻後則出門先參小河

殿雲客難得之間不及申次供僕如木雜色一人小雜色五人一人前藤宰相永繼送之侍一

人右兵衛尉益笠持等也入東面大門當中門透連子舞蹈如恒事終直參內入左

衛門陣代進立無名門代前申次藏人中務丞在數出逢予奏事由一揖申次參

御所方小時歸出仰聞食之由一揖予答揖申次退入後聊進出舞蹈如恒之後

即昇殿殿上無便宜有召參常御所有御對面被下天盃添祝著氣味者也今夜

小折紙敍人等事條々有勅定之旨天盃拜領後主上入御幸甚々々頃之遂著

陣公事次令遂之條多存例之故也其儀自立蒞東頭垂裾經床子座前於陣邊

支明十一年正月五日

一石左衛門自京都下向、隨心院殿書狀到來、○中略五日新將軍敍從二位、

〔武家年代記〕中 文明十一正五、御方御所敍從二位、

〔足利家官位記〕常徳院殿義尙、○次也同十一年正月五日敍從二位、十六歲、小敍位

六日、癸亥陰陽頭土御門有宗等ヲシテ、方違行幸ノ日次ヲ勘進セシム、

〔親長卿記〕十 正月六日、晴、元長依召參内、○中略御方違行幸方角日次可尋

遣之由、有仰、世上無爲之時者、管領頭尋陰陽頭、一通遣置于局、於一通者於貫首許、申沙汰事令與奪也、亂中之儀、御沙汰又如何不存知之、若内々自御局有御尋歎、職事方不存知、依無行幸也由申入之處、只可尋遣之由、有仰、仍仰元長、仰陰陽頭有宗朝臣云々、申云、於日次擇進之條、勿論於方角不申入、但爲仰者可申云々、可申之由、仰之、乾坤云々、於年中日次猶可申入云々、今夜節分也、

〔在盛卿記〕

一年中四十五日一度御方違日也、

正月六日 二月廿一日 四月八日 五月廿四日 七月十一日 八

月廿七日 閏九月十五日 十月卅日 十二月十七日

文明十一年正月日

（御解由小路）
在盛

方違日次
勘解由小
路在盛勘
進

扇ヲ甘露寺元長等ニ賜フ、

〔親長卿記〕十 正月六日、晴、元長依召參内、有一獻、被下例年御扇了、

七日、晴、元三也、及晚參内、直衣依不具當年未出仕、今日始出仕也、先有御對面、

於御前暫及御雜談、○中略予又被下天扇、佳例之儀也、祝著々々、

七日、甲子和歌御會、是日、一條兼良、和歌ヲ上リテ、三合厄ヲ祝禳ス、御製ヲ

賜ヒテ之ニ答ヘラル、

〔親長卿記〕十 正月七日、晴、元三也、及晚參内、直衣依不具當年未出仕、今日

始出仕也、先有御對面於御前暫及御雜談、今日被下御題、驚是萬懷紙同持之、

不及披講、被取重也、源大納言奉行也、

〔兼顯卿記〕○岩崎文 ○上抑今日人日、初子、立春、三个條相逢條、頗邂逅之

儀也、仍自禪閣、一條爲轉當年大三合災厄、令詠進一首之和歌於禁裏給、件奏

狀如此、

王春木徳之（初之）候、人日、菜羹之佳辰、一段嘉言、万般珍重、抑今日立春也、初子也、尤難得遭逢、頗可謂邂逅、仍爲轉三合之災厄、聊呈進一首之祝語、汗顔不

少、笑口定多、枉賜天覽候様、可令洩披露給、

奏狀

御題
奉行庭田
雅行

文明十一年正月八日

正月七日

頭左中將殿中山宮○近衛文書所
收異事ナシ

覺惠上

二二八

兼良詠進
ノ和歌
御製

おまやこの三に合をるとしならん七日れと後子春乃ふ初空 覺惠上
御贈答御製、

隨心院殿
寶兼良贈
和歌ヲ贈

おまにあふこととれ玉乃ふろりにとあふろと三の得しもをよめ
後聞隨心院僧正被進一首於禪閣云々、件一首如此、
玉と、た又あ、草にと□□□□春うつ日にもほひにあひをひ
禪閣贈答、

兼良ノ返
歌

春日野を雪間ふなして春のきぬ包□□□□はまむ松や引るき
可申贈答之由、自隨心院□□者也、雖然沈醉之間無其儀、

嚴實兼顯
ニ和歌ノ
贈答ヲ勸

〔晴富宿禰記〕正月七日、甲晴、後聞、今日有御製、禪閣一條、御返歌皆三合年御
祝言也云々、卿記ニ同シキヲ以テ略ス、

八日、乙、太元護摩ヲ修シテ、後七日法ヲ停ム、

〔親長卿記〕十 正月八日、晴、當番召遣元長了、今日御持僧參賀申次也、宿番
予祇候、自今日太元護摩如年々、元長奉行也、

理性院公
嚴參賀

〔東寺長者補任〕五 文明十一、己亥、後七日法無之、

〔大乘院寺社雜事記〕六十 正月十三日、雪下、

一石左衛門自京都下向、隨心院殿書狀到來、八日御持僧參賀云々、
〔續史愚抄〕四十 後土御門院中之上 正月八日、乙丑、太元護摩始、道場如去年、阿闍梨
權僧正公嚴奉行藏人左少辨元長、後七日法無沙汰、親長卿記、同追、理、性院記、長者補任、

十四日、辛未、太元護摩結願、長者補任、

○護持僧理性院公嚴參賀ノコト、便宜合敘ス、

結願

義政、京極寺八幡社、石清水八幡宮、鴨社、日吉社等ニ、神馬ヲ寄進ス、

〔神馬引付〕

一京極寺八幡 一疋黒

正八、爲年始御祈禱

一石清水 一疋黒毛

正廿、年始分也、以上二通三月廿二日調之、

一鴨社 一疋栗毛

正十六、御送狀日付如此、五月十九日ふまひる、

文明十一年正月八日

二一九

〔古文書〕十八

〔包紙〕
文明十一年正月十一日

伊勢殿御宿所

樹下
成辰

日吉社祠
官樹下成
長卷數ナ
贈ル

當社御神馬七疋内重壹疋引給候、則於聖眞子社致敬白、抽祈念之精誠候、殊
公方様爲御祈禱參籠申、御卷數一枚進之候、御頂戴候者可目出候、恐々謹言、

正月卅日

成辰〔花押〕

伊勢殿御宿所

○石清水八幡宮以下、其日ヲ異ニスレドモ、便宜合致ス、

護持僧、幕府ニ參賀ス、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文
庫所藏

正月八日、丑、乙天晴、早旦參小河殿護持僧參賀日也、仍

各加持ナ
ナス

參候護持僧參集之後、予申入案内、則御出座、先東御對面有之、評定衆以下也、
事終先入御、著御々小直衣、更御出座、申次殿上人藤侍從永康直垂也、今日勲
每度如此
之、予自兼日相催者也、大覺寺准后、花頂僧正、隨心院僧正〔殿〕
〔院〕之外無人也、次第各
參進有御加持如先々、予候御眼路、每度之儀也、圓滿院同參賀、但非護持僧、花
頂僧正附弟之間、令同道被參者也、仍無御加持、次申次雲客持參各進上御太

義政夫人
座敷ナキ
ヲ以テ禮
及ビテ加
チ受ケズ

青蓮院及
ビ門下ノ
參賀式日
尊應遲參
兼顯ナシ
テ門下ニ
尊應ノ參
否テ諸シ
ム

刀於御前、其後更又大覺寺以下次第被參御前、是宰相中將殿御一級御禮也、
○義尚、〔條〕位ノコ、悉參進之後、予申入御、如每度、仍入御、將又御臺御方御加持、
女房出座本儀也、但小川御所無御座敷間、得其意可申由仰也、仍各退出、其後
急參宰相中將殿、申次雲客同前、御對面御加持等之儀、每事同小河殿、御一級
御禮、御太刀之儀同前、各參進之後、予申入御者也、珍重々々、
十二日、巳、己雨降、自午半剋許雨脚休止、尤神妙也、早旦先參小河殿、○中今日青
蓮院并門下面々參賀式日也、然間青門被參歟否之由有御尋、予申云、舊冬參
賀之時、可構參之由演說候キ、定而可被參歟之由、令言上者也、仍御待彼參之
處、頃之不被參、仰門下輩、御參之有否可尋申由、内々仰下之間、安居院、上乘院、
南圓院廳以下參集之間、仰合處、自坂本今朝出京之間、遲參之由令申之間、先
有御出座、○中頃之青蓮院准后并頂法寺實助僧正等參、武家申次申入之者
也、予小時

○青蓮院尊應及ビ其門下ノ幕府ニ參賀スルコト、便宜合致ス、

十日、丁廷臣諸將、幕府ニ參賀ス、

〔親長卿記〕

十

正月十日、雨下、參賀室町殿、宰相中將殿等、相公羽林二品御

文明十一年正月十日

攝家參賀

□御禮、今日進上御太刀於兩御所、其後參賀所々、依降雨早歸宅、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

正月十日、卯、朝程天晴、自四時分雨降、早旦參小川殿、

攝家參賀日也、仍參候、攝家大略御參之後、予申案內、仍則御出座、先有東御對

面、事終著御々小直衣、更又御出座、申次殿上人藤侍從永康（侍從也、今日勲之、每度如此、）

子候御眼路之儀、如每度、申次雲客開御障子後、次第御參御前、二條前關白（九條）

白、左大臣殿（政基）、鷹司、久我前右府（通博）、右大臣殿（正衛政家）、陽明、西園寺前內府（實成）、德大寺大納言（實德）、花

山院大納言（政基）、右大將殿（交臣）、一條、以下數十人也、仍御對面良久程也、事終、申次雲客

持參各被進御太刀於御前之後、更又前殿下以下次第被參御前之儀、如前、悉

參進之後、予申入御者也、御臺御方御禮、尤女房可出逢處、當時殿中無便宜所

間不及其儀、得其意可申由也、武家申次伊勢備後守、於中門簀子申此旨者也、

急參宰相中將殿先赤後諸大名出仕之間、有之御對面、次今日參賀東衆相續

構見參歟、委不見及、其後御著用御狩衣、更又令出座給攝家以下次第被參儀

如小河殿裝束衆至六位一列也、源大納言（兼房）、藤大納言（武若小次實世）、町中納言（廣七）、新中納言（御原盛七）以下、

直垂之人數數輩又一列也、悉參進之後、永康持參御太刀置御前、次又前關白

以下次第被參、事終後予參御前申入御者也、每事無爲珍重也、

諸將出仕

勸修寺教
秀ノ委囑
ニ依リ兼
顯賢房ヲ
同道ス

〔長興宿禰記〕

中

正月十日、卯、晴、午刻以後雨降、今日公家門跡室町殿年始

參賀也、先參准后小河御所、次參宰相中將殿御第、早旦予直垂口（重大）參入小河

御所、二條前關白（政嗣）、當殿下（九條殿）、以下攝家清華人々參集、直垂人々不著

大口、少々著人相交、申次藤侍從（日野政光）、狩衣、傳奏右大辨相公（兼顯）、被候御前各御對

面之後、更亦進御前、獻御太刀、宰相中將殿御加階之御禮也、次參賀宰相中將

殿、兩度御對面同前、東面參入衆各別御對面、兩御所及其分、予師富朝臣外兩

局不參也、

○萬里小路賢房首服ヲ加へ、小河第二參賀スルコト、便宜左ニ合致ス、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

正月十二日、巳、雨降、自午半剋許雨脚休止、尤神妙也、

早旦先參小河殿、万里少路左兵衛權佐賢房舊冬加首服、今日初而令出仕之

間、召具參所也、實父勸修寺大納言被命故也、先之賀來此亭、美絹一疋、杉原十

帖、太（金）持來者也、略、○中先有御出座、仍賢房同有御對面、先年始御禮、次御方

御所御一級御禮、兩度御對面如先々、首服御禮進上御太刀、但此御太刀付申

次内々進上者也、宰相中將殿御座此御所、仍無御對面、以吉見兵部少輔申入

者也、次參御臺御方有御盃、每事予加扶助者也、小時賢房退出、予頃之祇候、

十一日辰伏見宮邦高親王、美物ヲ廣橋兼顯ニ賜フ、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文 庫所藏

正月十一日辰雨降、○中自伏見殿恒例美物一種、

被下之、以源大納言使者送給者也、以書狀畏存由返答、

十二日巳義政父子參內、歲首ヲ賀ス、

〔後法興院政家記〕

四

正月十二日巳陰、雨時々灑、入夜風吹、今日武家參內、

行長供奉如例年、

〔親長卿記〕

十

正月十日、雨下、○中例年御參內、依禁裏御衰日延引、

十一日、陰、參賀安禪寺殿、真乘寺殿已下所々、今日宰相中將殿御衰日、仍無御

參內、明日云々、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文 庫所藏

正月十日、卯、朝程天晴、自四時分雨降、○中略、義政夫

ノコトニカ、ル、十

然處明日御參內始儀、宰相中將殿御衰日也、先日伺定時、

有宣卿同在通朝臣兩人相尋御衰日處、卯酉之由、兩人同申間、御治定之處、立

春以前、舊年御衰日存、

宣令言上歟、相勘之處、所詮辰戌也、仍急馳參小河殿、申

入此旨處、然者可爲明後日、十二其旨得其意、申入禁裏之由、仰也、兩人言上之

旨、立春以前御尋之間、舊年御衰日存、宣令言上歟、無正體之由、申入候間、兩人

無殊儀珍重也、猶□□四日御尋處、卯酉之由、令言上畢、頗卒爾至也、兩人召

寄、爲向後堅可入魂者也、仍又歸參禁省、御申通具奏聞、御心得之由、勅答也、○中

略、此文十九日、惣而今日御參內式日也、雖然今日主上御衰日之間、延引也、

十一日辰雨降、今日御參內、依宰相中將殿御衰日延引、委注昨日記、

十二日巳雨降、自午半剋許雨脚休止、尤神妙也、○中今日年始御參內始日也、

仍著衣冠、午半剋許參小河殿、既御裝束□也、御供奉人悉參候、御牛□見苦□

伺□御座御藏糸鞆取出之懸替者也、仰調阿先之以新兵衛督局御出、散狀

進上之、書樣如此、

御參內

殿上人

室町殿御沓也、

言國朝臣

宣親朝臣

資氏朝臣

永康

諸大夫

行長

御身固

身固

禁裏衰日
引ニ依リ延
義尙衰日
引ニ依リ延

土御門有
宣勸解由
小路在通
小衰日ナ
諸フ

兩人誤
テ舊年ノ
衰日ナ勸
進ス

散狀

身固

土御門三位

未剋許御出、先有御身固事、予申次之、先室町殿御出座、御安座以後、告出座之由、於有宣卿、則參進、其儀如恒、事終退出、先入御、次宰相中將殿、令出座給、御身固(之方)儀同前、予參會禁裏、可遲々間、御出事具申置前藤宰相、不待入、御急參內直參會(御下力)車之所、先之御參之由、申入禁裏者也、參會面々勸修寺大納言以下、各有此所、先宰相中將殿於室町殿、宣親朝臣參進、取御劔、同卷上御簾、次行、長立御(前力)引下、引立、次御下車、資氏朝臣獻御沓、御前行、於准后御下車所、御蹲居、參會面々、祇候此所、次四足役所脇、次又行長、御下車、言國朝臣獻御沓、准后令過給時、宰相中將殿同被伴申、予奉扶持者也、令入左衛門陣代給、自高遣戶代御堂上、此時宰相中將殿御蹲居、予急堂上、以勾當內侍局申入御參之由、則可有御參之由、勸答、則御參、予卷上御簾、宰相中將殿同御參、參會面々庭上蹲居、則一獻奉仕、三獻之御酌、宰相中將殿令勸仕給、此時予持參御進上之御太刀也、平鞘置御前、御座之上、主上置樣如恒、宰相中將殿被進分也、今日御參內之儀、惣而宰相中將殿御參面也、准后悉皆被與奪申、故、近年此分也、御劔近年無御用意之間、內々被申出禁裏御物有御進上、以代

參内ノ次

義尙酌ヲ

參内ノ儀
義尙ヲ主
トス
義政義尙
ニ一
切ヲ
委ヌ

進上ノ劔
ナシ
御物ヲ申
出シテ獻

白太刀ヲ
義尙ニ賜

參内訪惣
用

物内々被進者也、次御酌有巡流、宰相中將勸修兵衛督、予侍從、予如初卷上御簾、其後次急下殿、先宰相中將殿令下殿給、御蹲居庭上、予奉扶持、次室町殿御下殿、御沓以下、役人如初、致御乘車所各參會、每事無爲珍重也、歸參禁省、以勾當內侍被仰下云、今日御參內之儀、千秋萬歲日出被思召、殊恒例之御太刀御進上之間、白太刀一腰任嘉例被進之、令持參、珍重之、由得其意、可申入由奉勸命、則參小河御所、以新兵衛督局申入仰之旨、得其意、可申入由御返事也、白太刀ヲハ進宰相中將殿所也、御平鞘相公羽林御進上之故也、同由同仰也、仍則歸參禁省、以勾當內侍局御兩所御申、奏聞、

廿日、丁晴、○中

御參内御訪方惣用之事

- | | | | |
|---------|-----|-------|------|
| 諸大夫一人御訪 | 五百疋 | 番頭六人 | 千八百疋 |
| 御牛飼御遣手 | 五百疋 | 御牛飼五人 | 千五百疋 |
| 車副二人 | 四百疋 | 殿一人 | 貳百疋 |
- 各參百疋宛
各參百疋宛
各參百疋宛

文明十一年正月十二日

□遣繩代 百疋

以上五千疋

□外當年御加増分

政所御訪去年就指 參百疋

□牛飼兩人追加 六百疋

〔兼顯卿記〕

岩崎文庫所藏 文明十一年正月十四日裏文書

あまれ御さんさるこくきん八時分のよし、さたに申入候つる、りの御と夜りよて候、御ちよくろへい八よりいやく御參あるへく候、又いつもいまつ上さほのやく御さんさる候、以下

〔晴富宿禰記〕

正月十二日、巳午雨洒、終日陰晴不定、室町殿今日御參内云々、

〔長興宿禰記〕

正月十一日、辰晴、今日准后并宰相中將殿御參内、年始御禮也、御乘車、前駟布衣侍等被召具之、但諸大夫參會云々、

侍臣、皇子仁勝ニ酒饌ヲ獻ズ、

〔兼顯卿記〕

岩崎文庫所藏 正月十二日、巳雨降、自午半剋許雨脚休止、尤神妙也、

中略、義政父子參内ノコトニカ、ル、上ノ條ニ收ム 今日於宮御方、恒例近臣申沙汰御銚子、仍予不退、出尙祇候者也、折二合、土器物一、御酒海一、内々進上之、自典侍殿局進

兼顯折等ヲ獻ズ

臨幸アラセラル樂七條手猿

上者也、近年如分嘉例也、秉燭程主上臨幸、宮御方伏見殿以下人々同參候、七條手猿樂大夫西河男申微聲、内々被構舞臺、終夜大飲御酒也、鷄鳴之後歸家、

〔親長卿記〕

正月十三日、晴、於宮御方有一獻、内々近臣人々申沙汰也、召進元長了、

義政夫人日野氏、美物ヲ廣橋兼顯ニ贈ル、

〔兼顯卿記〕

岩崎文庫所藏 正月十二日、巳雨降、自午半剋許雨脚休止、尤神妙也、

中略 今日自御臺御方美物兩種一、鶴一、鱈一、拜領之、年始之儀殊祝著畏存者也、民部卿局奉書續左、以書狀祝著之由懇申入、又以參仕御禮申入者也、

上さほより、みよてあく候へとも、二色万いり候よし、心えて申とて候、めてい々久しくと候、らしこ、

十三日、義尙、義政夫妻ヲ伊勢貞宗第二饗シ、猿樂ヲ張行ス、

〔兼顯卿記〕

岩崎文庫所藏 正月十三日、午天晴、早且自宰相中將殿有御使、

今日毎年之御成被申之、必如毎年可祇候由仰也、則對面御使、今日御成之樣上様御申之儀、千秋萬歲珍重存、殊祇候之儀被仰下、祝著之至畏入存由、得其意可申入由返答、午半剋許室町殿御臺御方等渡御宰相中將殿、則參候者也、

文明十一年正月十三日

二三〇

細川政國
同政之伊
勢貞宗酌
ヲ勤ム

藤亞相(武者小路)、齋世(高倉)、前藤相公(永繼)、頭中將實興朝臣(正親町三郎)、拾遺政資藤侍從永康等參會、三獻供御等參後、猿樂始之、於御馬屋各見物、御供衆等大略皆參、室町殿御臺御方御酌有之、參簾中被下之儀如每度、御供衆細川右馬頭(政國)、同兵部少輔伊勢守父子等參御酌、自餘輩不參也、室町殿時宜快然也、勿論々々、幸甚々々、及曉更還御、其後藤亞相、予兩人參常御所、今日之儀珍重之由、令言上者也、彼亞相爲醉狂持參御盃、予所持歸家、每事無爲珍重々々、

〔晴富宿禰記〕正月十三日(庚午)、晴、終夜大風吹、自今朝止、已終以後又吹、室町殿

渡御(伊勢)軍御所(伊勢)守宅勢有猿樂云々、

十五日(壬申)、晴、風吹、餘寒甚、於將軍之御所(伊勢)守宅勢有猿樂、門役人喧嘩出來、無程靜謐、

喧嘩

〔後法興院政家記〕四月十三日(庚午)、晴、風吹、左兵衛佐賢房、楊琳院等來、今日武家渡御宰相中將殿御方云々、御留守間(伊勢)可御座敷并御庭之由、自新兵衛

政家小河
第ヲ觀ル

督局有音信、内々被申入云々、仍晚景參御所、凡御座敷御庭之躰、無比類事也、於山被勸一盞、次於庭上、又有盃酌、頗及大飲、女房一兩人被出逢、亥刻許歸宅、小童令同道、月明々催興了、

廿八日(乙酉)、今日武家有猿樂、○二十八日(猿樂ノ)、便宜並ニ收ム、

大乘院尋尊、一條兼良、二條持通等二物ヲ贈ル、

〔大乘院寺社雜事記〕七十六 正月九日、

一來十一日、京上人夫事仰付之、横田、若槻、倉庄、高田、服、小吉田、

十三日、雪下、

一禪閣御楹一荷一面、大閣御楹一荷一面進之、横田一人、高田一人、宗順上落、

十疋下行、人夫兩人分八疋、横田三疋、

廿日、

一陽明御所御楹一双一籠一連進之了、

十四日(辛未)、義尙ノ近臣、相國寺常德院萬松軒ニ迫リテ、狼藉ス、

〔晴富宿禰記〕正月十四日(辛未)、晴、今夕常德院万松軒主(伏見殿親王御舍勢州弟、室町殿御猶子)、御方御所御座東方有此寺、依飛礮事、武邊輩押寄、此寺、狼籍之至、希代之事共

萬松軒ハ
貞宗第義
尙座所ノ
東方
飛礮

也云々、

十五日(壬申)、三毬打アリ、

〔親長卿記〕十 正月十五日、晴、參内、御祝之儀如常、及夜陰、有小三毬打、(御前近臣)

文明十一年正月十四日 十五日

二三一

等青侍

十七日、戊甲幕府的始、義政夫妻之二臨、

〔文明十一年記〕正月御的、和歌、御會、赤後、出仕、少々、記之

一御方御所様御的被遊事、文明七年より被遊、御相手細川民部少輔殿、政春也

一色五郎義春の、同八年より御相手義春も參勤也、御的射手衆仕る、文

明十一年亂後始之也、其以前ハ弓太郎一人挿物仕候也、

十七日、

一御的始在之、一亂中ハ弓太郎とはミ物仕之、當年如先規在之、

一大御所様上様爲御的御見物之、御方御所様へ御成在之、御盃酒數獻參、還

御、午刻也

一射手衆、

一番

二番

小笠原刑部少輔

富永五郎

六

朝日三郎

本郷與三郎

六

三番

射手

射手衆亂後始メテ參勤ス

射手前後ヲ爭フ

太刀持大館尙氏

祇候人

相伴衆

外様衆

陶山又次郎

五三度めよ弓取おこす

小串次郎

五

一小串朝日、本郷意趣を申、之ハらくどうぞありて、申の刻過而、酉刻も仕也、

一御所ハ伊勢守宿所も御方御所様御座也、弓もち北方、仍東向之中門へ御出成て御見物、其次も御もり、もて、大御所様上様のもんちうよも御見物也、

一御劔三銘、大館治部少輔被持之、

一祇候人數管領、政長昌山左衛門督殿、治部大輔殿、細川殿、山名殿、一色五郎殿、赤松、以上

御相伴衆也、

外様衆もハ、赤松又次郎、赤松越後彌五郎兩人祇候、大、名并此兩人うらうち也、此人數ハ北方祇候、各庭上也、此外御供衆御方衆以下者、南方こ祇候、各庭上也、

一射手御太刀拜領は、御對面所へ入御成て、東の御おし障子をあけらせす、ひろるむよて拜領也、役人伊勢七郎也、うらうち也、

文明十一年正月十七日

大名等太刀金ヲ上ル義尙的ヲ射ル一色義春義政ニモ太刀等ヲ上ル射手服裝

一大名、外様、御供衆、申次、御方衆、□□衆、奉行、少々御太刀金進上之也、
一御□進上以後、御方御所様御的被遊之、御相手一色五郎殿、
一御太刀金又万いる、公家少々、御供衆、申次、御方衆等計也、
一大御所様へも進上、これの書ふて也、
一射手衆亂已前のかさおりよ水干也、當年の事ハ、亂後未調之間、うらうち也云々、

〔益田家什書〕

二十

文明十一年正月十七日御的、應仁亂後、御再興也、御所ハ伊勢守貞宗朝臣享也

兵亂後再興
射手ノ記

射手

一番 小笠原形部少輔 ○○○○六 富永五郎 ○○○○六 陶山又次郎 ○○○○五
朝日三郎 ●●○○三 本郷與三郎 ○○○○六 小串次郎 ○○○○五

祇候人數

管領 島山左衛門 治郎大輔宗兼 細川九郎 山名
一色五郎 赤松兵部少輔

以上
外様衆

弓始亂後再興

赤松又次郎 江見美作次郎 赤松越後彌五郎 後祇候

以上北方著座、庭上也、

御供衆南方祇候、庭上也、

御劔役大館刑部大輔、御五人に祇候

御控ま戸東向也、ミモありて被御覽之、

大御所様并御臺様ハ、次の御座敷をん中より御見物也、今日渡御、

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

正月十七日、甲晴今日武家御弓始也、的之儀亂後退

轉、當年再興云々、於宰相中將殿有此儀、仍爲御見物、室町殿并御臺御方等渡、
御宰相中將殿云々、射手以下委可尋記也、弓太郎高名小笠原刑部少輔、其外朝日、
小串、陶山、富永六郎、本郷與三郎等也云々、射手番前後相論之事有之、仍及數、
剋始行之間、秉燭以後也云々、宰相中將殿御弓始今夜也、仍御禮有之、予尤可、
參事也、雖然於陽明沈醉之上、近年無沙汰之間、先令不參者也、後聞、寺也勸修大納言同不參云々、

〔親長卿記〕

十

正月十七日、晴、室町殿御的云々、於宰相中將殿御前有其儀

〔晴富宿禰記〕

十

正月十七日、甲晴晚、喰官務張行中酒等、御所的於御方御所、將軍

文明十一年正月十八日

二二六

宰相、中射之、亂後只一人射之、當年任本儀三番、六人、但直垂大口云々、大笠原刑部大輔朝日、小串、陶山、本郷、富長等云々、番次第可尋注、本郷、富長、朝日等不中矢有之、

〔武家年代記〕

下書

文明十一年正月十七日、弓場始有之、以略儀爲淺黃直垂、裏打

一番小笠原刑部少輔齋藤朝日三郎、二番富永五郎、本郷三郎、三番陶山又次郎、小串次郎、於御方御所有之、大御番爲御見物御成御簾内、御的奉行飯尾近江守任連、松田豐前守貞康、文正二年以來、亂中無弓場始今日再興、

十八日、乙亥是ヨリ先、禁裏御料所ノコトニ就キテ、義政ニ命ゼラル、所アリ、義政奉答セザルヲ以テ、是日、勸修寺教秀、廣橋兼顯ヲシテ、更ニ之ヲ督促セシメラル、

〔兼顯卿記〕

岩崎文庫所藏

正月十七日、甲戌晴、カ、ル、幕府弓始ノコトニ未半剋

許參近衛殿、先之有召、先參内、勸修寺大納言同祇候、禁裏御料所其後不及是非御沙汰之間、於于今、可被催促申歟否事御談合也、予申云、誠於于今可申驚條可然歟、然者今日者渡御宰相中將殿也、明日兩人參、先以私分内々可申驚由、令言上者也、可然由勅答、猶可祇候由仰也、被出天酒於番衆所、兩人可賜由

御的奉行

教秀兼顯
賜フ天酒ヲ

教秀兼顯
復奏

仰也、祝著之由申入之、

十八日、乙亥晴、自秉燭程雪降、八時參小河殿、中略先之勸修寺大納言祇候、禁裏御料所々御催促事、可申驚由、昨日依仰、兩人招民部卿局、先私分ニ申カ入者也、御晝以後可申入由返答、勸大則退出、

四月十二日、朝程自午半剋許降雨、已半剋許參内、條々奏事、午半剋相伴勸修寺大納言、參小河殿、自禁裏被申、中略諸御料所事等條々、催促民部卿局之處、今明日之間、必可令披露返答、小時歸參禁省、條々尙奏事、

烏丸資任、修理職ヲ怠リ、叡慮ニ背ク、

〔兼顯卿記〕

岩崎文庫所藏

正月十八日、乙亥晴、自秉燭程雪降、八時參小河殿、中略

以次御臺御方御雜談、當年烏丸參内之時、依時宜不快無御對面之由被聞食及其子細有御尋修理職方等事、諸篇公家奉公無沙汰、不斷御腹立也、若如然子細候、歟否由言上之處、然者叡慮之趣、尤之由仰也、

○資任叡慮ニ背クコト、其日ヲ詳ニセズ、姑ク本書ニ據リテ掲書ス、是ヨリ先、義尙、壬生雅久ヲシテ、初心要記ヲ書寫セシム、是日、功ヲ終フ、〔晴富宿禰記〕正月十八日、乙亥晴、將軍御方被仰官務、自去年初心要記一冊寫

文明十一年正月十八日

二二七

晴富片假
名朱點等
ヲ加フ

文明十一年正月十八日

二三八

之、片假名朱點等予加之、今日悉出來、此抄先年雅久宿禰隨仰書之、誰こか、
せ候へき哉之由、被尋申准后室町殿之處、雅久宿禰可然由被仰、仍被召公武被
仰之、書進上之時、被下御劔云々、其一本以前炎上之間、又被仰者也、

○義尚、隨心院嚴寶ヲシテ、菴玖波集ヲ書寫セシムルコト、便宜左ニ合
被ス、

〔大乘院寺社雜事記〕

○七十二 文明十二年三月二十七日裏文書

きと態々申候御方御所御用候菴玖波集可借給候、杉原ニ書寫事被仰付候、
返々無相違可借給候也、恐々謹言、

九月廿五日

嚴寶

〔(案)〕大乘院殿まいる兒御中

嚴寶

一條教房、父兼良第造營ノ材ヲ、土佐ヨリ京都ニ送ル、

〔大乘院寺社雜事記〕

○七十六 三月廿五日、終日雨下、

一家門造營用下山材木、自土佐御所和泉堺ニ被付之云々、御注文分、

一丈三尺柱

三十本四六

八尺柱

二十本上居シキ

ケタ

十本四七

ヌキ

五十本二間

和泉堺ニ
送ル

嚴寶菴玖
波集ヲ尋
尊ニ借ル

板

五十枚三七

以上百十本 板五十枚

文明十一年正月十八日

廿八日、

一衛門上洛、巨細御材木事申入意見了、約九二間進之條々申上之、

太田道灌、弟資忠及ビ千葉自胤等ヲシテ、千葉孝胤ヲ下總白井城ニ攻メ

シメ、尋デ、之ヲ陷ル、資忠戰死ス、

〔太田道灌狀〕

○肥前

一〇中略、道灌、孝胤ヲ界根原ニ破ルコト、翌年文明十一年向白井城被寄陣候、長陣事候

之間、諸勢打歸、難事成候之間、可被寄御旗旨、度々令申候處、無其儀候間、果

而及凶事歸國候、雖然下總飯沼城主(御地)ノ海上備中守、上總州聽南城主(御地) 法名道録ニハ上總介武田參河

入道以下、背孝胤各構要害、既三河入道者、子息式部丞國ニ差置、自胤方へ

令歸服、當國へ罷越候、兩國爲體如此候之間、於白井城下、同名圖書助并中

納言以下親類傍輩、被官人等數輩致討死候、此失お取合致校量候之處、遙

御方御德分候、其故者、如已前兩總州爲全、古河成氏様御刷如今者、恐者可爲御

文明十一年正月十八日

二二九

上杉定正
ノ出馬ヲ
望メドモ
應ゼズ
海上師胤
武田信長
等自胤ニ
歸服ス
資忠等死

文明十一年正月十八日

大儀候歟、○中

(朱書) 文明十一(朱書) 十一

十一月廿八日

(朱書) 山内家人(朱書) 式部丞
謹上 高瀬民部少輔殿

道灌判

二四〇

武田信興
降ル

七月十五
日落城

白胤石濱
ニ歸ル

〔鎌倉大草子〕

ル○上略、界根原合戦ノコトニカ、明を以て文明十一年正月十

八日、白井の城へ押寄る、道灌ハ歸陣して、太田圖書助と千葉の自胤兩大將
よて攻戦ふといへども、寄手ハ小勢みて叶ハズ、管領御馬をよせられ可然
由望といへども、是も延引し、敵ハ要害能して、力責み難落、去り初といへど
も勢を引け、上總の國長南の城主武田三河入道をせ死なれど、七月五日ハ
降参して、自胤ハ歸服を、丸ヶ谷の上總介を、同自胤へ降参を、下總國飯沼も
落城して、海上備中守師胤も、同じく自胤へ降参す、自胤千葉へ入部ハな々
れども、兩總州の士大形自胤へ歸服しける間、先長陣るれハ歸陣有へしこ
て、七月十五日、陣拂の體を見て、城より切て出されハ、太田圖書助資忠取て
りへし攻戦々るり、付入み打て入、城を終ハ責落を、去りれども、太田圖書助
資忠を初め、僧中納言佐藤五郎兵衛、桂縫殿助以下五十三人討死ハ、孝胤ハ
敗北をといへども、味方を長陣み勞し、去りて、責入らハ、自胤ハ石濱ま

白井城ニ
城代ヲ置
ク

て開陣を、然りといへども、白井城ハ自胤へ領して、城代を置へらばなり、

〔鎌倉大日記〕

文明十一 七月十五日、總州白井城責落、

〔下總國小金本土寺過去帳〕十五日

宇都木將監順、太田圖書、其外打死同類成等正覺、文明十一己亥七月、白井陣
ニテ、

〔太田家記〕

資清

資忠 源五郎、圖書助、自若
年攻國邑、屢軍功多

文明九年四月十日、於川越外邊、資忠ト矢部兵庫助勝景合戦、

同十一年七月十五日、於總州白井陣、資忠討死、葬武州岩槻養竹院、法名

義芳永賢

某源五郎

〔寛政重修諸家譜〕

二百五十三 清和源氏
頼光流 太田

資清

源六郎、左衛門大夫、備
中守、致仕、剃髮、號、道真

資長

初持資、鶴千代、廣源六郎、左衛門大夫、備中守、
從五位上、正五位下、入道、號、道灌、○事蹟略ス

文明十一年正月十八日

二四一

資忠 圖書助

禪釋叔悅 武藏國足立郡藤浪村密嚴院の住職たり、

資忠 文明三年、下野國佐野越前入道をせめ、また佐貫庄立林をよひ舞木の城攻に奮戦し、功をあらはすにより、七月二日、慈照院義政より、書をたまはりてこれを賞せらる、十年七月十五日、下總國臼井の戦に討死す、

○道灌、孝胤ヲ下總界根原ニ破ルコト、十年十二月十日ノ條ニ、兵ヲ武藏久下ニ出シ、忍城ヲ聲援スルコト、本年十一月二十九日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔鎌倉九代後記〕 成氏、○中略 同十一年七月十五日、太田道灌下總國臼井城ヲ攻ム、此時鶴臺ニ始テ城ヲ構テ、臼井城ヲ落ス、○國府臺築城ノコト、十年十二月十日ノ條ニ見ユ、

〔鎌倉管領九代記〕 五 太田道灌築鶴臺城、

文明 同十一年七月、下總國臼井乃城一揆、こり、管領定正、楯をけき、近隣を掠め、遠境ををびやりと聞えしり、太田資長入道々々灌、三千よ騎を率して押よせぬ、され共城つよくしてたやまく落難く見えしり、鶴臺よ向ひ城をかまへ、さうりことを免くらし、城中よ返り忠乃者ありといとせ

々れば、諸兵それよ疑がひ出て、拔々よ落うせぬ、とつうよ廿四人に成て、城乃内さひりへり、さるを見えはし、寄手三千よ騎、同じき十五日乃未明に、関と懸りて責のやり々れ、城中廿四人比者共、思ふやど戦りふて打死、城よ火をかけ、勝時を作りて引て歸る、

〔千葉臼井家譜〕 太田道灌攻臼井城記道灌江戸城主也

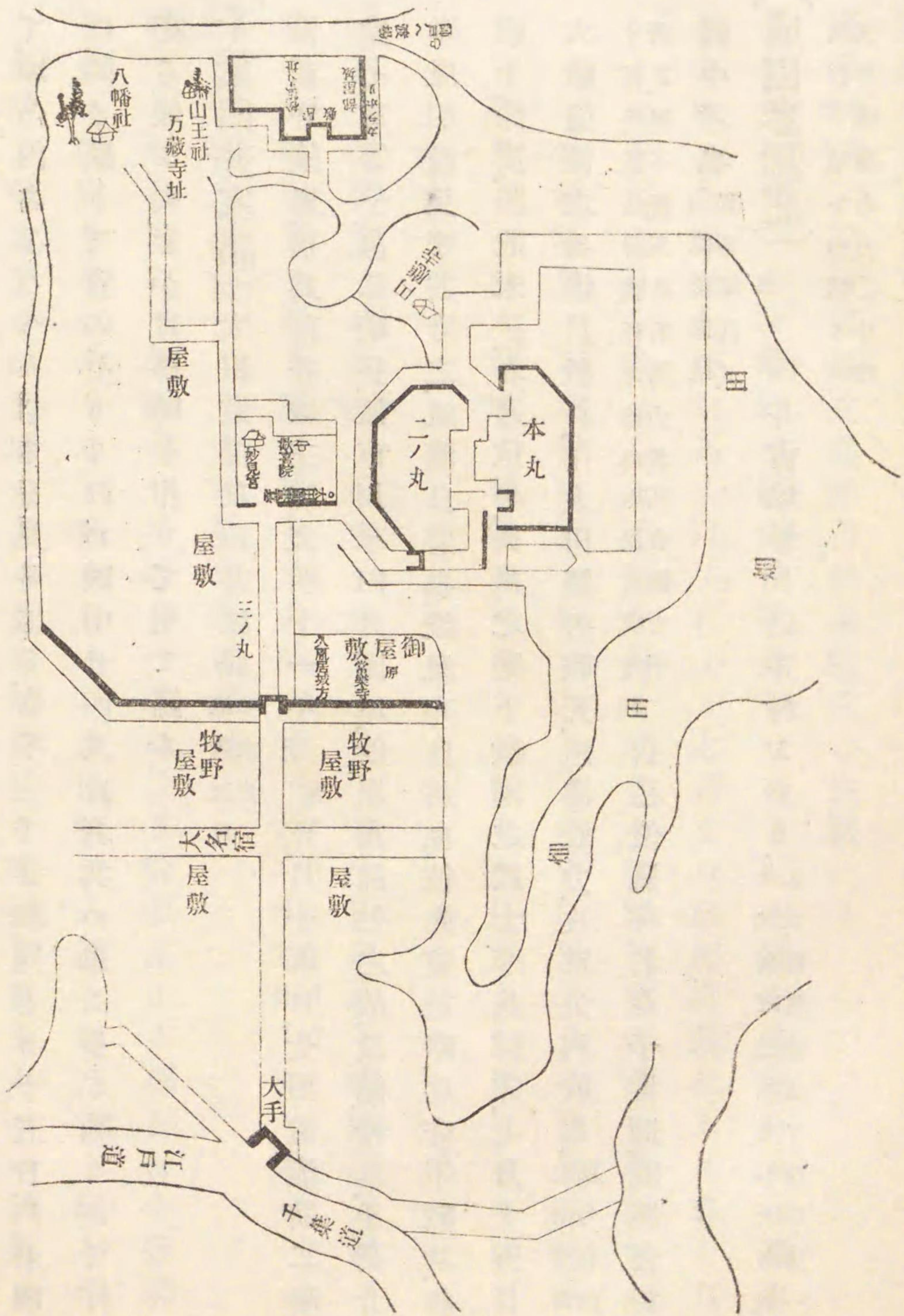
備前守俊胤、前爲臼井城主時、文明十一年己亥正月十八日、太田道灌將二階堂七黨等一萬餘騎兵、渡市川來臼井圍城、俊胤預聞知之故、設備待焉、千葉介孝胤引援兵來共守之、道灌良將也、俊胤亦良將也、彼此盡計略、攻守爭戰功、相戦十餘度、勝敗未決、春過秋來、長尾之麾下數國之武士來共援守、七月十五日、大戦道灌之兵、伏尸數百、弟太田圖書戰死、道灌脱力、攻軍失利敗北、太田圖書墓今在白井郭外、蓋是所戰死之地也、里民有疾疫、則自是俊胤聲名高于世間、威風奮於祈之、無不應、夫生有勇力者、死有神力乎、 自是俊胤聲名高于世間、威風奮於國中者也、○總葉概録

〔成田參詣記〕 三 臼井古城址 臼井村よあり、今此臺町往來を大名宿又外城臺あり、○中略

圓應寺所藏臼井故城圖

文明十一年正月十八日

文明十一年正月十八日



二四四

太田圖書墓

白井村歡喜院と云寺の辰巳方にあり、

〔下總舊事考〕

十一

白井故城址、在白井臺町、今臺町往來地稱大名宿、圓應

寺南方臨沼處稱中城、○下

〔花押彙纂〕

部ガ之 太田資忠

面高野屋敷

○黃梅院文書

文明十年十二月十七日書狀

十九日、丙義政夫人日野氏ヲ召シ、宴ヲ賜フ、義政モ亦參内シテ之二侍ス、

〔後法興院政家記〕

四

正月十九日、丙夜來小雪、○中

今日武家兩所、御臺參

内云々、自御所給一獻云々、

〔親長卿記〕

十

正月十九日、晴、依召參内、室町殿有御參内、自禁裏有御一獻、

文明十一年正月十九日

二四五

參會人々如例七獻之後早出了

〔兼顯卿記〕

○岩崎文庫所藏

正月十日、卯、朝程天晴、自四時分雨降、○中直參内、明日御參内、定而御臺御方不可有御參、仍明後日御參内事、爲禁裏可被申由、昨日御談合間、可目出之由、令言上者也、仍今日參御臺御方、可申入其旨之由、勅定也、仍急參小河殿、於御臺御方申入之處、御袴以下御不具之間、俄御參難事、行、可被如何哉、先勅定之趣、祝著畏被申、但此子細得其意、可申入由御返事也、但御下姿御カ井ト有勅免者、雖明後日可有御參由、内々兼顯可覺語由仰也、有御參者、室町殿同可被同道申様、可申入由勅定也、仍其子細申入處、畏被仰下候、雖何時、可有御祇候之由、以春日局被仰下者也、則歸參禁裏、以勾當内侍局奏聞御返事之旨、然者當時行宮儲御所也、不可苦、以別勅、雖御下姿可有御參内之由、可申入旨重而勅定也、然處明日御參内始儀、宰相中將殿御衰日也、先日伺定日、有宣卿、同在通朝臣兩人相尋御衰日處、卯酉之由、兩人同申間、御治定之處、立春以前舊年御衰日存、亘令言上歟、相勘之處、所詮辰戌也、仍急馳參小河殿申入此旨處、然者可爲明後日、十二其旨得其意、申入禁裏之由、仰也、兩人言上之旨、立春以前御尋之間、舊年御衰日存、亘令言上歟、無正體之由

日野氏袴
等不具ニ
依リ急ニ
參内スル
能ハズ

下姿勅免
アラバ參
内セン
義政ノ同
伴ヲ望マ
セラル

行宮ナル
ニ依リ別
勅ヲ以テ
下姿參内
ヲ許サル

義尙參内
始チ延引
ス

日野氏ノ
參内延引
ス

勅使廣橋
兼顯召宴
ノコトヲ
日野氏ニ
告ケ

邦高親王
及ヒ若宮
等モ臨御
セラル

義尙ヲ召
サル

申入候間、兩人無殊儀、珍重也、猶□□（去カ）四日御尋處、卯酉之由、令言上畢、頗卒爾至也、兩人召寄、爲向後堅可入魂者也、仍又歸參禁省、御申通具奏聞、御心得之由、勅定也、仍先明後日御臺御方御參内御延引也、定日重而可被申由、仰也、十八日、亥、晴、自秉燭程雪降、八時參小河殿、明日御參内事、先日内々以私分且可申入由、依仰申入了、其後爲勅使未被申間、今日可參申由、昨日勅定故也、先之御用事有之、先可參内由、依仰先參内、自其直參小河御所者也、○中予尙祇候、御參内事爲申入也、御震良久、仍終日祇候、秉燭後御晝也、於東御所御湯殿之上、入御臺御方見參間、直申入勅定之旨處、仰之趣、御祝著之至也、必可有御參、得其意、可申入由、御返事也、室町殿御參事同申入處、仰畏被申、必可有御祇候、由、同御返事也、○中頃之後參内、兩御所御返事趣申入者也、及半更歸家、十九日、丙、或晴、或雪、午半剋許著衣冠參内、御臺御方室町殿御參内故也、先之既御參御直廬、仍參御直廬方、小時御參御前、予勅申次、如每度、三獻室町殿御酌也、近臣以下祇候輩悉巡流也、三獻以後、伏見殿若宮御方御出座、御比丘尼御所々々、二宮等同御參、仍雖無指事、宰相中將殿有御參、可被悅思、召由、爲勅使可參申由、以典侍殿局被仰下、奉仰則參宰相中將殿、以女中申入勅定之趣

風氣ノ故
ヲ以テ辭
ス

終夜大飲

義尚奈良
酒ヲ獻ズ
女房奉書
ヲ賜フ

日野氏ヲ
主賓トス

文明十一年正月十九日

二四八

之處、仰之旨先以畏存候、尤可有御祇候之處、一兩日聊御風氣之間、難有御參、得其意可奏聞之由御返事也、歸參禁省、以典侍殿申入御返事之趣者也、萬松軒御喝食御所同依召有御參、終日終夜大飲御酒也、鷄鳴兩三度之後御退出於御直廬、又典侍殿、局爲申沙汰參御盃、仍天曙程還御、亂舞微聲等如恒、公武時宜快然也、尤以珍重々々、今日御參内之儀、御臺御方當年未御參間、自禁裏御沙汰也、仍奈良酒一荷進上禁裏、女房奉書如此、

文のやうひろうして候、おほしめし候、す御ふる万いり候、ことこ御よ
うゐも候、ぬる中とて、よろこひおほしめし候よし、よく申とて候、いり
やうよも御やうしやう候て、よく御去、こう候へく候と、をふしく申とて
候、かしこ、

〔晴富宿禰記〕

正月十九日、丙晴、室町殿、同御臺、將軍御方御參内、自禁裏御臺
ヲ本ニ御招請之故也云々、

〔長興宿禰記〕

中 正月十九日、丙晴、今日室町殿准后并宰相中將殿、御臺一
位殿御參内、有御一獻、入夜數巡大御酒、及曉天御退出云々、

義尚、石清水八幡宮ニ奉幣ス、

亂後始メ
テ奉幣ス

〔文明十一年記〕 正月十七日、

一八幡御幣事、明後日十九、可參也、御行水よて、可爲御朝精進之由、善法寺被
申入之、此御幣事、雖每年之儀、候、一亂中ハ無其儀候、當年より如先規可
參云々、

齋藤妙椿、織田敏定ト和シ、清洲城ノ圍ヲ解キテ還ル、

〔和漢合符〕

十 文明十一、己正月十九日、持是法印解清洲之圍而歸、濃尾略

和親、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 正月廿七日、

一尾張國合戰、二郡分織田大和安堵、持是院與和談之由云々、則持是院引退
云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十八 文明十一年四月裏文書

持是院和與候て、二郡宛分候て、歸陣之由風聞候、
皆々物忬中々無是非候、不しもち人夫上候て、ちと給候へく候

大乘院殿へ申給へ兒御中

嚴寶

〔大乘院寺社雜事記〕

六十七 文明十一年三月十七日裏文書

文明十一年正月十九日

二四九

妙椿モ二
郡ヲ領ス

敏定二郡
ヲ領ス

諸人幕府
ノ命ヲ奉
セシテ
幕府財ヲ
蓄フ
伊勢貞宗
利ヲハカリ

近江ノ亂

若狭三方
ノ代官

一 條家ノ
經濟

文明十一年正月十九日

二五〇

諸人上意をも聞入候に候間、公方よも則御還念候て、一分是も腰こま
り候候てのよて候間、七萬貫計先御倉こ上様御重寶入候歟、此外利錢
者不知員數候、伊勢守是も質を執候て、一分腰こま候、有興事共候歟、
新御所御上洛目出候、○大乗院政覺京都ニ到ル、此方も隱密候、一ヶ條事、春
ト、二十五日ノ條ニ見ユ、永の御沙汰可然候、惣云京都公事一向上意と申事、いかある物までも不用
申候、國の儀こてよもつよく候へ、則京までもゆよく候事までこて候、
只御手こ入候のんまる所こ、彼院領一けりともめされ候て可然候りと
存候、いゆくも此分候、

一 尾州事、和與分こて、持是院歸陣之由申候、目出候、

一 江州事、越中勢今春上洛必定りと申候、是又都彌物恐之基候歟、比興事候、

一 竹内伏見殿若宮舊冬入室事、聖護院未門主あし、○文明十年十二月
二十九日ノ條參看、

一 三方事、已以後狀を郡代出候り、罷下候て、代官事申定度心中候、

一 廿五日、九條殿拜賀候、身躰共無覺悟、あにとも不心得候、乏少之躰までこ
て候、○文明八年五月
十三日ノ條參看、

一 自當月御まされ、春夏秋冬まであにと可有沙汰候哉、珍事、毎月六石入分候、

せめて五百貫之家領候にて見えざるまでこて候、うつゝあき式まで
こて候、自土佐あ流く可上洛之由申候、くせ事候、恐々謹言、

正月廿九日

嚴寶

〔表書〕 大乗院殿まいるへく候兒御中 嚴寶

○妙椿、織田伊勢守ヲ援ケテ、敏定ヲ清洲城ニ圍ムコト、十年十二月四

日ノ條ニ見ユ、

二十日、丁義政夫人日野氏、義政父子ヲ饗ス、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏 正月廿日、丁晴、餘醉休息之外無他、今日御臺御方被

申准、后宰相中將殿等一獻云々、仍美物兩種維三進上御臺御方、以書狀遣民
部卿局、御返事如此、

文のやうひろうして候、ほこことよへ之御玄こう候て、めてよくおぼし
めし候、又この二いろふいり候、おもしろくめてよくおぼしめし候て、御
しやうくむん候のんまるよし、よくく心えて申とて候、うしこ、

二十一日、戌近臣、酒饌ヲ獻ズ、

〔親長卿記〕十 正月廿一日、晴、有一獻、近臣申沙汰也、

文明十一年正月二十日、二十一日

二五一

廣橋兼顯
美物ヲ進

日野氏返
書

〔京都御所東山御文庫記録〕

○山城

御湯殿上日記

八月十一日、御し

たろ、女さうさちをいらせらるゝ、月御らんせられて、御さか月をい

○八月十一日、女官食籠ヲ獻ズルコト、便宜合致ス、

二十二日、肥邦高親王、納妃ノ議アリ、

〔晴富宿禰記〕

正月廿二日、卯晴、八幡牛玉到來、進和字狀於二條殿、今日癸未

〔政覺〕

參賀之事等言上了、又殿中前關白殿姫君ヲ、伏見殿へ可被迎取申之事、可爲

如何哉、自妙蓮寺内々傳達、而竹園被仰予之間、粗尋申、予可參之由御返答、

廿六日、未晴、參二條殿之處、大乘院新門主御上洛、今日入御于殿中、御一獻之

間於御方御所、依仰奉待之、被下一獻了、暫而大閤御出座、今日參仕事、内々申

入事有之、其謂前殿下之姫君、十三、自伏見殿被仰之旨有之間、先日以狀言上

了、直可聞食、可參之由被仰之故也、但只今大乘院御入忿劇之間、一兩日中重

可參云々、

廿九日、丙晴、二條殿女中有文、姫君御事、自伏見殿被申事、予傳達之間事也、

〔實隆公記〕

五

文明十二年八月十二日、申陰、入夜雨脚甚、略、中、今夕式部卿

宮上薦、右府息、去年、姫宮降誕云々、父公亭御産所云々、

親王二條
ヲ政嗣ノ女
ナ選ナル

政覺上洛
訪フ
親王ノ晴富
ヲ政嗣ニ仰

壬午晴富
親王ノ仰
ヲ政嗣ニ

菊亭教季
ノ女參入

○菊亭教季ノ女參入ノコト、便宜合致ス、

二十四日、辛巳、月次御樂始、

〔親長卿記〕

十

正月廿四日、晴、今日有月次御樂始、元長參仕、今日始而元長

郢曲參勤、師範綾小路中納言入道也、當番進元長了、但入夜予可祇候之由有

仰、召具元長、有手□樂、如形、

〔京都御所東山御文庫記録〕

○山城

御湯殿上日記

八月十日、○中宮

此御方は御樂あり、

九月十一日、○中宮、御方は御樂よて、樂人さち御てうしをいらせらるゝ、

うるう九月廿一日、○中宮、御方は御樂あり、わうしきてう、さうまく、

一のてう、きしゆんらくのさち、かんぬりいせいらく、まをいらく、へんさん

らくどりのきう、とて、御さう月うとをい、

十月十四日、御樂うけりぬ、い、るよよりて、内々れさんしゆ所よてあり、

しみ殿御まいり、御さるをいらせられて、御さか月をい、

十一月五日、宮は御方は御樂あり、ふしみ殿御方いり、

十二月三日、宮の御方よては御樂あり、

皇子第御
樂

手猿樂

甘露寺元
長始メテ
郢曲ニ參
仕ス

山井景兼
參仕
邦高親王
參内

四日、御樂けふもあつ。

○八月以後御樂ノコト、便宜合致ス、

二十五日、壬午月次連歌御會、

〔親長卿記〕十 正月廿五日、晴、○中次依召參内、○中次有御連歌一折、畢予退出、

二月廿五日、晴、依召參内、有御連歌、治朝臣

御發句 東風ふてよしや宮木の花はかぞ

脇 梅かゝのこせさくらさくろけ 權帥

〔新撰菟玖波集〕一 春連歌上 文明十一年三月廿五日、内裏にて百韻のれんかに、

あらましの山こそくるゝなかめなれ

雲かはなかもあすやたつねん 前大納言雅親

〔親長卿記〕十 四月廿五日、晴、參内依召也、有御連歌、

〔新撰菟玖波集〕九 戀連歌中 文明十一年五月、内裏にて百韻連歌に、

ねよとつけぬるかねはうらめし

二月連歌 御會 御製 脇句葉室 教忠 三月連歌 御會

四月連歌 御會 五月連歌 御會 御製

六月連歌 御會

箴ヲ以テ 連歌連句 兩席兼作 人ヲ定ム

御製

人數 聯句人數

夢に行き夢にくるともたのまめや 前大納言雅親

〔十輪院内府御記〕 六月廿二日、參番、明後日可有御連歌云々、

廿五日、晴、已剋計乘輿參内、先於新相公羽林第著衣冠參内、於奥御座敷被開和漢之席、兩席可兼作之、衆豫被取孔子、漢勸修寺大納言、同勸解由小路前中納言、和勸修寺中納言、和新宰相中將、和姉小路三位、余等也、主上御座南面、漢主東面、和主西面也、執筆兩人參上、先被出漢御發句、次連歌、

消暑紅蕉雪 木をまける鳴よあ茂葉の夏の池

生涼翠竹颺 日かけもはゝぬ岩はまゝし （字カ）

五十韻以後起御前、於御番衆所湯漬有之、兩峯之柳雖可類、未秉燭之前句舉了、次御盃持參、新宰相御陪膳、御盃順流之後、余早出了、歸路及暗夜之故也、廿六日、自三條音信、昨日殘多之由有勅定云々、

〔親長卿記〕十 六月廿五日、晴、參内、依召也、有御連歌、御製、權帥、中院前大納言、（白川忠高）四辻大納言、（山科）予、（兼小路）民部卿、（田中）姉小路三位、言國俊量、重治等朝臣也、有御聯句、同席

相並有之、御製、勸修寺大納言、（高野）勸解由小路前中納言、勸修寺中納言、（經茂）承英書記、（三條西實隆）玄修藏主、（執筆）新宰相中將、源富仲等也、兩座混亂、物忿無術、

七月連歌
御會
邦高親王
參内
人數

御製

八月連歌
御會

九月連歌
御會

人數

〔京都御所東山御文庫記錄〕

○甲二十一
山城

御湯殿上日記

七月廿五日、御を

んか、いつもの人をもて御さふあり、ふしみ殿も御まいり、

〔親長卿記〕

十 七月廿五日、晴、參内、依召也、有御連歌、伏見殿、中院前大納言、

勸修寺大納言、四辻大納言、予、勘解由小路前中納言、勸修寺中納言、經茂、民部

卿、新宰相中將、姉小路三位、俊量朝臣、重治朝臣等也、

露□□□うめける梅の紅葉哉 御製

〔京都御所東山御文庫記錄〕

○甲二十一
山城

御湯殿上日記

八月廿五日、略中

いつもは御人をもて御せん歌あり、ふしみ殿も御まいり

九月廿五日、略中、いつもの御せんかあり、

〔十輪院内府御記〕

九月廿五日、御連歌參候、

〔親長卿記〕

十 九月廿五日、晴、依召參内、有御連歌、權帥、教忠、中院前大納言、

通秀、勸修寺大納言、教秀、予、勘解由小路前中納言、高清、民部卿、忠富、新宰相中

將、實隆、姉小路三位、基綱、俊量、重治、執筆、等朝臣也、

〔實隆公記〕

五 九月廿五日、寅、霽、今日禁裏御連歌也、短日之間、可早參之由、

兼日被仰之間、已下刻參入之處、頭中將當番爲第二請取、可付著到之由、示送

之間、令領狀了、御連歌祇候輩、權帥、中院前大納言、勸修寺大納言、按察、勘解由
小路前中納言、民部卿、下官、姉小路三位、俊量朝臣、重治朝臣、執筆、等也、初夜時
分事了、即退出、

今日御發句

夕霧の晴間にあくる木すゑ哉

權帥

時雨しあとのけさの紅葉ゝ

按察

秋ふかき外山の小鹿聲ゝてゝ

勘解由小路前中納言

風ころかよへ小田の 一かゝ

實隆

浪かへる湊こ船のおきかへり

抑御發句松のさて蕪のぬきををる錦哉、夕霧の御發句の、何可被用哉之由、兼

日被仰之間、□夕千万感慨深之由言上了、被用之條高名歟、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

○甲二十一
山城

御湯殿上日記

うるう九月廿五

日、御せん歌いつものおとし、略中、ふしみ殿御まいり、

〔十輪院内府御記〕

閏九月廿五日、御月次也、參候事可爲辰剋云々、仍恐參入、

新調袍也、脇被亂上首可申入云々、令祝著了、

上首ヲ閣
キ中院通
秀ニ脇ケ
メナ付ケ
シ

閏九月連
歌御會

發句御製
脇句葉室
教忠
甘露寺親
長
勘解由小
路高清
三條西實
隆

文明十一年正月二十五日

二五八

人數

十月連歌
御會

十一月連
歌御會

十二月連
歌御會

〔親長卿記〕^十 後九月廿五日、晴、御月次御連歌雖有召、申故障之由了、詣高
雄寺、安禪寺殿紅葉御覽也、

〔實隆公記〕^五 後九月廿五日、未、晴、今日御連歌也、仍參內、若宮御方、式部卿
宮、權帥、中院前大納言、勘解由小路前中納言、滋野井前宰相中將、民部卿、下官、
姉小路三位、重治朝臣、執筆、源富仲等也、入夜事了、

〔京都御所東山御文庫記錄〕^{甲二十一} 御湯殿上日記 十月廿五日、○中
御をん歌いつものおどくあり、

〔十輪院內府御記〕^十 十月廿五日、御連歌不參、仍裝束等借遣勸修寺中納言了、

〔親長卿記〕^十 十月廿五日、晴、參內、依召也、有月次御連歌、元長執筆雖爲無
覺悟、依仰如形懃之、

〔京都御所東山御文庫記錄〕^{甲二十一} 御湯殿上日記 十一月廿五日、○中
略 御をんかいつものおとし、かち舟殿御まいり、

十二月廿五日、御をん歌あり、くろ戸の御庭ふしんよみちふさかりて、御み
まよて御さふあり、

〔親長卿記〕^十 十二月廿五日、晴、參內、依召也、有御月次連歌、

〔新撰菟玖波集〕^{秋連歌上} 內裏にて百韻の連歌侍しに、
おさまる秋とはるゝ雲きり

月のいろかせのあとより照そひて 前關白近衛

○二月以後、月次連歌御會ノコト、便宜合致ス、

皇子、^{仁、勝}笙曲ヲ豊原縁秋ニ受ケ給フ、

〔親長卿記〕^十 正月廿四日、晴、○中 今日仰云、明日宮御方管 笙、御傳受也、就
其賞事、^{秋朝臣望申一級、可與奪、}可爲如何哉、予申云、主上御傳受與宮御
方御傳受、可有差異歟、同事之樣所望不審、可被尋仰歟之由申之、仰云、叡慮爲
此分、仍主上與宮御方御傳受之賞爲同事歟、可注進例由、被仰言國朝臣、^{曲受}
奉行 後聞、無例也、

廿五日、晴、詣中御門許、有朝飯、女房已下盡罷出了、次依召參內、^{宮御方}有曲御傳受、各
申御禮、^{進御太刀、近例歟、}

幕府和歌會始、

〔文明十一年記〕 正月廿五日、

一和歌御會始

文明十一年正月二十五日

二五九

御傳授ノ
賞トシテ
縁秋三位
ヲ望ム
御傳授奉
行山科言
國

讀師飛鳥 井雅康
講師大館 重信
文臺伊勢 貞綱

讀師 飛鳥井右兵衛督 雅康卿
講師 大館治部少輔 重信
御文臺 伊勢七郎

發聲杉原 賢盛
人數太刀 ヲ上ル

一先文臺を置申て乃後に、御方御所様御著座、其後讀師參候、其後講師參候、
そのうちかうせうの衆まいり候なり、
一御方御所様御懷紙の御懷中よて、於當座御出候也、先規此分也云々、
一御所様御詠をい、はしつくりを更こよみあげ申、五度かうせらるゝ也、上
様御方御所様御詠をい三度も、
一飛鳥井との歌をい、杉原伊賀守賢盛發聲也、
一ひかうにて、御人數御太刀 金進上、
藤宰相殿 (高倉水鏡) 右兵衛督殿 (兼卿) 廣橋殿 (日野政安) 藤侍從殿
細川右馬頭 (政重) 大館刑部大輔 (政直) 少輔 上野刑部少輔
□□太郎 杉原伊賀守 杉原安藝守

以上此人數、御方御所様御懷紙よかさ秘らるゝなり、大御所様竝上
様御懷紙をいまさそへら秘、也、御懷紙の外候、へちにかさ秘ら

を候

人數事

伊勢七郎次郎 塀和筑前守 (政重) 伊勢次郎 安東平九郎
伊勢八三郎 塀和與次郎 歳阿彌 越阿彌
仙阿彌

以上 伊勢守其外不參有之、歡樂云々、

- 一御太刀進上已後、三獻まいる、
- 一御といせん、右馬頭、刑部大輔、治部少輔、刑部少輔、
- 一初獻、御酌廣橋殿、二右兵衛督殿、三獻め御方御所様、御ひは、藤宰相殿、二
獻め、御人數何も洩し出し有之、三獻め、御懷紙よかさねらるゝ御
人數のかりめし出し在之、
- 一藤宰相殿、飛鳥井右兵衛督殿、廣橋殿、各始御相伴、仍御太刀 金進上之、
- 一細川右馬頭、大館刑部大輔、始御會御人數よ被召加之、仍御太刀 金進上之、
- 一大館治部少輔始講師勤之、仍御太刀 金進上、
- 一内々御會始、去年二月廿五日より御始行也、先以内々御越候間、大名など

義政夫人
日野氏ハ
臨マズ

飛鳥井雅
俊疾ニ依
リ列セズ

文明十一年正月二十五日

二六二

未被召加之、但□の御一獻など、先規のことく也、上様今日御成の御座な
し、

〔長興宿禰記〕

中 正月廿五日、壬午、晴、今日宰相中將殿和歌御會也、飛鳥井侍

從雅俊、大納言入道息、細川右馬頭、大館刑部大輔等初參御人數云々、後聞、雅

俊雖被召加、依所勞不參云々、

大乘院政覺、奈良ヨリ京都ニ抵ル、

〔大乘院日記目錄〕^(政覺)三 正月廿五日、權僧正上洛、卅日下向、

〔大乘院寺社雜事記〕^(政覺)七十 正月廿五日、

一新僧正上洛、御共專實、昨日參向了、北面衆以下御共步行也、人夫田舎御領
七郷以下也、

卅日、夜雨

奈良ニ歸
ル

一新僧正今日下向、京都無殊儀云々、

〔晴富宿禰記〕

正月廿六日、癸未、晴、參二條殿之處、大乘院新門主御上洛、今日入

御于殿中、御一獻之間、於御方御所依仰奉待之、被下一獻了、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十七 ○文明十一年三月二十四日裏文書

二條持通
書狀

僧正御房上洛、祝著無極候、老母存命候て、入見參候て、悦喜中々難申盡候、今
ぞ御在京も候て、心靜申承候て、殘多候、殊面々二種々御ミやけ、御ミつ
らひおから、千秋萬歲祝著此事候、於以後者、相構て細々御上洛候者、猶々可
爲本意候、御宿事者、此方ニ可申付候、可被御心安思食候、尙々老母十七年入
見參候の事候間、悦喜申候式過高察候、事々難盡愚札候也、恐々謹言、

正月卅日

持通

大乘院殿

〔大乘院寺社雜事記〕

六十七 ○文明十一年三月二十五日裏文書

ふとく御れなり候て、御身から申入候へく候、このよし申給候、かし

まん御所さま御のやり候て、御めつらしくお母えさせをいしほし候、ま
の御事こ、お事も御申候て、御心もごあくお母えさせ致し、お母えさせ致し、又
御あふら給候、申ゆくしかく、御うれしくお母えさせをいしほして候、め
てく、

御ちこの御中まいる御返事申給へ

文明十一年正月二十五日

二六三

政覺老母
消息

文明十一年正月二十五日

二六四

政覺書狀
召ニ依リ
參内

〔大乘院寺社雜事記〕六十七 ○文明十一年三月二十九日裏文書
御書被下候、委細拜見仕候、彼方御極之事、尤之儀候、次今日廿九、必々可罷下
候處、御所さまより、いかさま可祇候仕候之由被仰出候、再三申候へど、〇御
書を堯善かゝへ被遣候間、是非こと上意之間、〇かゝも候へず候、晦日〇の
如何様候とも可罷下候、目出事〇罷下可申候之由、可令披露給候也、恐惶
謹言、

正月廿九日

政覺

兒御中
御返事

勸修寺門
跡常信執
申

二月大 戊子朔

二日、己東寺金勝院法印融覺ヲ權僧正ニ任ズ、

〔親長卿記〕十 二月二日、晴、參内同前、〇中勸修寺宮被申、金勝院法印僧正

事、奏聞勅許、

〔廿一口方供僧評定引付〕五 二月十八日、

一 融覺法印極官事披露了、

〔晴富宿禰記〕 二月廿五日、壬晴、融覺僧正宣旨遣東寺、

〔東寺執行日記〕十三 二月廿日、夜御影供、權僧正融覺出仕初也、故觀智院
宗杲權僧正者、一夏不及出仕也、於濃死去ナリ、

觀智院宗
杲美濃ニ
寂ス

六日、癸興福寺薪猿樂、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 二月六日、

一 薪猿樂始之、三座參上、寶生不參云々、

七日、初午、

一 寶生參申云々、

八日、

文明十一年二月二日 六日

二六五

四座參仕

文明十一年二月七日

二六六

建仁寺正
雲院ニテ
酒宴

一金晴座社頭ニ參申、

九日、雨下、

一依雨下薪猿樂無之、終日雨也、爲猿樂不便事也、

十日、

一金剛座社頭ニ參申、

十一日、

一觀世座社頭ニ參申、

十二日、

一寶生座社頭ニ參申、

十三日、

一薪猿樂四座於大門在之、事畢、七今日無爲無事也、

七日、^甲義政夫妻並ニ義尙、東福寺初午懺法ニ臨ム、

〔晴富宿禰記〕二月七日、^甲晴、風吹、室町殿并御臺、將軍御方、渡御東福寺初午

之懺法御聽聞、於建仁寺正雲院、^{梅花}自御臺申御沙汰、有御獻盃之儀、及昏黑

還御、

一條冬良、二條政嗣ノ女ト婚約ス、

〔大乘院寺社雜事記〕^{六十}二月十四日、^{雨下}

一二條御方前殿姫君、一條殿御方右大將殿和合事、先日七日爲松殿少將御

使被申定之了、珍重事也、

九日、^丙春日祭、

〔親長卿記〕^十二月八日、晴、自左頭中將^{宣親}、^{朝臣}尋春日祭左馬寮神馬事、御教

書之樣尋之、

就春日祭儀、左馬寮ヘの御教書案文所望候、此奥可注給候、誠恐謹言、

二月八日

宣親

春日祭當寮役神馬事、任例可令下知給之由、被仰下候也、仍執達如件、

二月

左中將

謹上 左馬頭殿

本儀ハ如此候、自然被申違亂人候間、只當其仁躰申事も、^{連練}其時者可爲中納言禮節候、當中納言被遊候者、

文明十一年二月九日

二六七

中山宣親
御教書ノ
式ヲ甘露
寺親長ニ
問フ

左馬寮神
馬御教書
案

上卿勸修
寺經茂
辨內侍不
參

春日祭左馬寮役神馬事、任
九日、晴、春日祭也、上卿勸修寺中納言經茂、外記史等參向云々、辨內侍不參如近例、參內
番也、

松明無沙
汰ニ依リ
祭禮翌朝
ニ及ブ

〔晴宿禰記〕二月九日、丙申雨降、春日祭也、上卿勸修寺中納言經茂、中殿外記賢
親、史盛、俊參向之、松明無沙汰、翌日到來、依之祭禮及翌朝辰刻云々、

十一日、戊戌晴、風吹、左端盛俊自那良上洛、春日祭依松明無沙汰及違亂、仍盛俊
申合渡社家之分者、以代物十疋、致無爲之儀、依之翌朝被行云々、祭事訖之後、
松明到來、不法無是非者也、亂中社家別而上卿以下出御訪、於于今者、不可沙
汰之由、再三及問答、究困之事、今猶同前也、於以後者、不可爲此儀、只今之儀先
如此間、可有沙汰之由、自上卿被下知之間、致其沙汰云々、盛俊去年祭雖參向
之、不被行之間、自公家御訪被召返之、仍今度御訪百疋、又其分被召返之間、無
足參向之處、社家訪可然事也、辨內侍等不參、

十二日、己亥天霽、春日祭松明遲々事、以盛俊申遣傳奏、廣橋相公、賜御教書、堅可
折檻之由、令申、同申遣奉行職事頭中將宣親朝臣、可進御教書云々、

〔大乘院寺社雜事記〕六十 二月六日、

一勸修寺權中納言光臨、一昨日自京都下向云々、來九日春日祭用云々、
九日、雨下、

宣親奉行
頭人

一春日祭、上卿勸修寺中納言、
〔春日祭歷名部類〕文明十一年二月九日、丙申、晴、祭、上卿權中納言經茂、辨內
侍等不參、奉行藏人頭左中將宣親朝臣、

十一日、戊戌越智家榮、春日社二詣ス、
〔大乘院寺社雜事記〕七十 二月十一日、

一越智今日社參云々、
○成身院順宣春日社參ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔大乘院寺社雜事記〕八十 六月朔日、
一去月廿七日、順宣成身院法師自京都下向、在佐河福智云々、廿八日社參歎云々、參

宮用也云々、去年二月朔日上洛以後、今度初也、京都儀諸篇無心元故下向
歎、如何、以上意可歸國條不可得也、剩京都ニハ、河內事色々及御沙汰云々、
旁以迷惑歎、

三日、小雨
下、
文明十一年二月十一日

一順宣方楹代貳百疋遣之、路次近日六借之間、相傳秋篠遣之了、返事到來、畏入、毎々御扶持無是非云々、爲參宮下向之間、以次社參云々、

十二日、己亥義政夫妻、義尙竝ニ參内、御宴ニ侍ス、

〔長興宿禰記〕中 二月十二日、己亥晴、今日室町殿、准后同宰相中將殿、又御臺

義政申沙
次當座和歌
行三十首張

一位殿等御參内、准后一獻申御沙汰、申刻御參、終夜御酒宴、天明御退出云々、
後聞當座和歌卅首、勅題御張行云々、

〔晴富宿禰記〕二月十二日、己亥天霽、室町殿御參内、一獻申御沙汰云々、毎年儀也、宮御方伏見殿可被招請中之由、准后殿、室町御約束云々、

皇子及ビ
邦高親王
毛亦御參
列

近衛政家、酒肴ヲ義政夫人日野氏ニ贈ル、

〔後法興院政家記〕四 二月十二日、己亥晴、御肴三種、南酒五荷、進御臺御方、

奈良酒

○松林院竝ニ興福寺、物ヲ義政等ニ贈ルコト、便宜左ニ合致ス、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 九月廿三日、雨下、夜大雨也、

一松林院得業今日上洛云々、御榼事公方、御方、御臺各二荷宛進上之云々、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 十二月廿三日、

一去十八日、自學侶公方へ御榼等進之、雖及數日、云承仕云加用、于今不下向

云々、伊勢守以下件者共於中途沙汰、禮錢可取之用キシマスル歟、比興事之由訓英申、

十三日、庚子能登永光寺ヲ祈願寺ト爲ス、

〔永光寺舊記〕登〇能

當寺爲御祈願所、可奉祈寶祚延長者、天氣如此、悉之以狀、

文明十一年二月十三日

(正觀町三條堂裏)
右中辨(花押)

永光禪寺住持

幕府室町第造營事始、

〔親長卿記〕十 二月十三日、晴、室町殿御事始也、

〔在盛卿記〕

一御所御普請始、并御築地始、御來作始日、

二月十三日庚子、時辰申、

正月廿五日

從二位在盛

二月十三日、庚子、辰時普請始并築地始、巽南一簣立南界様、二三杵被仰、奉行結城下野、杉原、(筑前)布施來謁、惣奉行管領、(筑前)島山之前、披露事由畢、面々歸宅、予

文明十一年二月十三日

賀茂在盛
日次勘進

惣奉行島
山政長

木作初
義尚臨ミ

三寶院立
柱

造作奉行
結城政藤
等
總奉行布
田英基
施英基
田貞康

諸將參賀

義尚義政
ルノ第二至

造營評定
諸家ナシ
テ築地ナ
築カシム

室町第裏
築地ノ民
屋ナ撤ス

文明十一年二月十三日

二七二

依管領伺候也、申時木作始也、御方御所御成、予并有寅列立、其後到新造庭
西方、大名、管領、細川九郎(政元)、山名(義隆)、赤松五人、各自先刻伺、唯御所様御寢殿
跡御停留、南面、先大工向冠木、翳繩墨三度、後下斧九度、被下御馬、次檜皮大
工、次壁塗、皆給御馬、次還御、各進御劔、其後參賀上御所、皆進上御劔、依御風
氣無御出座、次參賀三寶院、今日門跡御立柱也、仍進御劔退出、
御所様三ヶ條之内、御築地依假義無御方違、來廿一日四十五日定日數也、
日野第御方違後、廿二日可被築御築地云々、

〔長興宿禰記〕

中

二月十三日

子

晴、今日室町殿

花

御造立御事始也

先九年文

上、申刻大工以下番匠群參有其儀、將軍宰相中將殿渡御、於地上佇立被御覽、
諸大名、管領、畠山左衛門督、細河九郎、山名右衛門督、一色五郎、赤松兵部少輔
等五人參候、御造作奉行結城下野守、下條兵庫助、杉原安藝守、金山等祇候之、
惣奉行布施下野守、松田(貞康)豐前守兩人也、各參候之、大工男束帶、其外衣冠狩衣
直垂等相交著之、番匠參集之、檜皮師加治等、同著衣冠令出仕云々、於寢殿跡
有木作始之儀、御馬三疋被牽之、番匠檜皮加治等大工各拜領之、事訖管領以
下參賀御所、殿御所室町、被進御太刀、大名持、公武上下群參、次參賀准后御所、

小各被進御太刀、群參同前、其後宰相中將殿渡御、小河御所、有三獻云々、此御
造作管領爲惣奉行、用脚以下每事可被申沙汰之由、自去年被仰付、今年諸國
段錢可被懸之云々、

〔晴富宿禰記〕

二月一日

子

夜來雨、自午時止、昨日於官領左衛門督

政長

亭、有

花御所造營評定、被招結城下野、布施下野等羞朝飯、有終日之儀、被懸諸國段
錢、可有其沙汰、諸家可築々地云々、

十三日、庚、晴、室町殿、御造營御事始也、結城下野守昨日返報續左、
返報

廿二日、晴、聊風吹、室町殿築地有其沙汰、之由風聞、可尋記、

廿五日、壬、晴、兩三日室町殿築地、管領島山左衛門督、政長、築之云々、後聞、未築之、搔桁等
用意云々、

三月十五日、壬、晴、晝以後風吹、自黃昏雨降、室町第花御所、可有裏築地在家亂
立陣屋于今、皆被撤却、今日壞之云々、又御構中今申爲御構、町々巷所在家皆
壞之、今日所司代相觸之、俄撤却之、又切齋椽者有之、條里復本式可然事也、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十

二月十七日

文明十一年二月十三日

二七三

文明十一年二月十三日

二七四

一略○中(十三日)同日室町殿事始、惣奉行官領島山云々、新將軍入御車云々、大工以下三人御馬給之、四面築地ハ官領、赤松、山名、細川承之云々、其日諸大名御禮太刀進之、公家以下事ハ不然、

三月六日、

一昨日丸入道自京都下向、略○中京都ハ三寶院門跡被立之、作事元在所土御門万里小路云々、伊勢守之屋形立之、内者共各屋共立之、在々所々作事、室町殿ハ東西行四十丈、南北行六十丈之御地也、然而南北行四十丈ニツイテ被仰付之、南方二十丈ニハ小屋共在之故云々、色々懸錢共不知其數、堺坂本邊町人罷上事令斟酌云々、尤事也、諸國之進物ハ一向無之、如此無御成敗者、小事も公用不可有之云々、

〔武家年代記〕

下書

文明十一年正十三申刻、花御所事始、

○幕府、室町第修理段錢ヲ安藝ニ課スルコト、十年五月二十六日ノ條ニ、松田秀興ヲ諸國段錢奉行トナスコト、同年六月二十日ノ條ニ、段錢ヲ諸國ニ課スルコト、同年十二月十二日ノ條ニ見ユ、

隨心院嚴寶、播磨ニ赴ク、

三寶院ヲ其舊趾ニ建ツ伊勢貞宗第ヲ築ク室町第ノ廣表

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 二月十七日、

一略○中十三日隨心院殿播磨國御下向、

大内政弘、周防興隆寺ニ、石見高野寺ヲ安堵セシム、

〔興隆寺文書〕

四 周防

石見國邇摩郡高野寺事、以(大内覽)國清寺殿裁許、宥信法印已來、自氷上山管領云々者、早守先例、可有其沙汰之狀如件、

文明十一年二月十三日

左京大夫從四位下多々良朝臣政弘(花押)

〔參考〕

〔石見八重葎〕

三 邇摩郡上 眞高野寺 影向山 除地拾四石四
大家 本郷 井尻村 言

石見國卅三番札所、

影見んと鏡よ向ふ山なれの心の關もはるゝ高野寺

十六日、癸卯大和妙樂寺學侶、郷戶衆ト争ヒ、没落ス、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 二月十六日、

一舜恩自多武峯下山、公事有之云々、學侶ハ越智方者共也、悉以没落、郷戶衆ハ筒井方引汲者共也、大勢也、仍不和之故、學衆没落云々、可滅亡云々、珍事

文明十一年二月十六日

二七五

也。

十七日^辰、大和高宮某、越智家榮ト隙アリ、十市遠相、兵ヲ出シテ之ヲ援ク、

〔大乘院寺社雜事記〕^{六十} 二月十七日、

一今日十市方へ人夫事所望由仰之、百人分仰了、然而三輪千日經ニ、高宮^與

越方公事出來出陣也、歸陣以後可申付之由、返事到來云々、

二十一日、^申僧某、祇園社造營ノ工ヲ勦ム、

〔晴富宿禰記〕二月廿日、^丁晴、祇園宮仕一藤、教圓來談云、社頭可有造營、誓願

寺建立之勸進^{聖坊主}、^{十穀}經武聞企之、明日先可立木屋^{前西大南}、^{前南}之由語之、

○祇園社造營事始ノコト、十三年六月六日ノ條ニ見ユ、

義尙、方違ニ依リ、日野政資ノ第二之ク、

〔晴富宿禰記〕二月廿一日、^申晴、自晡雨、武家御方御所、^{將軍相公羽}爲御方違、

渡御日野侍從政資宿所云々、

東大寺東室^{光任}、越智公事出來、東室ハ逐電分在京云々、越中入善莊ノコトヲ爭ヒテ、京都ニ奔

ル、

〔大乘院寺社雜事記〕^{六十} 二月廿一日、

勸進聖十穀坊主

筒井順尊
成身院
宣等ノ給分

一東大寺東室^{光任}、越智公事出來、東室ハ逐電分在京云々、越中入善莊筒井成

身院等給分在之、四个年分四百貫可給之由、申懸之故之由、松林院僧正相

語者也、彼給分無跡形事申懸歟、凡當島山政長依扶持、彼庄家事ハ東室知

行之、越智并河内屋形トハ不相應方也、然間如此歟、不便々々、彼寺々務ハ

近年不及宣下未補者也、彼庄ハ西室可知行理運也、東室申落給之、

○光任寂スルコト、四月六日ノ條ニ見ユ、

朝倉孝景、越前大鹽八幡神社竝ニ劍神社ニ、社領ヲ安堵セシム、

〔大鹽八幡神社文書〕^前 越

當社領田島山林等事、任當知行旨、不可有相違狀、如件、

文明拾壹
二月廿一日

孝景花押

〔包紙〕
越前朝倉廣景ヨリ 神職 瓜生書物

七代孝景英林公之御一行二通、并光政副書也、

〔劍神社文書〕^一 越前

織田庄内田數壹町壹段小地利分、^{目録}封裏付別^番事、任買得當知行之旨、不可

有相違之狀如件、

文明十一年二月二十一日

文明十一年二月二十三日 二十四日

文明拾壹

二月廿二日

孝景花押

二七八

文明三年ノ六月十日ニ、朝倉殿越前國ヲ押領候也、

同十一年ニハ、義敏ノ御子松王殿有越前豐原寺ニ下著、而朝倉殿 與合

戰有之、

二十三日、庚戌皇子、勝仁石清水八幡宮ニ詣セララル、

〔後法興院政家記〕四 二月廿三日、庚戌晴陰、時々雨下、風吹霰降、今日若宮御

方八幡社ニ御參詣云々、御板輿、供奉卿相雲客直垂乘馬云々、甚聊爾至極、不

可然歟、

〔親長卿記〕十 二月廿三日、晴陰不定、時々雨下、當番召遣元長了、今日宮御方

御參詣八幡宮、兵部卿、宗綱、民部卿、忠富、已上與、言國資氏等朝臣已上兩御供

云々、

二十四日、辛亥米山寺賢遍ニ、護摩堂ノ造立ヲ聽シ、天下安全寶祚長久ヲ祈

ラシム、

〔歷代殘闕日記〕八十八 元長卿記

當寺事、造立護摩堂、可奉祈天下安全寶祚長久之由、被聞食訖、殊可抽懇祈之

由、天氣如此、悉之以狀、

文明十一年二月廿四日

左少辨判

米山寺賢遍上人御房

二十五日、壬子春日社臨時神樂、

〔後法興院政家記〕四 二月十六日、癸晴略、中傳聞、於春日社可被行臨時之

御神樂、七ヶ夜此儀邂逅事云々、大和國人越智有宿願事云々、定二條家門於

願主執行云々、堂上面々四辻宰相中將季經、一兩輩、其外地下樂人等參向云

々、二條大閣并前關白來廿四日下向、可有參籠云々、今度各出立并在南頗等、

爲越智沙汰可申付云々、

廿二日、己酉晴陰、自晚景雨下、略中自二條前關白被借用予指貫、借進之、南都下

向料云々、

三月八日、乙丑陰、時々小雨下、略中前關白一昨日自南都上洛云々、

〔晴富宿禰記〕二月十一日、戊申晴、風吹、久時來語云、今月於春日社七ヶ日可被

行御神樂、被召二條殿被仰付之間、樂頭事雖有望申之輩、久時元慶以來申沙

汰之儀言上之間、無豫儀被仰付云々、當殿下九條殿也、然閣氏長者、二條殿申

文明十一年二月二十五日

二七九

越智家祭
二條持通
シ之ヲ行
フシ之ヲ
持通政嗣
奈長ニ赴
キ參籠ス
政嗣甘露
寺親長ニ
指貫ヲ借
政嗣歸洛

文明十一年二月二十五日

二八〇

御沙汰、定有子細歟、七ヶ夜御神樂也、每度地下所作勿論、今度別而堂上所作人可參向之由、自二條殿被申請云々、

十六日、卯晴、於春日社七ヶ日可有御神樂、二條殿執御沙汰由、久時來語、今度初而堂上所作人可下向事等同談之、然者庭燎事寮官等有申旨之間、以和字書狀申入之處、大閣御返事如此繼左、○書狀所見ナシ

十七日、辰晴、職業言上、春日御神樂斑幔庭燎等事、重以書狀申入二條殿、廿一日、申晴、自晡雨、春日御神樂庭燎并斑幔事、自大閣被仰社家職業申狀、進之、之處、先規皆於社家庭燎役人有之、幔又社家用意之儀有之間、更寮家沙汰不及覺悟云々、

若宮ニテ
モ法樂ノ
神樂アリ
持通歸洛

三月四日、酉雨降、久時來、隨身一獻、春日神樂奉行之賀酒云々、自廿五日七ヶ夜神樂、其內中日於若宮又別有法樂、二條大閣一夜御聽聞、翌日御歸京前殿下連夜御聽聞、今日可有御上洛云々、神樂目錄寫置之、

〔大乘院日記目錄〕三 二月廿五日、春日陪從神樂七ヶ夜、

三月六日、二條前殿御上洛、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 二月十七日、

一社頭御神樂來廿五日必定云々、仍二條大閣并前殿可有御下向、自廿四日可有御參籠歟、昨日聞之、

廿三日、

一社頭倍倍從神樂先例、正預ニ相尋之、注進之、

春日社陪
從神樂ノ
例

山木枯朽御神樂事

一文曆二年七ヶ日、九條殿御代

一嘉元二年九月廿四日ヨリ、光明照院御代

一延慶二年十一月八日ヨリ七ヶ夜、後照念院御代

一觀應三年六月廿六日ヨリ七ヶ夜、後普光蘭院殿

一貞治五年九月廿日ヨリ七ヶ夜、同

一應永十二年六月六日七ヶ夜、北山殿

一同十四年、

臨時御神樂

一治承二年三月廿七日、松殿

一同三年三月廿日春季、近衛殿

臨時神樂
ノ例

文明十一年二月二十五日

二八一

文明十一年二月二十五日

二八二

一文治四年三月廿五日春季(九條院)殿下

一建久二年臨時依中宮御惱也

一正治二年八月廿一日自院御所(後鳥羽院)

一建曆三年十一月十一日恒例

一嘉元三年六月十六日(龜山院)禪林寺法皇御幸(藤原英子)昭訓門院御同道同十九日昭訓

門院於當社被遂行臨時之御神樂了女院御了聞云々

所 作 人

本拍子按察大納言殿

末拍子紙屋川三位

笛鷹司大納言殿

筆烏丸少納言

和琴藏人

人長

付歌陪從近衛召人如例

庭燎

庭座掃部寮沙汰

一元德二年九月十九日夏季

一同廿日去年延引分夏季

一同日秋季當年分

一同廿一日去年秋季分

右大概注進如件

神樂勸進帖

文明十一年二月日

一略中上件神樂勸進帖上之

廿四日

一明日陪從神樂役者悉下向但馬屋船戶屋黑繪屋各成宿所了二條殿兩殿

御下向著御船戶館了勅使中御門息右衛門佐宣秀郢曲方綾少路有俊入道息俊基宰相中將季經葦內其外

樂人十三人云々希有大儀也

廿五日

一風呂在之大閣渡御御共法性寺中將(爲德)大藏大輔并御侍二三人也一獻等如

形進上之巨細條々御物語事共在之則還御(致德)新僧正爲御禮被參申付衣候

人少々御共御出仕時分被參云々大閣御淨衣前殿衣冠中御門中納言淨衣

同息勅使束帶自餘上下各衣冠自船戶陪從衆例參自藤鳥居入御南門著

座拜屋舞殿座云々松明取之御出仕社家御神供傳供在之云々越智彈正(家德)

忠爲結緣社參用心之間廻廊外山內山外武者共在之一國中相催之云々

今度神樂用脚寄進申願主故也云々船戶二參申兩殿御對面御太刀各被

下之進物千疋御楯五荷太刀以上千疋太刀以上前殿

文明十一年二月二十五日

二八三

勅使中御門宣秀

家榮誓固

家榮持通父子二謁

一御宿用屏風以下色々、御師申請之間、昨日今日遣之了、
 一勅願三十講、御神樂同時、神事法會各嚴重之勅會行之、當社繁昌不可過之、
 廿七日、甲寅

次第
 一入會之時分爲御神樂丁聞社參、新僧正、松林院僧正、權別當僧正、大納言得業以下同道步行、各裏頭也、拜屋東方御丁聞所ニ、前殿、中御門中納言以下御丁聞之間、其在所ニ參申、簾中也、坊官侍上下北面等各裏頭、拜屋東北方舞殿之南邊ニ立了、先陪從一烈出仕、舞殿南庇ニ烈立、次神供社司氏人等傳供之、音樂當所舞人如三句也、次勅使取御幣四拜、社司等申給之、至神前次歸參、拍手、勅使西向ニ著座、御幣之時北ニ向、拍手以下又如元、向西而著座、次社司以下悉以舞殿西、或八講屋、與舞殿作合ニ著座、東ニ向、或北ニ向、南ニ向、是上首輩歟、次藪宰相中將著座、次綾小路中將著座、笛築木ノシラメ事了テ立座、元如烈立、次人長立出圓座、西、次笛役圓座ニ付、則笛吹之退了、人長東ニ立、ヒチリ木著座如前、次長西ニ立廻和琴著座、次人長東ニ立廻、宰相中將著座如前、次人長西ニ立廻、中將著座如前、次饗膳備之、次宰相中將以下著座、西上首南北行床ニ東西ニ向テ著座、則神樂歌之音樂付歌

結願

等在之、次人長立出テ舞了、次配酌事畢、予退出了、如元之次第十三個度計一夜之内ニ在之間、三時計在之云々、遷時剋事也、七個夜ニ神樂歌一反、内侍所御神樂、清暑堂御神樂、各此儀也云々、庭上ニテ在之事也、當社計棟下也、殊勝事也、前殿御淨衣、自餘直垂ニテ丁聞、勅使ハ束帶劔、自餘各衣冠也、
 三月一日、
 一陪從神樂今夜結願之、七個夜天晴不吹風、希有儀共、一天泰平基珍重々々、七個日夜道俗群集、無是非次第也、權僧正丁聞ニ被出了、松林院僧正等參御共步行、

神樂衆悉ク歸洛

二日、
 一中御門以下神樂衆悉以上洛、
 一榮清大楯一荷兩種持參、祐松同道、今度神樂無爲禮云々、盃給之、各吳綿一屯宛給之、畏入云々、
 六日、
 一前殿御上洛、傳馬二疋、人夫三人召進之、其餘御師方奉行五六人在之歟、
 雜紙十束、京都ニ上之、自大閤仰子細在之故也、

一乘院教
女神樂ニ
和琴ヲ用
キザリシ
チガリシ
ル

和琴ノ由
來

文明十一年二月二十五日

二八六

一鷹司之西殿圓海法師、自一乘院殿承事在之而光臨、其次被相語、春日御神樂之用ニ和琴在之、自何方も不申出之、不審之由、門主被申云々、箱ニ入テ在之、故物也云々、予西殿ニ相語、其琴ハ今度ハ不可申出者也、行賢法眼五卷記第五ニ云、近衛殿御願社頭二季御神樂、和琴并拍子等令預置給事ハ、知足院御時爲年來之御願、當社旬御供ヲ令始置給、并春冬兩季御神樂被行者也、彼和琴等ハ、件御神樂料被調置之、被納社庫之處、故東山禪定殿下臨時被行御神樂之間、不及被觸申本所、被仰社家、被用彼和琴等畢、普賢寺殿願御腹立之餘、速ニ社庫ヲ取出、天院家へ被預置畢、兩季御神樂ノ夜、牧務社司觸申之時、自院家被渡之、御神事畢ハ、行事家司則付封、天令返渡者也、然者二季御神樂外ハ不可出故、今度ハ不申歟、云社家、云家門、定而此子細可有存知事也、凡ハ普賢寺殿此仰ハ且如何、二季御神樂ハ、知足院殿御願唯識會等同前、惣攝家之先祖也、依何事普賢寺殿御孫一流可有自專哉、且如何、同行賢記第四云、唯識會ハ、知足院殿御願也、時之攝錄家司奉行之、諸職人以下補任被差定也、然者限神樂而御自專不審事也、於于今者、此神樂退轉了、

持通書狀

〔大乘院寺社雜事記〕

六十八 文明十一年五月一日裏文書

當社御神樂願主事、任觀應貞治例申候間、且神慮至令祝著候、仍乍大儀殊更爲敬神可社參候、然者ふと參候て、每事可申承候間、不能委細候也、恐々謹言、

二月廿三日

持通

〔大乘院寺社雜事記〕

六十七 文明十一年三月十三日裏文書

尙々、陪從神樂根元并於當社何度計沙汰候ける哉、以次存知仕度候、陪從神樂之御記御座候由承候、其段乍恐一昏被注下候者可畏存候、久見聞人無之之間、自類異類參向儀不存候、御奉行ニ被仰付候て可被下注由、能々可有御披露候、恐惶謹言、

二月廿五日

〔花押〕

御番衆御中

〔大乘院寺社雜事記〕

六十九 文明十一年七月二日裏文書

略○上
一去月神樂事ニ、二條殿種々敵方御一統候て、調伏の子細候哉、則十市如此成候由、色々自畠申候哉、公方様、先日廣橋へ御尋事、廣不存知候、南都傳奏

文明十一年二月二十五日

二八七

隨心院殿
寶通狀
持義就
山擔シ
加シシ
長トナ
ストナ
長トナ
ストナ
長トナ
ストナ

義政之ヲ
廣橋兼顯
ニ詣フ
持子ヲ介
苗子ヲ野
ニシテ幕
以テ開ス

文明十一年二月二十五日

二八八

計候間、一往自家門可有御尋事上を一言不存知之由申され候間、種々及御沙汰候、中々朝家輩不運まで候、以北小路殿自二條殿内々申され候間、只之や御願とこそおかしめし候處、如此之子細越智張行驚思食之由の分て、定而自畠申入候哉、是の推量にて候、此狀早破々々、○中略、全文ハ四月二十八日ノ條ニ收ム、

卯月六日

嚴寶

(奥書) 大乘院殿御返事

嚴寶

〔興福寺略年代記〕

己文明十一年二月廿五日、春日陪從神樂、御願主二條殿、施主越智家榮、

正預三位 祐仲

○中御門宣胤等、大乘院尋尊ヲ訪フコト及ビ二條政嗣等、長谷寺等參詣ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 二月廿八日、

一中御門中納言、藪内宰相中將、綾少路中將、右衛門佐光臨、見參進盃了、樂人三人對面了、

廿九日、

一風呂在之、中御門綾少路(有徳)入道、樂林中納言入道也以下、昨日光臨衆悉以招請盃勸之、

一來月三日、前殿長谷寺御參詣事申入之、御悅喜云々、

三月二日、

一前殿兩寺御巡禮、入御當院、檣代二百疋被持之、畏入了、明日風呂今日立之、

三日、夕方雨下

一前殿長谷寺御參詣、瑛舜、光秀參申、

四日、雨下、

一自長谷寺還御於三輪寺御盃進之、長谷寺進物五百疋、法性寺百疋申□在

京衆百疋、北面衆御風呂立之、

五日、

一白毫寺花前殿御覽、一獻等仰付之、花本御榼清賢法眼持參之、成就院御一見故也、

二十六日、癸丑越智家榮、古市澄胤ヲ訪フ、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 二月廿六日、

一越智今日行向古市所、則下向云々、

文明十一年二月二十六日

二八九

政嗣等白
毫寺ノ花
ヲ觀ル

文明十一年二月二十七日

二九〇

三月三日、夕方よ

一 筑前守來、古市河内ニ下向云々、

○澄嵐、河内ニ赴クコト、便宜合致ス、

二十七日、甲關白九條政基辭ス、尋テ、右大臣近衛政家ヲ關白トナシ、氏長者ニ補シ、牛車兵仗ヲ賜フ、又權大納言柳原資綱ヲ罷メ、權中納言一條冬良ヲ權大納言ニ、參議廣橋兼顯ヲ權中納言ニ任ズ、

〔公卿補任〕三四十

關 白從一位藤政基、卅六、氏長者、兵仗、二月廿七日辭、同卅日內覽、兵仗如

元之由宣下、

正二位藤政家 二月卅日詔、氏長者、牛車、兵仗、內覽等事同宣下、

座事同日被宣下之由、令必定之處、(左相府以內覽)

號、頻被支申之間、臨期被閣之畢、仍補任長押之所

內御本以下以左府押上云々、

權大納言正二位藤資綱、(卅)、十月日辭、

正三位藤冬良、(卅六)、二月卅日任、右近大將如元、

鷹司政平
座宣チ支

內覽兵仗
元ノ如ク
聽許

權中納言從三位藤兼顯、(卅一)、二月卅日任、元第七參
非參議從三位同爲廣、(卅)、二月卅日任、右衛門督、

〔詔勅宣下攝關准后作進之實記〕

關白ノ詔

詔

繼天立極明君、資股肱以合德、

導俗宣風聖主、通耳目以正心、

況於庸瑣之身、

蓋賴輔弼之力、

右大臣藤原朝臣、

家譜稟鼎司、

器熙當柄用、

宜弘乾符之猷、

正佐南明之化、

夫万機巨細、百官惣已、皆先關白於右大臣、然後奏下、一如舊典、

庶尋博陸之芳蹤、

文明十一年二月二十七日

二九一

文明十一年二月二十七日

二九二

將期有道之靜謐

布告遐邇俾知

朕意主者施行

文明十一年二月 日

隨身兵仗
ノ勅

勅

德行直身 以建基業

勳績被世 以加朝章

君臣之佳規

國家之禮制

右大臣藤原朝臣

繼累代之功迹

爲當時之聖賢

今援惣已之宣

□備理政之佐

仍賜左右近衛府生各一人近衛各四人以爲隨身兵仗

忽耀寵光於相府之月

宜施德音於帝闕之風

文明十一年二月 日

作者大內記菅在數

詔勅ノ作
者

當日ノ儀
問フ

政基直衣
始ヲ行ハ
ズ辭退遲

政家義政
ニ依リ政
基ノ辭職
ヲ要請ス
義政執奏

〔後法興院政家記〕

四

二月七日甲晴陰詔宣下持來當日之儀尋申二條前

關白委旨雖在舊記亂後每事不容易間內々申談當日之儀主人并家司衣冠

自簾中女房上臈取次被覽之云々先例主人并家司束帶也如何

十日丁酉時々小雨灑晚景雷一聲入夜甚雨雖有關白拜賀無直衣始間辭退之

儀遲々云々於于今者無盡期間付書狀於右大辨宰相武家御執奏事申入了

抑關白拜賀以後無直衣始辭退例（舊各通）前官直衣始例又有先例云々

十三日庚子晴陰今日送遣小香代先途事遲々迷惑之由申入趣自武家今日以

勸修寺大納言有御執奏可有御思案之由有勅答云々

十六日癸卯晴藤大納言資世卿勘解由小路前中納言高清卿勸修寺中納言經

茂卿等來勸一盞晚景自新兵衛局有音信只今以勸修寺大納言被仰出先日

文明十一年二月二十七日

二九三

之勅答云々、關白辭退事御問答之處、來廿七日爲吉日間、可令上表之由被申

土御門有
宣下ノ
日次勸進

間、其以後必有宣下之由、被仰出云々、且祝著之由令返答了、

廿二日、酉、己晴陰、自晚景雨下、詔宣下日次事、昨日相尋之處、來月五日可然之由、(土御門)有宣卿勸進之、引勸先例處、大略辭退同日新補也、兩樣間可爲時宜由、以勸修

政家政嗣
ルニ裾ヲ借

寺大納言令奏聞處、廿七日可有宣下由、有勅答、自二條前關白被借用余指貫、借進之、南都下向料云々、又余詔宣下日裾、可借給由令申之、不可有子細云々、

辭退新補
同日ヲ望
マレズ

廿三日、戌、庚晴陰、時々雨下、風吹霰降、自按察卿許、以勸修寺黃門有示送旨、詔宣下奉行事元長、可令申沙汰云々、次來廿七日、相當後花園院聖忌間、可爲如何

鷹司政平
辭職ヲ乞

哉之由、(所取カ)又宣下條々相尋之間、注遣之、關白氏長者、內覽、牛車、隨身、兵仗等也、隨身兵仗被載勅書、後深心院殿御例也、相當聖忌宣下事、先規連綿間、少々勸

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

遣之、同日一座事可申旨、同仰遣之、

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

廿五日、子、壬晴、就詔宣下儀、自按察卿許有示送旨、關白辭退新補同日事、公家無御庶幾之由、內々有御沙汰云々、仍不及是非之儀、來晦日可有宣下歎之由、重

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

申入畢、引勸先規之處、辭退同日新補例連綿也、如何々々、

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

廿七日、寅、甲晴、關白上表云々、內々被付書狀於傳奏云々、左府事可辭退之由、以

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

傳奏被申入處、三公轉任每度遂以無拜賀間、上表之儀不可叶由、有勅答云々、

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

依關白超越事、以後圓光院例如此被申云々、

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

卅日、巳、丁晴陰、今日余蒙關白詔、氏長者隨身、兵仗、牛車等事、同有宣下、入夜密々

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

向右大辨宰相兼顯卿宿所、此所依無便宜也、內々彼卿有其命、戌剋上卿日野

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

中納言廣光卿、右大辨宰相等自此所參陣、今夜詔宣下以後、可被行小除目也、

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

依陣儀遲々、及曉鐘大外記師富朝臣持來宣旨、余先是著束帶、(如恒時繪劍、有文巡方帶、紺地)

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

平緒、出居座新、中納言兼顯卿來著此座、家司刑部卿治光朝臣來、(入函有懸紙、三懸紙、置余前、余披)宣旨之由、仰可召之由、次大外記師富朝臣持來之、(通卷籠一懸紙、置余前、余披)

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

見之、其儀置笏、引寄宮見文、(乍宮內、乍三通、關白、氏長者、見了卷之、加懸紙、置宮右、指出宮蓋、外記進寄取宮退、次余懷中宣旨、起座歸入、次官宣旨、左大史小槻)

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

宿禰雅久、可持來之處不參、以六位外記進之、治光朝臣傳覽之、留文返給宮、次

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

改裝束、有盃酌事、武者小路大納言、勸解由小路前中納言、日野中納言、(廣光)新中納言、(房任)西河前宰相藤宰相雅國朝臣等在座、五獻後歸宅、及卯半刻、新黃門爲今夜

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

著座、則奏黃門慶云々、(近衛忠嗣)後普賢寺殿詔宣下時、兼宣卿、(於時)于納言著座、年預資光申

兼顯第二
於テ詔ヲ
受ク

次云々、今夜之儀自然相當彼例條、祝著之至也、外記宣旨三通、官宣旨二通、詔

書勅書等續加之、今夜前關白內覽隨身、兵仗如元之由宣下云々、

小除目任人、女房、敍四品、名字、俊子、

權大納言藤原冬良兼

權中納言同兼顯

右少辨同俊名小川坊號

宮内少輔源為經

左近權中將同資氏白川

左衛門少志狛葛賴舞人

右衛門督藤原為廣

少志太神景範舞人

三月一日、戊陰、勘解由小路前中納言、白川忠憲伯民部卿、長興宿禰等來賀宣下儀、

二日、己晴陰、詔宣下事、一條禪閣、九條前關白、鷹司左府、大覺寺僧正、淨土寺等、

以使者被賀之、令對面、冷泉大納言父子、在也清三位宗賢卿、大外記師富朝臣、持來聞書、

理覺院僧正、北野揚琳院、松田豐前守貞康、難波新左衛門常弘等來、藤大納言

父子以下、祇候面々令申沙汰一獻、頗及大飲、賀祝著之儀也、

三日、庚申、去曉小雨灑、自己剋又雨下、勸修寺大納言、新中納言、西河前宰相等來、

四日、辛酉、夜來雨下、晚景止、申刻許參室町殿、有對面、就關白拜任事、令參賀也、次

參禁裏內々申入了、日野中納言廣光卿來、令對面、隨身秦延廣來、

五日、壬戌、天快晴、藤大納言富就朝臣等來、勸一盞、兵部卿、宗綱卿、日野中納言景

光卿、新宰相中將實隆卿、左少辨元長等來、令對面、

勘解由小路
關白宣下
ヲ賀ス

政家義政
ニ參賀ス
御禮參内

興福寺政
宣下ヲ賀ス

政家紺紙
金泥一卷
ヲ寫シ納
日社ニ

政家關白
ニ補セラ
レシコト
ヲ請フ

六日、癸亥、晴、自實門實門以使者光猷被賀當職事、

七日、甲子、晴、雨坊城前宰相、四辻宰相中將等來、賀執政事、

八日、乙丑、陰、時々小雨下、自二條大閣并前關白、以使者被賀當職事、中日野侍

從政資來、當職事賀之、

廿四日、辛巳、晴、陰、自晚景時々小雨、自大乘院、以使者被賀當職事、

廿五日、壬午、降雨風吹、略中為當職禮自寺門使節兩人學侶來、樽五荷、白壁二合

進之、令對面、

五月廿日、丙子、晴、陰、入夜雨下、自一昨日至今日、紺紙金泥三十頌一卷奉書寫、一

字三禮也、春日社江可令奉納也、就當職所望之儀立願也、此間精進并神事也、

〔親長卿記〕九 文明十年正月九日、晴、有勅問事可參之由、民部卿示送、即參

內、勸修寺大納言同祇候、予參以前已被尋仰勸修寺云々、其子細民部卿示右

府被申云、博陸後關之時、可預御沙汰、左府為上首、雖然庶嫡之儀為隔別、殊於

彼家門者、有令超越之例、致拜賀從公事了、於左府者不及由被申、可計申云々、

予尋勸修寺所存、申云、博陸後關事、誠就庶嫡可有子細、拜趨又有淺深、可有御

沙汰之條、不可有子細、宜在時宜之由申入云々、

甘露寺親
長昇進ノ
コトハ奉
公ノ勞チ
以テスベ
シト説ク

正親町三
條實興關
白宣下ノ
奉行ヲ中
山宣親ニ
與奪ス

文明十一年二月二十七日

二九八

予申云、於庶嫡事者、於于今者、被立申所存之事、不叶愚意、於彼兩家已十代許相別了、諸家近代無庶嫡之差別、昇進事有御免、於此一段者、號嫡流有昇進者、爲後人無益、於左府者度々昇進、于今未拜賀、於右府者已有拜賀、被勸除目執筆了、爲奉公之勞被優賞彼勞者、後人若拜賀爲可仕之基、くれ、庶嫡事不可及御沙汰之由申入了、即奏聞、立歸申云、予申之趣叶叡慮了、誠庶嫡事無益之由被思食云々、

〔親長卿記〕

十 文明十一年二月廿三日、晴陰不定、時々（前略）下當番召遣元長了、

略○中 自頭中將實興朝臣許申送云、關白宣下事可申沙汰之由、以勸修寺大納言被仰出、故障之間可與奪、傍頭其案可注給云々、

可有宣下事、可令申沙汰之由被仰下也、恐々謹言、

二月廿三日

實興

頭左中將殿

追申、可爲關白宣下候也、

加禮紙、禮紙ニ、此追書可書之由、仰遣了、

頭左中將宣親朝臣示送云、關白宣下事、可申沙汰之由有與奪、歡樂之間可故

宣親奉行
ヲ辭ス

元長ニ奉
行ヲ與奪
セシトス
親長宣親
ヲシテ傳
シム

親長政家
ニ聖忌日
任官ノ例
ヲ問フ

障、其案可注給云々、此一通可爲宿紙歟之由命之、雖爲白紙不苦之由返答了、關白宣下申沙汰事被仰下候、尤可存知之處、近日所勞事候間難治候、可然之樣可得御意候也、恐々謹言、

二月廿三日

宣親

及巨細之間、内々令申候也、可書袖書之由仰了、

其後送使云、傍頭故障、元長可申沙汰云々、予返答云、先傍頭故障之趣、可被仰傳奏、可仰元長之由被仰出者、其時可申御返事云々、重申送云、其子細仰遣傳奏之處、可與奪元長之由有命云々、此上者、雖爲故障、可存知之由返答了、予思、此事常爲傳奏申沙汰事仰職事、々々仰管領頭與奪、次座事強無其儀歟、爲傳奏可仰他人事也、彼所存不審了、

予招勸修寺中納言、經茂、仰云、近衛右府政家關白宣下事、可申沙汰之由被仰下候

間、雖爲故障、可申沙汰之由存之、廿七日之由、自本家被申請云々、廿七日舊院聖忌之間、宣下不審也、此子細被尋申陽明、彼仁細々參候之間語仰了、可尋申之由申之、暫來國忌例注給之、

廿四日、晴、參安禪寺殿、有點心時等、未剋許參内、下姿以勾當内侍申云、關白宣

文明十一年二月二十七日

二九九

宣下ノ仰
詞

下事可申沙汰云々、但於廿七日者、舊院聖忌、宣下不審之間、尋申右府之處、注進如此之間、但可爲叡慮之由申了、仰云、爲本家申請之上者、爲上難被仰是非、但本人有斟酌者可然之由有仰、但先皇聖忌有例者不可及是非、重可尋申由有仰、已於番衆所參會勸中、仰此子細了、何樣可參申云々、次詣勸修寺大納言談條々、關白宣下、仰詞、以右大臣可爲關白令作詔書、如此歟、以右大臣藤原朝臣、如此歟、不可載姓歟云々、氏長者事、牛車內覽隨身兵仗一座事等、今度被申請、此仰被仰關白事之時、可爲同事歟、又詔書奏聞已後、條々可仰歟、先年去文八年、宣下之時、爲上卿之間、其時之儀可承存之由仰之、其時事忘却云々、不可說返答也、歸宅、

晴富宿禰以盛俊申送云、昨日便宜之時、關白宣下、記六可注給、國忌廢務宣下、事、先例勿論云々、於先皇聖忌者、當座猶不引見云々、舊記兩度分注給了、

廿六日、晴、早且參內、隆之番請取也、予來月請取也、立替姉三品了、自陽明有御使、關白宣下事、

明日依聖忌可斟酌之樣及御沙汰云々、儲日爲來月五日、雖然元長申沙汰、於來月者難治云々、何樣可被仰合勸修寺大納言云々、出多々須有鞠、社頭及晚自右府宣下事、關白於來月者申沙汰難治之間、改尋日次之處、來卅日云々、其分申沙汰

宣下三十
日二延引

日次ニ就
辛親長ノ
意見

祝著之由有仰、可存知之由、可申付元長之由申、返答了、抑日次事、不改關白宣下可申沙汰之由、被仰下之時、職事申合本家、除公私御衰日、尋取奏聞、令申沙汰之條、古來事也、今度自本家被治定日次之條、不叶愚意、先規又無此儀、仍先日伺申之處、日次事無御存知、廿七日事如予申、後花園院聖忌有斟酌者、可然之由有仰、仍傳奏兼日此子細不申定哉、不可事也、

廿七日、晴、關白宣下事、今日延引、舊院聖忌強不可好用歟之由、爲叡慮之間延引了、但後日先皇聖忌宣下例有之云々、但不依例之有無、聖忌之日好用之條、御不審之由、有仰之故也、

廿九日、晴、自陽明訪參百足送給之、申沙汰之訪也、近日之風儀也、不可說云々、陣儀等悉自本家下行云々、

奉行甘露
寺元長

政家訪料
ヲ親長ニ
贈ル

卅日、晴、此日右大臣政家公、近衛、蒙關白詔給、先是關白、九條院、去廿七日、辭退、御職、陽明被競、元長奉行也、日次事、兼日、自本家被尋、廿七日、被行、公事、之例、一紙、注給、申故歟、競、元長、奉行也、聖忌也、如何、御返答、書、國忌、日、被行、公事、之例、一紙、注給、好、事、歟、有、日、奏、聞、之、處、已、被、定、日、次、之、上、者、無、餘、儀、歟、但、雖、有、先、例、先、皇、聖、忌、強、不、來、月、五、日、云、々、但、予、治、定、了、凡、風、紀、事、爲、奉、行、職、事、相、尋、之、條、爲、先、規、今、度、爲、本、

文明十一年二月二十七日

三〇二

先日野中納言廣光著仗座、與元長進出仰々詞以右大臣爲關白藤原長者令作詔書與聽牛車內藤原長者令衛賜左右近衛府生各一人左右近衛事退入許仰之例更牛車隨身兵仗事等是又有先例其上詔書勅書等仰兩度者再往之間予以今案仰之由仰舍了上卿召內記仰詔書勅書等事、大內記不參、小內記參進奉之、退入入兩通之草於箱以下

〔長興宿禰記〕

中

二月廿七日、寅晴、今日關白殿下九條殿御當職御上表、近衛右大臣殿詔宣下事、勅役被急申之間御上表云々、

卅日、巳晴、日正終也、今日關白宣下并小除日被行之、近衛右大臣殿政家令蒙關白詔給、御上首左大臣殿政平公依無御才覺、御當職難叶由、兼日及御沙汰令蒙內覽宣旨給計也、仍今日御超越有宣下、上卿日野中納言廣光卿、右大辨宰相兼顯卿小除目執筆、今夜任權中納言、今職事藏人左少辨元長、兼行、大外記師富朝臣、左少史安部盛俊、記兼少外中務少輔惟宗、行長等參陣、官務不參陣、秉燭後、予參近衛殿御宿、相公右大辨依家禮也、右府今夕自御旅店渡御此第、爲宣旨御覽也、上卿黃門於彼第著朝衣、相公相伴參內、予爲見物參禁裏、
亥斜、上卿著仗座南面御池東、假、大外記著床子座陣座後、隔壁北、右大辨相公

同著座、職事進與座仰勅語、次上卿移端座西面、召官人令敷軾、次以官人召內記、左少史盛俊爲內記代進軾、仰詔書事、即退去持參之草書一入篋、兵仗詔上書同一度進之歟、卿披覽之後令持內記、起座就無明門代爲其形、以職事元長奏聞之、內記持篋相從之、草被返下之後、取替清書奏聞之、兩度被返下之後、令持內記、上卿復座、內記相從之、就軾進詔書、次上卿召外記盛俊、可召中務輔之由仰之、外記退輔參進軾、被下詔書不入、輔行長給之退去、次召內記被返下篋、次上卿召辨、左少辨元長進軾、仰氏長者事、辨退去、著床子座、召左少史盛俊仰之、次上卿召外記、大外記師富朝臣進軾、仰關白并氏長者兵仗牛車等事、外記稱唯退去、次亦召左少辨、仰內覽事、辨退去如前、著床子座、仰左少史盛俊、次上卿召大外記、前關白政基兵仗牛車如元之、由被宣下、仰詞爲從一位云々、次有小除目之儀、職事就軾下小折紙、次上卿召少外記仰御硯事、外記退去、持參置參議座前、先是右大辨相公起座、移著執筆座、其後如例、事訖兼顯卿任黃門有奏慶、諸大夫布衣侍各一人、如木雜色等召儲之相從之、丑刻上卿以下退出、新黃門等相伴歸宅、大外記師富朝臣持參宣旨關白內覽兵仗於兼顯卿第、殿下御東帶御出座南面、新黃門兼顯卿著座北面、外史參著座便宜所儲、赤、外史持參宣旨入篋於南面

文明十一年二月二十七日

三〇三

妻戶外簀子稱唯參進殿下一々御披覽之後有御氣色外史於簀子稱唯參進被返下宮外史給之退去次殿下令起座給兼顯動座蹲居依家禮之儀也次黃門起座詔書官方宣旨二通內々付申次進之官務不參自由之沙汰在之殿下改御束帶御出座有一獻亭主黃門猶東有申沙汰藤大納言資世卿以下數輩御請番有數獻予兩度參御前被一盃酌殿下御酌三盃被下之及天明殿下還御予退出了

關白宣旨

正三位行權中納言藤原朝臣廣光宣奉勅關白右大臣宜為藤氏長者者
文明十一年二月卅日 掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富奉

氏長者宣旨

正三位行權中納言藤原朝臣廣光宣奉勅關白右大臣宜為藤氏長者者
文明十一年二月卅日 同前

隨身兵仗牛車宣旨

正三位行權中納言藤原朝臣廣光宣奉勅關白右大臣宜左右近衛府生番長各一人近衛各三人為隨身乘牛車出入宮中者
文明十一年二月卅日 同前

以上外記宣旨三通籠一懸紙

左少辨藤原朝臣元長傳宣權中納言藤原朝臣廣光宣奉勅宜令關白右大臣為藤氏長者
文明十一年二月卅日 修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史小槻宿禰雅久奉

左少辨藤原朝臣元長傳宣權中納言藤原朝臣廣光宣奉勅官中雜事宜先觸右大臣令奉行者
文明十一年二月卅日 同前關白及ビ隨身兵仗ノ詔勅ハ略ス

〔晴富宿禰記〕

二月廿四日亥晴時正月初日按察卿親長前權示送云關白宣下由有其沙汰自本家鷹司殿大臣廿七日之由頻被申之為先皇之聖忌而被行公事例等被注申之宣下之儀無先規者如何之由勅定也例內々勘賜者可為本望又宣下記等一見大切之由替子息藏人左少辨元長父卿被申之間今日曆應々永十五等記借遣之先皇御忌公事例事國忌日被行奉幣以下諸公事縱雖被准據有何子細哉之由申遣之

廿六日丑癸晴先皇聖忌被行小除目例永和元年先皇後光嚴院御忌所見注遣之凡於例

壬生晴富聖忌ニ公事ヲ行フ例ヲ進ス

者連綿不可勝計之由、官務以折紙申都護卿云々、又貞治六年一心院殿詔家記借遣之、

廿八日、乙晴、日野中納言廣光卿送書狀、權少外記兼左少史盛俊向局務外史許之處、赴町黃門處云々、仍相尋之處、黃門見付盛俊被送狀、關白宣下之儀不審之條々也、盛俊兩局兼帶令參陣候、仍進退等次第、予假名ニ馳筆書與之處、盛俊懷中、黃門外史等無記之間、迷惑之由就被命之、此假名次第取出令見申、如法悅喜散不幸候由被申、就其猶舊記等一見大切之旨、被送狀者也、

近衛道嗣
關白宣下
記

廿九日、丙晴、以盛俊昨日日野黃門返事遣之、康安元年後(近衛道嗣)深心院殿詔宣下御記借遣之、彼狀等在文書櫃中、

卅日、丁晴陰、右大臣殿政家令蒙關白詔給、上卿日野中納言廣光卿、辨左少元長、兼職事大外記師富朝臣、權少外記安倍盛俊、兼左少史中務輔々々等參陣、內記不參、盛俊官外記內記等兼行、

宣下五ヶ條、關白氏長者、內覽、牛車、兵仗等也、內覽同日事上卿不審之間、近衛殿代々例如此、寶治度載詔書上者、不能宣下歟之由、傾申之處、(近衛基通)普賢寺殿以來、每度例難被背之由有沙汰、于今此分之由遣返報了、今度被守後深心院康安

御例之由被申之、每事不所持一紙文書、如向壁之暗然云々、仍康安御記借遣之、一々散不審之由被謝送之、詔書勅書一度奏聞、一度被下之、陰雲掩欲雨降、爲不移時剋如此、是又貞治六年一心院殿詔之時如此、其時記亦借藏人辨元長之故也、

宣下後ノ
小除目

宣下以後、被行小除目、一條殿右幕下權中納言轉大納言給、上卿以下同前、參議右大辨宰相兼顯卿也、執筆今夜任中納言、則奏慶云々、官務雅久宿禰不參、以六位氏長者內覽宣旨兩通進之、新殿下今夜御座廣橋第、大外記持參宣旨、任例直覽之、當局宣旨以家司被召之、家司々々、

前關白內覽如舊之由被仰、於敷政門代左少辨傳盛俊云々、仰詞不分明之由、盛俊語之、前關白如舊令內覽万機ヨニテソアルラン之由、申聞之者也、

權少外記安倍盛俊御訪、自本所近衛三百疋下行之、史并內記等所役兼帶、掌灯等諸司下行亦同之、

三月一日、戊天霽、夜前詔宣下無爲事等、今朝盛俊歸來語之、

二日、己晴、盛俊張行訪之、賀酒有盃盤之差、

八日、乙陰、自晝細雨洒、官務究困不及出頭之間、先以盛俊今日廣橋新黃門事

政家外記
訪料ヲ出

賀遣之、又内々申入一條殿、

〔大乘院日記目錄〕三 二月廿七日、關白御上表、

卅日、陽明右大臣任關白、氏長者、右大將任權大納言、

〔大乘院寺社雜事記〕六十 二月廿二日、

一自禪閣御書到來、廿七日關白可有上表、陽明可有御拜任歟云々、

三月四日、雨下、

政家房平
二超越ス

一勸修寺中納言光臨、去晦日陽明御方右府關白宣下、超越左大臣、家門御方

中納言、右大將殿大納言任給、廣橋宰相中納言任了、中納言一闕猶在之云

々々、

六日、

一〇中 又自禪閣御書在之、陽明關白、右大將權大納言事、去卅日宣下必定之

由也、

廿四日、

一陽明御方御當職珍重之由、以清賢法眼申入之、御悅喜云々、

〔興福寺略年代記〕戊 文明十年、政家近衛殿右大臣後法興院、二月卅日詔、

政家ノ奏
慶

○政家等奏慶ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十一 御湯殿上日記 文明十二年三月

廿六日、○中 こんるのくむんさくの御といひ、こせうのくきやうてん上人、

うにかせん（正統ノ）とむるまななど、れたく、れきなり、□日の、やより御いて

あるよし（正統ノ）たこゆる、○中いつれもさちやう御所よて御さずめん、

〔後法興院政家記〕四 八月廿五日、酉 小雨如昨日、按察卿爲勅使來、○中 又

余奏慶事、還幸以前可遂其節之由被仰出云々、拜賀事難事行存候、但於心中

不可有如在由、同申入畢、

〔後法興院政家記〕五 文明十二年二月十九日、午 晴、小風吹、就余拜賀事付

書狀於傳奏、助成事申入武家畢、

三月十一日、卯 晴、余拜賀事、以除目次可遂其節也、但難事行間武家御助成事、

以鹿苑院以來之佳例申入畢、可有助成之由、内々從上臈局被示者也、

十七日、酉 自午剋雨下、就余拜賀事、自武家有助成、

十九日、己 降雨、日野中納言廣光卿來、治部少輔守光今度可供奉御拜賀之處、

幼少之上裝束等難事行之間、自身參仕不可叶間、公卿一人爲其代可沙汰立

義政政家
奏慶ノ資
ヲ助成ス

之由申入間、就相語廣光可參勤之由示之、公卿殊無人之處、扈從尤謝本意之由了、

廿一日、辛略○中家門助成事無其實間、拜賀儀未定也、

廿五日、乙略武家助成內二千疋、且今日從奉行方致沙汰、則令下行隨身方、

廿六日、丙略天快晴是日縣召除目始也、余奏關白慶、借請日野政資朝臣亭、自彼亭所出立也、此亭狹少上、遠所步行難治間、令借用酉剋終向彼亭、小直衣則改

裝束、々々師藤宰相來、兼日依相約也、扈從公卿遲參、翌後新大納言、新中納言、

(俗政)侍從宰相等來、先覽吉書、此事一獻以後可覽之處、人々猶遲參之間、其間覽之、

且前後不苦也、余著公卿座、次三卿令著座、家司治光朝臣申事之由、余目之、先

覽藏人方吉書、左少辨元長朝臣覽之、杖、挿文余拔取之置前、元長退候簀子、余披

見之、見畢指出置之、元長進寄取之退、結申如例、次官方右少辨俊名覽之同前、

次大外記中原師富覽月奏、二通入、篲、見了返給次治光朝臣覽政所吉書、入篲次又覽官

方吉書、依憚四個度重覽官方先例也、次公卿起座、又余起座、次日野中納言有

三獻事、次余出公卿座、扈從公卿四人降立庭上、余又下殿、左少將嗣賢朝臣獻

沓、經公卿列前、向上首揖過其前、各答揖後蹲居、但日野中納言不蹲居、非家禮

無名門前
舞踏

行列

政家義政
義尚二助
成ヲ謝ス

故也、爲廣橋代來也、自左衛門陣參內、向上官相揖儀如常、次於無名門前舞踏、
申次頭中將實與朝臣、兼日付、御教書次著殿上與座、沓揖座、揖如常次頭中將示召由、揖起座、
經上戶參御前、議定所、內召也對御座被敷小文疊一帖、余依御氣色著之、深揖後聊

繆、裾敬屈申入御、次退出、徘徊便宜所、中略

拜賀路次行列、

先殿上前駢六人、時顯朝臣、治光朝臣、嗣賢、實治、卜部、兼致次番頭四人、取松次地下前駢四人、

俊宣朝臣、不顯、朝臣、實治、卜部、兼致、次番頭、武春、久、繼、役、秦、久次扈從公卿

四人、新大納言、日野中納言、新中納言、侍從、宰相、左近、番長、秦、兼、延、前、各、發、費次扈從公卿

遣戶下殿、雲客役沓、抑隨身事、亂中二條關白拜賀時、三人被召具之、其後九條

關白又三人、仍今度又同前、

廿八日、戊申陰、自午剋雨下、人々來賀奏慶事、

廿九日、己酉晴陰、中略今日出仕以前參武家兩所、各有對面、余拜賀并助成之禮

也、

卅日、庚戌朝間小雨、未剋以後霽、入夜庭田源大納言、(兼行)按察三條新中納言、伯民部

卿、頭中將宣親朝臣、右中辨光忠、大外記師富朝臣等來賀拜賀事、令對面、

文明十一年二月二十七日

三二二

四月一日、亥、晴陰、略○中 隨心院僧長直朝臣、清三位宗賢卿、土御門三位有宣卿、權大外記康顯等來賀拜賀事、略○中 晚景令招請人々有盃酌事、隨心院僧正、勸修寺大納言、庭田源大納言、前藤大納言、勘解由小路大納言、勸修寺中納言、中納言、兵部卿、西河前宰相、伯民部卿、二條前宰相、新宰相、右衛門督、雅國朝臣、資氏朝臣、菅原和長、定基朝臣、長興宿禰、杉原伊賀守兄弟等也、頗及大飲、亥剋許各分、(散脫カ)

二日、壬、晴、略○中 (正親町三條實興) 三條新宰相、中將言國朝臣、卜部兼致、湊藏主等來賀拜賀事、(山科) 四日、寅、晴、入夜雨下、藤宰相來賀拜賀事、

〔親長卿記〕 十一 文明十二年三月廿六日、晴、略○中 略縣召除目ノコトニカ、條二今日關白被申拜賀、自日野侍從亭 扈從公卿新大納言、高、清、日野中納言、廣、光、新中納言、綠、光、侍從宰相、政、爲、殿上 前駟資氏朝臣、命、藏人右少弁侍從 時顯朝臣、俊名、實治等云々、各步儀也、關白令參給之時、元長候床子座、官藏人方吉書事、官方右少辨、藏人方元長仰之間、召進了、雖非家禮、候由有

〔宣胤卿記〕 文明十二年三月六日、丙、雨下、晝晴、晚又降、夜屬晴、略○中 爲殿下御使時顯朝臣來、御拜賀用裝束等御借用事也、

廿六日、丙、晴、今日縣召除目也、略○中 入夜先關白拜賀爲見物、伺見日野亭、自此在所御出立也、殿下先令著上卿座給、東、西、南、北 有吉書事、新大納言、高、清、新中納言、綠、光、侍從宰相、政、爲、以上三人著座、端、南、上、次家司申吉書之由、次元長覽藏人 方吉書、次俊名官方、次外記師富朝臣、月奏、次家司政所、次又俊名官方、以上五方吉書了、公卿自下薦起座、殿下令起座給、有一獻、次御出門、公卿中門御列立、守、光、代、也、 西上、御揖、公卿答揖之後、躡居、公卿四人、新大、日野中、新中、侍從宰相、殿上前駟、時顯、治光、嗣賢等朝臣、俊名、勸、修、寺、中、納、言、代、也、 實治、地下前駟三人、歟、交名不分明、隨身

二人、無人以外事也、條々不及記、
一、今夜拜賀人數、政、家、公、略關白、○下

〔歷代殘闕日記〕 七十八 文明十二年三月廿六日、天晴、丙、午、

一、今日除目、近衛殿關白拜賀、日野殿御かり候て御出也、

〔長興宿禰記〕 中 文明十二年三月廿六日、丙、晴、今日被始行縣召除目、殿下 左大臣、御參內、有御拜賀、御、當、職、以、後、 秉燭後、渡御、日野侍從、政資朝臣、亭、著御裝束、給、當時無御所、亂中御座南都、近年御出家、僕進藤長泰宿所爲御座所、然間自

文明十一年二月二十七日

三二三

侍從亭有御出者也。予參候彼亭，依仰也。亥剋扈從公卿以下參集，勘解由小路大納言高濑卿今夜御參內以、日野中納言廣光卿、同新中納言緣光卿、侍從宰相政為卿四人也。殿下著御公卿座南一間、高濑卿、緣光卿、政為卿等。經東簀子次第著座上西面、南藏人左少辨元長覽藏人方吉書、經東簀子捧文杖、持參於妻戶外、躡居之後、入妻戶覽之、被返下給文、退於簀子屈居、披吉書結之。其後取副杖退去。次奏者所假構藏人所數帖有、次藏人右少辨假名覽後下同、官方吉書官務直付進、其作法如先。次大外記師富朝臣著藏人所、持參文書、入簀、經簀子入妻戶覽之。退、御覽之間候簀子不膝行、稱唯被返下給宮退去。次家司雲客刑部卿治光朝臣持參政所吉書覽之。作法如前退去之後、依仰右少辨假名官方吉書重持參。如以前又覽之。藏人方官方外記局政所等吉書、四ヶ度御覽之間數不快。官方吉書兩度被御覽為五ヶ度。此事先規哉。不審。後日官務云、官方吉書兩度御覽之時、被仰下二通成上。以二通兩度御覽如何之由稱之云々。兩通成進事先規米事、不覺悟不審也。吉書訖有三獻。公卿高濑卿以下請番亭侍從政資朝臣被候御前。雲客諸大夫等於次座有盃酌。三獻之時、殿下御酌、各進御前給盃。予有存旨不列座。雖候傍御酌之時、被召之間、進御前給盃了。子刻許御出門、先扈從

國役下行

散狀

公卿等下殿列立東庭。次公卿雲客等前行。為御步行。番頭隨身等取松明守從五位下藤原朝臣近治、地下前駟等自內裏門下取松明路次間取火、自四足門御參內。令經床子座給。番長一人從立。蔀內、左少辨元長、大外記師富朝臣、左大史雅久宿禰等候床子座。殿下御揖之時、左少辨答揖、聲屈。兩局務不及答揖。即躡居不平伏。不審之間、予以面相尋之處。於彼家門者、准家禮不令平伏云々。家禮家門無差別進退如何歟。兩人可候床子座事。兼日家司時顯朝臣以御教書加判形、可實名歟、相觸云々。於無名門入前有御舞踏。申次頭左中將實興朝臣、御拜訖御堂上。著御殿上之後、御參御前云々。○中今度除目將軍為被任亞相、為室町殿被申行。惣用脚等為武家沙汰。飯尾近江守、松田對馬守等奉行。以國役一國二千、令下行。殿下御拜賀御扶助分參千疋、內府二千疋被進之。○中

扈從公卿

新大納言

日野中納言

新中納言

冷泉侍從宰相

殿上前駟

治光朝臣

嗣賢

俊名

實治

卜部兼致

時顯

文明十一年二月二十七日

三一五

文明十一年二月二十七日

三一六

地下前駟 臨時不參 修理大夫 久任 被參之 中務少輔 俊泰

御隨身

左近府生下毛野武春

左近番長秦兼延

近衛秦人遣

御身固

有宣卿 代有宗

〔大乘院日記目錄〕

三 文明十二年三月廿六日、關白殿御奏慶、

〔大乘院寺社雜事記〕

二十 文明十二年三月廿二日、雨下夜 風吹、

一石左衛門上洛、若槻庄人夫一人給之、近衛殿竹屋以下上洛、來廿七日關白

御奏慶云々、

廿四日、

一自廿六日可有除目云々、關白可有御拜賀云々、

廿六日、

一關白御拜賀云々、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

○甲二十 山城

御湯殿上日記

文明十二年三月

一條冬良
奏慶

深泥ニ依
リ延引ス
幕府冬良
奏慶ノ資
ヲ助成ス

拜賀日次
勘文

廿二日、略 中あよひ一條の左大將とのゝといふあり、申つた頭中將、きちや
う所よて御さいめんあり、夜に入てよりくるゝ、日野ゝやよりいてさせよ
まふよし、こせのともうらむるゑんなどもつれさせよまふよしきこせる、
二條

〔後法興院政家記〕

五 文明十二年三月廿日、庚 午剋以後雨晴、今日左大將

可奏慶由風聞之處、歩儀深泥依難事行、俄延引、來廿二日云々、

廿一日、辛 晴、略 中 新亞相、新黃門等來、就幕下拜賀助成事被申武家處、昨日被

送馬太刀云々、

廿二日、壬 寅、自午剋雨下、入夜風頗吹、左大將拜賀云々、

〔宣胤卿記〕

文明十二年二月廿九日、庚 晴、自禪閣有御書、幕下御拜賀、來月中

旬之間、日次事尋在通卿可申云々、則遣使者尋之、十四日、廿日、廿二日此三ヶ

日撰申之、以狀付女房進入了、

御拜賀日

三月十四日甲午 時酉

廿 日庚子 時戌

廿二日壬寅 時亥

文明十一年二月二十七日

三一七

二月廿九日 從三位在通

兼長前驅
ヲ中山宣
親等ニ觸
レシム

三月四日甲晴略○中禪閣御書到來、幕下御拜賀可為來廿日、殿上前驅事可相觸、又地下前驅一人可有御助成歟之由、可申入二條殿者、宣親資氏、為親等朝臣、菅原長胤等、且以使者申遣了、

出立料ヲ
中御門宣
秀ニ與フ

六日丙雨下晝晴晚又降夜屬晴略○中此御返事進二條殿、此次右幕下御拜賀、地下前驅一人可被進歟、子細申入了、又為親朝臣申子細之間、重又遣使者、家禮有否事也、有禪閣文、見遣之代々事也、不覺悟之條不便、

九日己晴略○中自一條殿右幕下御拜賀、宣秀出立料且二條賜之、近年依無家恩也、

十一日辛晴略○中右幕下御拜賀、地下前驅一人可被進之由、自二條殿有御書、十四日甲晴、有禪閣文、幕下御拜賀條々事也、御身固事申遣、泰清卿、

廿日庚朝間雨下屬晴今日左幕下御奏慶延引雖屬晴可為深泥之間可為廿二日之由、有禪閣御書、各相觸了、泰清卿來、

廿二日壬寅風雨甚入夜休略○中左幕下御拜賀事、就風雨、又可被延引歟之由、尋申之處、只可為今夜之由、有御返事、仍秉燭程、宣秀令著束帶、十五歲以前之間、單ハフシ、金染散

松木宗綱
裝束二候

日野亭出
門

薄表袴ノ裏フシ金ソメ冠ハ余著衣冠、見訪公卿一向兼日、必著參日野亭、從透額也、其外無殊事、色目注別、政資朝臣殿後新造家也、禪閣御所大亂、最初燒失、未被及、各參集、令著裝束、給營作、室町殿燒跡、東邊不可說、小此兩三年、令渡給者也、兵部卿定綱候之、程也、禪閣同秉燭、以前令渡給云々、御裝束、藤宰相遲參之間、資世、勸修寺中納言、家禮、非余、日野中納言、廣光、侍從宰相、政為、等也、余外皆直又日時勘文事、可被覽歟之由、尋申之處、不可有其儀之由、有仰、彼勘文、泰清卿、渡宣秀之間、留余方了、次有一獻、許也、其後各參、御前、更有三獻、前藤大納言、資世、勸修寺中納言、家禮、非余、日野中納言、廣光、侍從宰相、政為、等也、余外皆直垂躰也、亭主直衣有座、其外殿上人有次間之間不見、二獻之時、有召出、三獻、幕下為御杓、公卿殿上人至、諸大夫被召出、次殿上人取杓、亭主被官、青侍、召出、別儀子細歟、次幕下令著公卿座給、南面、泰清卿自南簀子參進、勤御身固事、次幕下出、公卿座南妻戶、降中門廊南切妻給、忠顯朝臣獻沓、隨身、禪閣御方御拜事、臨期被略之、依深泥歟、次御出門、先殿上前驅、下薦為先、次地下前驅、不足十人、下薦、次番頭、取松、次番長、白狩袴、次主人、次下薦隨身、今度一人也、持御無人、事、今度初例歟、亂中、清華人、或大臣、代無力、次第也、次笠持以下、雜人在御、辭大將、依隨身之大儀也、尤無念事歟、末代、無一人、向政官上首揖而過給、左少辨後、參內、入西面四足門、經床子座前給、經立、內、向政官上首揖而過給、元長一人、有床、自立、菰北掖、殿上人取松明、准階下也、宣令立弓場代、頭中將宣親朝

舞蹈

自第二歸

散狀

文明十一年二月二十七日

三二〇

臣申次之、御舞蹈等如例、入無名門出神仙門、合著殿上給、次宣親朝臣來申召、由御起座、經上戶御參、但無御前召、內々於議定所、御對面、自高遣戶御退出、不經床子座出四足門給、不歸日野亭給、直令歸本亭給、内々八葉車用意之、仍各申禮退散了、

御拜賀

此散狀後日書進了、但宣秀申沙汰之間、長胤下ニ書載了、宣秀書進分也、

殿上前駢

公卿不參事、每度之佳例也、雖家禮不參殿上人事、爲親朝臣所勞云々、基富朝臣在國、

宣親朝臣

資氏朝臣

忠顯朝臣

顯基

宣秀

卜部兼致

藤原長胤

地下前駢

久任

行長

俊泰

御隨身

番長秦延兼

近衛兼周

御身固

西洞院三位

廿四日、甲晴陰不定、參一條殿、賀申御拜賀無爲事、有一獻、頭左中將同參、

〔長興宿禰記〕

中

文明十二年三月廿二日、壬雨下、風吹、今日一條左大將殿

權大納言冬良、御拜賀也、亞相并幕下、乘燭時分渡御日野侍從政資朝臣亭、著

卿、近日轉左給、御奏慶也、御朝衣、自彼亭御參内、路次步行、扈從殿上人四人、中山頭中將宣親朝臣、松殿

少將忠顯朝臣、伯少將資氏朝臣、

〔大乘院日記目錄〕

三 文明十二年三月廿二日、右大將御拜賀、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十一 文明十二年正月廿日、

一 禪閣御書到來、當年初也、大將殿拜賀事大儀也、不足事被仰出之、此御書自

一 乘院傳給了、

二月廿日、

一 自京都音信、○中略、美濃守護代持是院、妙禱寂スルコト、來月除目不可

得、大將拜賀是又不可成立、三乃助成さへ如此中々不可叶事也、

三月三日、

一 大將御拜賀來廿日之由、自禪閣御書到來、

十三日、夕雨

一 松殿上洛、右大將拜賀來廿日之由、被仰出之、御楯五荷今日上之、人夫三人

文明十一年二月二十七日

三二一

大乘院一ノ贈物

文明十一年二月二十七日

三三二

古市ニ仰之、奈良夫也、社家裝束共同上之、御記録四合上之、自一乘院殿木津庄人夫三人被進之了、色々被上之、

十四日、雨下、

一昨日四時分京著云々、悉以無爲也珍重々々、御返事共到來、

廿四日、

一右大將御拜賀、二十二日夜在之云々、人夫下向了、殿上人七人、地下四人、隨身二人、侍二人、公卿一向無之、大雨大風也、以晴間參内、自日野在所御出云々、御楯五百疋、御馬被遣之云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

○文明十二年四月八日裏文書

亥やうそくども、廿六日を候て御くさし候へく候、このゑ殿の御のいう、この殿より一人去て、ふいられ候、こなさへふいられ候ぞに、御うへしよて候、二てう殿御所よてもせんくう万いられ候、うしく、御といり廿日よて候つれども、雨ふり候て、廿二日よて候、これもあめふり候て、せうしよて候つるう、よれれとよそれ候て、するく、と御ささ候て、めてふくこそ候へ、御さき申つくしうふく候て、んしやうのせんくう七人、

拜賀ニ扈
從ノ公卿
ナシ

隨心院殿
寶書狀

紀安清

地下のせんくう四人、御をいしん二人、このわういろふし御かうとうこ候つるやとこ、返々めてふく○以下

○竹屋治光等任官ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔後法興院政家記〕

四 二月六日、晴陰風吹、治光朝臣任刑部卿、

〔藤野文書〕

波○丹

上卿冷泉大納言
文明十一年三月七日 宣旨、

紀安清

宜任左近將監、

藏人左少辨藤原元長 奉

〔迂文書〕

波○丹

上卿中納言
文明十一年三月七日 宣旨、

佐伯清久

宜任掃部丞、

藏人左少辨藤原元長 奉

佐伯清久

文明十一年二月二十七日

三三三

小早川敬平、安藝梨羽近宗名真良ノ地ヲ、國貞伊賀入道ニ與フ、

〔菽藩閱録遺漏〕

二ノ二 國貞平左衛門書出閱ニ無之分

敬平判

梨子羽近宗名真良内、在木九郎右衛門給、田島宛行國貞伊賀入道訖、早可令領知之狀如件、

文明十一年二月廿七日

二十九日、丙辰皇子^{仁勝}竝ニ邦高親王、妙蓮寺ニ詣セラル、

〔晴富宿禰記〕

二月廿八日、乙卯晴、妙蓮寺以明淨坊被示云、禁裏宮御方、伏見殿可有

渡御之由、昨夕俄被仰出之間、今朝參申、他日可申入之由、言上之處、兼日用意不可然之間、只々明日可有御出云々、俄仰天無極、旁談合大切、爲近所事有祇候者、可然存之由、被申送者也、

廿九日、丙辰晴、早旦向妙蓮寺室禮等見廻了、昨日後架等俄造云々、飯後又向之、

渡御臨期歸了、未剋伏見殿板輿先御參詣地藏、暫而後宮御方又御參詣、同女

房輿、有下御後源大納言雅行卿、白河二位卿、民部忠富卿殿上人三人、伯少將資氏前極以上五騎

扈從、藤以量極藤藏人在數自地藏、依大和刑部少輔事、寺家觸穢間於二王門前立御輿云々、直渡御妙蓮寺、一獻三獻之後談義

談義御聽

和歌會及
皇子御出
題

梶井宮
法親王
妙法院
妙蓮寺
覺妙院
胤法親王
寺ニ詣
ラニ

談義十乘坊日忠御聽聞其後有御歌、宮御方御出題、御樂一有之、宮御方御笙、伏見殿御琵琶、四

辻大納言季春、卿等重治笙云々、又下家司并祐阿彌、庭田通絕歌曲候御椽上

云々、伏見殿御杓有召出、寺家衆大成房、大法房、淨行坊、常樂坊、長老坊之同宿

明淨坊、庭田大納言明現坊、治部卿等也云々、今日予可祇候之由、上人僧正頻

雖被示之一向不能出頭之間、斟酌之由固辭者也、

三月七日、甲子晴、權禰宜敍爵舉奏到來官務方、梶井宮妙法院新門主等渡御妙

蓮寺、瓶花事椿等遣了、

○堯胤法親王等、妙蓮寺御參詣ノコト、便宜合敍ス、

〔參考〕

〔妙蓮寺記〕

當山歷祖略傳記一八世 日應僧正、當山再興之初祖、俗姓伏

見宮、大通院之御連枝、前二御由緒在職六十年、備後之門徒此師、御弘化ト云、

永正五戊辰九月廿二日遷化、世壽七十六、

〔山城名勝志〕

洛陽部一妙蓮寺、在寺内通寺記云、日像師永仁始創一字

於五條西洞院、寺廢有年、應永中日應僧正、日忠上人、復興其基於綾小路、寺名

妙蓮、天文廿四年、移北小路大宮西、今荒其後天正十一年、豐臣秀吉公築聚樂

亭給時、令遷安居院地云々、

是月、幕府、建仁寺住持永豐鐘ヲ罷メ、曇郁文ヲ住持ト爲ス、

〔扶五山記〕^四 山城州東山建仁禪寺 住持位次

二百十二世鐘阜豐同(文明十一年)同(不入院)

二百十三世文紀郁同(文明十一年)同(不入院) 定慧院、

〔建仁寺住持位次簿〕 二百十三世文紀和尚、名曇郁、嗣北海超々、嗣頑石生、定

慧院、

〔東山歷代〕 文紀曇郁、桂林疏、文紀住建仁山門疏、自注曰、先師塔曰華藏、師承

語、按約翁之子柏巖、可禪塔于清水華藏院、定惠開基、頑石亦嗣、柏巖故華藏

定惠者、同門也、蓋頑石下有北海者、文紀其嗣也、古宗派、頑石之孫云々、空華集七律

桂林疏、語、文紀來住定惠也、乎、又天隱錄、自注曰、頑石之孫云々、空華集七律

東山北海、上人云々、蓋是文紀之師乎、又北海超アリ、同人ナラ、空華真如ノ

西堂也、勝幢江湖疏、

○原韶住持ノ公帖ヲ受クルコト、月日ヲ詳ニセズ、便宜左ニ合敘ス、

〔扶五山記〕^四 山城州東山建仁禪寺 住持位次

二百十四世春江 韶同(文明十一年)不入院 不入院、

〔建仁寺住持位次簿〕 二百十四世春江和尚、名原韶、文明十一年己亥賜帖、

入寺セズ

土岐氏ノ
諸將不和

妙椿尋尊
ルニ金ヲ贈

〔東山歷代〕 春江原韶、蘭坡疏、有春岳住建仁江湖蓋江誤岳乎、時代ハ相當ル、

溪之月云々、傳衣三會貽厥云々、天龍

住持籍、春岳嗣清溪、文明辛卯住建仁、

美濃守護代齋藤妙椿隱居ス、

〔大乘院寺社雜事記〕^{六十} 三月六日、

一昨日丸入道自京都下向、三乃持是院隱居歟云々、三乃之時宜以外子細共

在之、各不和云々、

〔大乘院寺社雜事記〕^{九十} 七月廿一日、大雨

一石左衛門下向、持是院返事到來、楯悅喜云々、去二月より令隱居云々、何方

へも雖不及返事、一筆捧之、隨千疋送給之了、

○妙椿寂スルコト、十二年二月二十一日ノ條ニ見ユ、

三月小 戊午 朔 盡

二日己未 大和平清水城火ク、

〔大乘院寺社雜事記〕六十 三月七日、

平清水内ニ重
幸河内ニ
赴キシ留
守

一去二日夜平清水之城悉以燒失了、財寶馬牛以下燒了、則鉢古市與同道河内下向、留守之天罰也、

四日辛酉 備前守津野之高卒シ、子元藤嗣グ、

〔翰林葫蘆文集〕八

永林寺殿壽岳居士三十三年忌拈香、

之高三十
三回忌ニ拈
香

維時永正八年太歲辛未春三月上巳後一日、乃土佐州津野氏常元居士之三

十三白遠忌之辰也、孝孫元實遠分淨財、就于勝定禪院設筵布奠、仍命叔父

旭岑西堂、入洛營辦其事、於是集現前清衆、諷誦無見頂相無爲心佛所說究

竟堅固祕密神呪之次、借手慈照小比丘周麟、焚此妙香、以伸供養、伏願三世

覺皇十方大士、因中果上無邊聖衆、乃至根熟龍天等、各々種類普皆饒益、特

今日教主能滿諸願、大悲虛空藏菩薩、從西方香集世界而來、與居士把手同

受其供、還見得麼、抑旭岑身在方外、志等孝子、吾輩之中罕見其比、昔大惠禪

孫元實三
十三回忌
ナ行フ
ニ勝定院
之旭岑入京
シ法事ヲ
經營ス

〔土佐諸家系圖〕三

土佐津野家譜 十 孫次郎春高

五月四日、二十五歲而逝去、號祥林寺殿季榮芳筍居士、

師、義篤君親、謁丞相張公言、先人不幸無後、某之責也、張公興歎、遂奏其族弟、奉師親後、今旭岑偶同其諱、又奉親之志、因併按焉、因齋慶贊、切怛到此、共惟永林寺殿朝散大夫前備州太守壽岳元公居士、有文有武、入俗入真、九畿三服、久嚮望族、四州百洞、直據要津、當唐人射策之年、相公席上作賦、得崔君哦松之趣、京兆幕下稱賓、至于挂弓傳箭、歸之正笏垂紳、遊群玉府、讀未見書、黃童無雙、國士從瑞岩師、有何言句、玄沙喚起主人、立寺長林巨植、訪僧半山霜筠、保漢萬全於兩全之家、惟忠惟孝、有如暎日、占宋四休於一休之地、曰是曰非、隔斷風塵、其餘行實、不遑縷陳、居士祕一張劍、到處防身、殺盡佛祖、截斷冤親、管甚楚王流血乎千里、論甚沛公斷蛇於三秦、趙州謂之露刃、篋々凝霜、鑽彌堅、雲門謂之吹毛、枝々撐月、磨不磷、古人所謂太阿之劍、天下之利劍也、登山則戮虎豹、入水則刺蛟龍、人之知之、盡於是已、然有善用之者、乘城而戰、順風而揮、三軍爲之大敗、居士平生受用如此、末後更臨行、信手揮一揮去、諸人委悉也無、喝云將謂一口金剛王、打云元來七尺黑鬚、又打云乾坤依舊、日月斬新、

文明十一年三月四日

十一 孫次郎之高

傳之聞疆志而明治亂愛士憐農來工商上下咸和有德昔年十七歲春在京時於普曆院御所草木識威名弓掛扶桑四海平也今日御筵歌舞處陽春一曲是歡聲按ニ高野上藏院ノ十八代記ニ孫次郎光高トアルハ説也多郷鴨ノ棟札ニモ之高ト記此時任備前守正五位犬追物八的鷹野御免有テ本國へ下向ノ後コシカタモ又行末モヨモアラシ身ニアマリタルヲモイテノ春三月四日九十八歲而逝去號永林寺殿朝散大夫兼備州大守壽岳元公大禪定門神儀此時永林寺領八十石寄附アリ號永林寺殿紹元秀譽大居士又一說後花園院御宇永享年中將軍義教公依御所望於彼御所ト也ト云々永享元己酉後花園院御即位同十三年改元嘉吉元辛酉年赤松滿祐將軍義教弑シ號普廣院疑ラクハ普廣院ノ御所ヲ譌リ記ナランカ

子元勝

十二 彌次郎元勝

正月四日二十七歲而逝去號長林寺殿秀峯紹高大居士正月二十四日

孫元實

十三 刑部少輔元實

元亨院殿健翁勇公永正十四丁丑歲四月十三日於戶波井場戰死行年三十

六歲

〔中平系圖〕 佐〇土

春高 孫次郎

光高 備前守

一作之高實豫州河野氏子爲春高養子十七歲上京應將軍家命宴席獻詩曰山川草木識威名弓掛扶桑四海平今夕御筵歌舞地陽春一曲是歡聲將軍家大感賞奏敘正五位任備前守某年三月四日卒年五十四號永林寺殿按細川常久寄吸江庵書大感喜津野備前守蓋此人也然則上件故事當鹿苑相公之時乎

常定 中平備後守

一作常忠母豫州川原淵氏光高妻早卒有二妾一豫州川原淵氏一土州某氏二妾皆有身光高約先產爲嗣豫女先生常定家老市川佐渡入道慮光高豫州人也其嗣亦出豫州女本國諸將或隔心非長久策也因抑格不聞光高後七日土女生元藤市川乃具慶儀申之立爲嫡子及長常定啣之

文明十一年三月四日

十七歲起兵墨于中平村、與元藤相戰、經年講和、常定領津野山九箇村、住
椅原村、改山內爲中平氏、紋山形下一文字、此椅原中平之祖也、

元藤彌次郎

某年正月廿四日卒、年二十七、號長林寺殿紹高、

〔諸寺過去帳〕

高中野山過去帳

永林寺殿前備州太守壽岳

土州津野殿

〔津野氏家系考證〕

從三十三國群書類

第十一世之高

中平氏系圖、○略ス、前掲ケ、

大野見本、春高一子爲光高、孫次五十八歲、三月四日死、永林寺殿紹元、與州河

野三男養子來ル、春高濫家無子先妻、春高以下八文字意難解伏見院時、十七光高始在京

此下、有詩及和歌、與十八代記同、歌舞所作、外是勸聲、作是歡聲、自帝王右受領備前守、賜正五位、并犬追物

八的、在京御免、林紙頂戴、此後豫州河原淵賀成、依夫豫州衆夫婦共無心元由

土佐中城主心ヲ置、故ニ國ニテ妻ヲ求ム、

謹按、因十八代記推之、安貞二年戊子、春高年僅六歲ニ而之高生也、春高卒年之高十五矣、之高年十七當寬元二年庚辰也、是鎌倉四世賴經將軍之時也、與普廣院御所之時不合、況後二百年永亨文明間、之高棟札見在于所々、

十八代記ハ誤多シ

詳見後、十八代記紀年之誤、的然而明矣、大都十八代記所傳紀年、延喜以來一々可疑、而未得見其誤之的證、則不得論斷之焉、世代繼累至之高之時、而證

券尤多、紀傳券之賈加不待、辨而明矣、當今所々所有津野譜牒、因十八代記而承其誤者甚多、聖音寺過去牒、全隨十八代記、正足以爲後人之惑耳、獨中

平氏家系、嘗歷先正刪定而不紀年次、唯存月日、可謂多見而闕其疑者、猶詳于後

或問、之高非弘安中人、則爲何世之人也、曰、須崎鄉多鄉部、賀茂神社棟札、永

享八年丙辰霜月十八日辰時、大願主藤原朝臣之高、又大野見鄉菅神宮棟

札、地頭備州太守從五位藤原之高、令牧大藏左衛門尉藤原高尙奉再興彼

神廟、寬正七年丙戌林鐘廿五日、奉建立橫殿瑞籬、應仁五載二月廿五日、奉

造營社壇上葺、文明四年癸巳夷則廿五日、奉建立舞殿、同五年甲午、奉安置

三十三人歌仙云々、因二社棟札考之、之高之在世、在永享、嘉吉、文安、寶德、享

德、康正、長祿、寬正、文正、應仁、文明之間、永享八年丙辰ヨリ距文又津野備前

守雜字集序文、在康正三年、亦可以爲證也、又通考之、仲平氏家系所載細川

常久之書、蓋在明德二三年之間、此時之高年十六七、獻詩詠歌亦蓋此時也、

從此至永享八年、大率四十五六年之高年六十一二歲矣、又須崎上鄉、鴨村

文明十一年三月四日

三三三

須崎賀茂
神社棟札
大野見天
滿宮棟札

文明十一年三月四日

三三四

之高足利
義滿ニ詩
ヲ獻ズ

社棟札文明十三年有藤原朝臣元勝則之高之卒必在文明五年之後十三年之前矣然則明德年中之高年十七而獻詩文明五年九十餘歲而造菅神宮未幾而卒年九十八歲高野過去牒蓋得其實而其獻詩則在鹿苑相公之時應永十五年戊子將軍其有世則在普廣院時嘉吉元年辛酉赤松滿祐諸家所傳不太齟齬似無可疑者也

光高ハ誤

又按諸家所傳爲備前守名光高者誤也賀茂及菅廂棟札皆作之高未見曰光高者也或曰光高別有一人是恐無稽之言也

子女

又按諸家所傳爲正五位者誤也菅廂棟札作從五位也

旭岑

又按文明十四年壬寅歲旭岑藏主歸于四州見于集文明壬寅至享祿元年戊子得四十六年蓋之高卒之時旭岑未爲和尚矣

順慶

聖音寺

又按傳云聖音寺開山曰長生順慶比丘尼備前守之高之令女也爲尼作菴於姬野城南麓住之今聖音寺是也第十三世安傳時改菴爲寺正保三年丙戌當寺回祿舊記靈牌一切煨燼故古傳不一存誠可惜哉明和中歷代石塔成因爲比丘尼亦立無帽塔一基玉傳長老作之銘

又按姬野古城之西麓地名東林溝水之上有一荒墳土民傳爲津野御姬樣

元勝

之墓崇敬不敢近患瘡疾者拜之即得愈近年以來百姓長次兵衛者舍其傍不淨汗穢日犯墳上里民畏之明和五年戊子秋七月十七日遂改葬于孝山寺殿古碑之傍曠中有齒不朽大小相雜二十餘箇蓋有合葬非一人之墓也又有一鏡徑可二寸裏有三葉柏紋他無所考不知何某侯之女也左川青源寺獨湛長老追號之曰天受院殿祥雲妙昌大姊云

第十二世元勝

中平氏系圖○略ス前
ニ掲グ

十八代記曰彌次郎元勝貞治二壬寅正月四日逝去歲二十七法名長林寺殿崇鐵紹高

聖音寺過去牒長林寺殿前刑部秀峯高公大居士貞治元年壬寅正月初四日山內彌次郎元勝

高野山過去帳長林寺殿秀峯紹高大居士俗名津野彌次郎元藤忌日正月廿四日命終二十七歲○中
略

謹按十八代記曰貞治二年壬寅誤矣貞治元年爲壬寅然畢竟不足考說見
之高
下之

文明十一年三月四日

三三五

文明十一年三月四日

三三六

又按須崎鄉上鄉邨賀茂社棟札文明十三年藤原元勝因此考之諸家作元藤者非也

又按諸家皆云正月廿四日卒十八代記云初四日大野見田上氏所傳十八代記爲廿四日半山所傳疑脫廿字

〔秃尾長柄帚〕

四十三 津野壽嶽居士贊

聖賢應世之跡不可以有恒矣遠而儒童菩薩者孔丘之夙駕也光淨菩薩者顏回之吾曹也近而張文定即瑣瑣之閑衲也蘇文忠即五祖之高僧也維津野氏厥姓曰藤文經通貫武備兼能忠肝磨三尺之水詩肺鏤一條之水齡才十七應制試而誇其詞章頃刻而就則足以抗於錢易歲方四十甘勇退而忘其飛騰暮景之斜則足以優於杜陵千里海山既稅朝參之駕五更風雨猶燒夜讀之燈矧乎早入我禪肆不爲無師承自靈松而二傳所貴同其宗姓起長林之百廢亦能昌其雲仍會得眼橫鼻直何須慮靜心澄楊雄草玄猶疎妙果相如諫獵未賀真乘是以僉曰公之生平所有乃悲願力所弘也斯蓋靈松之再生而得長林之中一與者邪

右左金吾朝散大夫備州大守津野氏之高藤公壽像贊公與吾靈源翁甚敦

龍統之高
壽像ニ贊

義滿ノ命
ヲ依リ詩
ヲ賦ス

之高龍
深交ア
ト深交ア

亦嘗有一肖像俾吾伯父續翠翁贊之今以二翁遺愛復命予贊此像豈其可辭乎

〔翰林五鳳集〕

三和十

津野公召陪臺燕給札賦詩萬口稱揚而傳及林下予與

公素有支許之好仍步韻末慶以恩遇之寵

瑞岩

春秋十七得詩名天產奇才應太平落筆台筵人未散句傳萬口作雷聲

〔秃尾長柄帚〕

三十七 哦松齋記代師

四州盛族津埜藤君嘗寓京師與予敦甚一日裹軸徠曰我所居小齋取事乎藍田崔氏以哦松爲名然未有記々之可也予以不文數拒之而未獲君幡然還里方是時州不治政不恬俗不和民不康君見機退閑而閱星霜者殆一紀於斯庚辰夏以書投余且督且責曰昔張衡研京十年左思練都十載我求記文以來其構思之日既越乎張左何其晚哉予書復君曰四州極南一島而身未得放舟二遊至於山川之秀風物之美徒想見其處而已是以齋欠寓目然松之與君則素心知也請以予所知者告之夫木之無芬香艷美而無益於人之觀者莫松若也然有三之異焉嚴霜挫之而弗克改厥色澗壑□之而弗克礙厥聲山上之苗離夕以茂而弗克以鬪厥棟梁之材如是則有益乎人之觀者亦莫松若也推之於

文明十一年三月四日

三三七

之高義
ノ宴ニ侍
シ詩ヲ賦
スシ詩ヲ
龍惺其韻
ヲ依リ詩
ヲ賦シ之
ヲ慶ス

龍統龍惺
ニ代リテ
哦松齋ノ
記ヲ作ル

松ノ三異

人固有之矣。君也深原雄傑，以知而謀，以義而斷，則雖百萬之師臨之，而確乎堅守焉者，松其色也。高懷遠度，覃思大雅，(恒)垣事吟哦，則雖躬處於窮壤遐陬，而佳作誼傳於朝廷上者，松其聲也。存千歲不朽之心，與一時彙進之徒弗敢相抗，則雖宏才乏近用，而終可以支萬間廣廈者，松其材也。此之三者，松而人也，人而松也。嗟乎世之以豐頰曼膚取人者，觀君如何乎？齋之四圍環植數樹，逍遙其間，吟以涉日，固宜哉。藍田丞蓋瀟洒一措大爾，非可以居同觀者。然韓文公作丞廳記，而後松之色益秀，松之聲益清，松之材益良，予製文之遲緩，以有媿於松也，非構思之久矣，既以書復，又以爲記。

〔秃尾長柄帚〕

古詩

古詩一首，簡津野藤君寄以先靈源義所製哦松齋記一

軸傳其遺命

從一我翁知君賢，支許交遊二十年。洛東洛北頰來扣，幾下禪榻對茶烟。去秋衰容觸殘暑，養老泉房忘世緣。筋骨既疲不可起，力病作記筆如椽。書了囑我留一語，南鴈來時爲君傳。眼看臨紙落珠玉，豈意須臾成陳篇。地隔風濤海島遠，雲抱暮色滿秦川。過却半歲見來字，感君音問如身前。万行哀淚多於雨，每一披之洒泣然。今還此軸恐點污，不是寒具如桓玄。想君高齋畫壁上，日讀猶如對老禪。

龍統古詩
添へテ
松齋記
哦松齋
ヲ送ル

昨以古詩一首，簡津野藤君哦松齋下，今投和篇，復次前韻，且謝佳茗之惠，舊相當朝喜得賢，詩名藉々在妙年。陽春一曲万人誦，恩榮優於上凌烟。堊袂何幸受知厚，應了他生未了緣。裏遊如昨十年後，竹屋依泉三四椽。一年兩度有音耗，北鯉南雁互相傳。長天目斷中原遠，万山不隔詩一篇。波瀾老成無遺恨，真成詞源倒百川。四川雀舌東南首，持堪鬪美龍焙前。憶投吾翁濡講舌，齒頰春濃顏溫然。今日包來物惟舊，眼驚壁蒼與圭玄。安得薦翁如生日，靜淪寒泉警夜禪。

〔翰林五鳳集〕

二十七
雜和部

髮染京塵老未歸，烟蓑半卷欲誰依。海南太守容吾否，又見長安花片飛。次韻

海哦松居士

瑞岩

和哦松軒主寄珪公外記之韻 三首

瑞岩

初晴月色待歸來，天外望君曾幾回。何日弓力看入洛，一枝先問上林梅。

聞道徵書擁騎來，都門日夕首頻回。爲詩只恐留連久，驛路紅殘年後梅。又

同

七十五年春又來，衰殘那料候朝回。相看可忘舊時面，病與老加癯似梅。又

同

龍惺之高
ノ詩ニ和
韵ス

文明十一年三月四日

三四〇

衰年筆硯久拋來，偶誦新詩騷念回。早晚都門迎萬騎，狂吟醉對臘前梅。重和
哦松韻。

哦松家集遠傳來，坐咏行吟日百回。若把古人定優劣，盛唐李杜宋蘇梅。又

同

瑞溪

周鳳之高
スノ詩ニ和

〔翰林五鳳集〕

雜和部

和答藤津野

潛蹤海島脫塵纏，一別長安屢換年。西日每驚移玉漏，南風又見入朱絃。詩篇露
々杜忠義，筆勢翻々張醉顛。緹騎何時定朝謁，涼宵對榻共留連。

〔雪巢集〕

乾

和津野藤之高詩

風流最羨少年遊，君尙青春我素秋。雨露恩袍曾侍燕，江湖使節不驚鷗。王書購
學雲生紙，白集携飯月滿舟。爲問須斯詩好否，別來幾字寫蠅頭。

〔村菴稿〕

上

次韻津野寄正宗詩

哦松藤公自海南寄詩於蕭庵，々以余嘗爲公所識，而見索拙和，輒書以代
柬，情見于辭。

品坐三人一笑同，二公少壯我衰翁。況今海角天涯別，往事回思只夢中。

〔補菴京華續集〕 津野刑部侍郎像讚

之高龍統
スニ詩ヲ寄
靈彦和韻

景三作津
野元藤像
讚

土佐之國山川孕秀，津野之保草木識名。維公承大中臣苗孫，差肩藤橘，而世奉
細川氏英主，挹袂源平，風標玉立，節操水清。出入有忠，有孝，友愛難弟，難兄，六藝
之學傳于家，窓下惜分寸晷，一卷之書跪于履，胸中屯數萬兵，寶三舞劍，々氣膽
落，與一射扇，々聲魂驚，非雷論文講武，抑亦護教推誠。有時畫戟清香，凭几默坐，
有時赤髭白足，開門出迎，課梵文者玉軸琅函，采蓮記西方美人舊約，詠和歌者
花晨月夕，折梅懷北野神君風情，心正筆正，眞明俗明，自任大司寇，小司寇，諸曹
次憲章於刑部，不借前將軍後將軍一戰，舉捷烽於石城，烏合蟻聚，不數餘子，龍
騰虎變，難測前程，春回朱顏，眉山二十五歲明允，天繫白日，楚椿兩八千年莊生，
至禱至祝，同氣同聲，夫是之謂，昔應永天子勅靈松祖受衣禁中，而公出其葭葦，
以執師資之禮，後普廣相國命哦松翁賦詩席上，而公繼其箕裘，以同父子之榮
者也。

津野刑部郎君元藤，法諱常高，字秀峰，寄壽像乞讚，書塞其命云，文明壬寅

十一月吉日，前相國景三。

津野刑部侍郎藤公，法諱常高，拜勝定帝師塔受衣，孟號曰秀峰，予所命也。

文明十一年三月四日

三四一

景三元藤
ノ法號ヲ
命ズ

元藤法號

文明十一年三月四日

三四二

寄昏求書二大字，仍題拙偈於其下，以答來意。昨讚其壽像，略掛漏万一，予又何言哉。閣筆耳。偈曰：

綠髮郎君一世雄，仰之山立冠群公。眼空佛祖雲霄上，熊耳鷲頭趨下風。歲舍壬寅文明十四年十一月日，前相國景三。

〔翰林葫蘆文集〕

五 旭岑詩并四六序

歷觀吾朝士大夫，以一藝而傳於家者，班班在焉。有以和歌爲業者，有以善和字爲業者，不唯文事，而復射弓騎馬皆然。父以是傳之子，子以是傳之孫，世世不絕矣。吾所謂文章翰墨云者，決無之。獨吾徒効文字語言於中華之體，習禪之餘著文賦詩，山林之樂也。然而辭有和習字，亦入和樣，令中華之人觀之，則皆云其間文字也。蕉堅大士，壯歲南遊，入全室室，其詩也，文也，筆蹟也，與彼山川風物爭其壯麗，明人跋其藁曰：雖吾中州之士，老於文學者，不是過。且無日東語言氣習，而深得全室之所傳也。評其書則曰：得楷法於清遠，可謂集而大成矣。既而歸朝，吾徒之從事於此者，競游其門，刪詩定四六之體，變書法之卑弱，各得其所。至今叢林無不被其澤者，可尙矣。旭岑藏主者，土州之產也，與大士同其族譜，遂拜其塔嗣之。父哦松居士，爲國之望族，而精於弓馬和歌之藝，專遊心於文墨，有詩集三

周麟旭岑
ノ詩及ビ
四六ノ文
ニ序ス

之高詩集
三卷アリ

瑞仙ノ潤
色ヲ求ム
瑞仙寂ス
ルヲ以テ
周麟ニ求
ム

杲旭岑

周興瑞仙
ニ代リ旭
岑詩集ニ
跋ス

旭岑歸國
ニ際シ瑞
仙ニ批點
ヲ求ム

卷續翠翁序之，靈源叟跋之，弱冠之時，侍善山相公之宴，相公命使作詩，詩即成，曰：山川草木識威名，弓掛扶桑四海平。今夕御筵歌舞處，陽春一曲是歡聲。一時盛事也，所謂吾朝士大夫之閒決無之者，初觀之如鳥跋華耳，而以此業傳之家，猶如以弓馬和歌而傳之子孫也，不甚異乎。旭岑先是居墳寺者有年矣，遠寄四六一篇詩若干篇，就桃源老人而求潤色，桃源已亡矣，假手於予，是之非之，蓋以予之爲桃源老門生也，予得之諷詠涉日，春容寂寥，篇々有家法，而四六之文，縝密簡靜，尤得一家之所傳。蕉堅餘音，哦松遺韻，不在茲乎，以故未敢輒下筆，祕之篋笥。旭岑適入洛，居無何復歸里，一日來告別，於是乎強呈管窺，從頭批點，卷而還之，仍以予之意之所思者書於其端云。

〔半陶文集〕

三 跋旭岑杲藏主詩卷，代桃源筆

旭岑杲藏主，乃俗譜葭葦於吾蕉堅祖翁，如心竺田與臨濟同出邢氏，故拜祖翁塔而嗣焉。平日孜孜好學君子人也。丁未之夏，還土之舊土，謁予告別，因袖出詩草一卷，曰：是小子花晨月夕，觸景感懷，發而爲言者，願賜一語爲衣錦榮焉。予披而視之，詩凡若干首，挾溫藉風，洗艱嶮習，閒有可見者，逢其佳處，批之圈之，卷而還之，琢磨以玉其成，煅煉以金其聲，則或不辱祖翁宗姓耶，可嘉矣。昔祖翁得先

文明十一年三月四日

三四三

文明十一年三月四日

三四四

正覺之道充然爲足、而後遊中華學文字禪、規模全室、而借潤竹庵等諸老、太祖高皇帝、問道之餘、以詩唱和、大唐之南、日本之東、在天雲月、在地溪山、皆祖翁風雅域中之物也、爾來一門牢落、土曠人稀、中等之僧難得一個、何況上等哉乎、公勤而不止、萬一膠於斷絃歟、祝々、雖然、公今所學者、祖翁之所學於全室者也、是土苴耳、祖翁之所得於正覺者、公豈可忽乎、勉旃、噫、山頽梁壞之後、以有若爲孔子焉、樹凋葉落之前、以芙蓉爲牡丹焉、祖翁不可得見、々々、旭岑、慰予仰慕之歎、今也、旭岑有行飯期、或日誰慰予歎者、無爲也、

文明十九年結制後日

法姪前相國桃源叟書

〔翰林葫蘆詩集〕

二 次韻奉送旭岑老禪歸土州、

君今告別感殘年、相逐意行如弄禪、腰脚縱煩我何管、非關騎馬與乘船、

〔翰林葫蘆詩集〕

三 旭岑首座回土州故里、因出扶宗老師舊作、以見求予和、

謹次高韻者三章、其一則言惜別之情、其二則致惜師之意、其三則述予之鄙懷、官院事繁、不到重吟、故和皆拙、恕之、

昨夢天宮絕百非、衲衣又掃塔前扉、湘潭鳥日無南北、莫學秋風海燕歸、
解印聞師悟昨非、鄉粉獨揜白雲扉、情知惠日岩々氣、山易夕陽胡不歸、

周麟旭岑
ノ土佐ニ
還ルヲ送
ル詩

前輩回頭大半非、憑君傳語問禪扉、愧吾住著左街院、秋柳自無絲繫歸、

〔翰林葫蘆詩集〕

四 次韻送旭岑首座歸土佐、

說法去年當第二、錦旋今奉白頭親、禁花開處東辭洛、鄉果熟時南念閩、歸夢四州環百洞、離愁一日適三春、勉哉家牒出名下、選佛甲科先出身、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

部ツ之 津野之高



文〇土佐國古文叢三
明十年八月二十三日感狀

五日、壬戌內侍所御神樂、尋テ又、臨時御神樂アリ、

文明十一年三月五日

三四五

四辻季春
綾小路俊
量等火災
以テ行ハ
レズ臨
春日社
時樂ノ
タメ延引

〔晴富宿禰記〕

三月五日、壬戌天晴、内侍所御神樂、舊冬四辻（季卷）綾小路等、依燒亡不

被行、○燒亡ノコト、十年十二今日被行之、去月被定日時之處、依春日御神樂

又延引、○春日社臨時神樂ノコト、今被行之也、

〔後法興院政家記〕

四 三月十一日、戌辰晴、○中今夜内侍所臨時御神樂云々、

頭中將覽散狀

七日、甲子大和十市遠相、弟成家ノ畠山義就ニ黨シテ、反撃セントスルヲ聞
キ、之ヲ殺ス、尋テ、十市ヲ燒キテ、小山戸ニ退ク、

〔大乘院日記目錄〕

三 三月七日、兵庫打之簾、九日十市沒落、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 三月八日、

一 昨夕十市新次郎、遠相舍弟兵庫成家打之、河内屋形（畠山義就）與兵庫同心、十市并北
可打之用意顯現、子細有之故也云々、北ハ穴瀨山近所ニ引退、十市ハ依河
内一左右可開本城之支度也、以外作法、自滅之躰也、珍事々々、泰弘寺主遣
了憲方了、

九日、

一 今日堯善遣十市并北方、御返事念比御使畏入、爲國人分者、雖可一合戰、川

十市遠瀨
ハ穴瀨山
附近ニ退
ク
遠相ハ島
山氏ノ動
靜ニ依リ
居城ヲ退
カシトス

澁谷某ヲ
討ツ
遠相小山
戸ニ退ク

十二日、

内儀不可然之由承之者無力云々、今日澁谷打之、主從五人云々、兵庫同意
之故云々、今夕則十市自燒、沒落于小夫小山戸方云々、

一 了憲進退事、色々仰合古市兄弟了、其子細又尙々訓英了、弘方ニ遣書狀了、

明日十市并北方可仰遣之由、仰付光秀、十市儀ニ不可依事也、了憲事寺僧
分也、殊更極心者也、不可及沙汰事也、

十三日、

一 十市小山戸ニ在之、北ハ小夫ニ在之、兩所遣書狀、返事在之、了憲事仰遣之、
各畏入云々、

十五日、

一 去十二日歟、釜口飯丸院以下、十市披官（從、同シ）坊發向云々、昨日談峯十市披官以
下沒落歟、越智披官亂入云々、

十六日、雨下

一 十市郷之内門跡領事、仰遣越智方了、

廿三日、

文明十一年三月七日

釜口等遠
相ノ被官
發スニ進

遠清小夫
ニアリ

文明十一年三月九日

三四八

一楠葉四郎左衛門參申、於河內國雜說、十市事越智沙汰次第率爾也、惣領式事於屋形者不及其沙汰事也、十七日此子細申送越智方之由風聞云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

○文十一年十二月三日裏文書

兵庫不儀之子細候間、不及力既生涯させ候、依是御懇ニ被仰出候、過分之至候、以此旨可被御披露所仰候、於于今者無殊子細之由、可得御意候、恐惶謹言、

三月八日

遠相(花押)

竹内殿

〔後法興院政家記〕

四 三月十三日、庚晴、心中作善如例、一乘院被來、勸小盃酌、當國々人十市去七日沒落云々、

九日、丙幕府、攝津守護代藥師寺元長ニ命ジテ、多田莊ニ棟別錢ヲ課スルコトヲ停メシム、

〔多田院文書〕

○攝津

多田院雜掌申、攝州多田庄棟別事、任何可被止催促之由候也、仍執達如件、

文明十一年三月九日

貞有(花押)
貞秀(花押)

遠相尋尊
ニ返書ヲ
送り成家
ヲ殺スノ
止ムナキ
ヲ陳ブ

棟別奉飯
尾清房

幕府壬生
外久ニ落
ヲ問フ圍
雅久ノ返
答

上使松田
ニ下ル
數秀越前
ニ下ル

奉行布施
英基松田
貞康

(幕府元長)
守護代

十一日、戊幕府、内裏修造ノ爲、棟別錢ヲ近畿ニ課シ、又段ヲ錢越前ニ課ス、

〔晴富宿禰記〕

三月十一日、辰晴、清備中守秀數送使者云、爲内裏御修理可被懸洛中洛外棟別之由、自室町殿被仰出之、清備守、飯尾彦左衛門兩奉行也、號

洛外者以何處爲稱哉、可尋申之由被仰下候云々、此使官務對面、返答云、去文和三年造内裏洛中洛外被懸棟別之時、家々哉之由官務載返事、折幣遣了、

廿二日、卯雨、松田對馬守爲上使下向越前、段錢并内裏御修理棟別事云々、今日進發云々、

四月七日、巳晴、飯尾兵衛大夫送使者、相奉行布施但馬在長谷所用事之間、昨日某出京、今日又可罷趣候、小野山棟別事、爲禁裏御料所先規不及沙汰、但今

度可被懸者、爲長官可有成敗歟之由返答、仍本奉行布施下野、松田豐前兩判奉書、遣小野沙汰人中、自御當方御成敗之儀、可被副遣御使候之由申送候、官

務對面、於小野不及沙汰先規候、殊惣庄捧申狀之間、付傳奏候、其一左右之間可有御待之由返答之、

十日、丙晴、御所造營棟別、本奉行布施下野、松田豐前、兩判奉書、遣小野沙汰人

文明十一年三月十一日

三四九

中、仍可副賜御下知之旨、上使布施但馬入道、飯尾兵衛大夫也、自此兩人連日送使者令申、先日付傳奏、廣橋中納言兼顯卿小野申狀未被仰出候旨處、爲長官相副奉書、可下知之條無其謂之由、連々返答之處、無盡期之上者、打捨可歸洛言上候由、今朝亦送使者、公儀無力之間、官務成下知、於兩年預以清藤遣傳奏并奉行所了、傳奏返答云、先日申狀披露候、又申狀被加御銘可給候、可被申室町殿候云々、

十三日、己亥陰、晚雨、布施下野守被仰出事候、可參殿中之旨申送之、官務究困之上歡樂候、仍晚召進雜掌處、布施退出之間向宿所、小野棟別事、差遣年預可有收納之由、嚴密文言送奉書、

十四日、庚子晴、陰、晚來雨頻、夜前奉書之旨、召仰兩年預之處則應之、只今供御人參洛伴參之、持參一獻、一荷一兩一昨日又兩奉行入使節於小野山及譴責之間、驚存參洛、怒可預申御沙汰由歎申也、棟別被懸先例一向無之云々、仍申狀以盛俊遣傳奏、供御人持參楯云々、

又兩年預可罷下之由被仰出之處、只今供御人上洛之間於此方可申付之由載一紙之間、則以盛俊遣布施許了、

十五日、辛丑晴、盛俊今朝歸來、傳奏返答、小野事、棟別無先規者、賜御副狀爲肝要可披、露云々、略棟別事載折紙、則以職業遣之、

十六日、壬寅晴、職業、忠方來、昨夕相招之間、向布施下野宅之處、供御人等在京候者、急速罷下、棟別事可注申之旨、可加下知云々、仍下知之處、供御人等爲奏聞歎申上洛之上者、不奉待返事可罷下之條、迷惑由捧申狀、職業可持向由下知了、

十七日、卯癸晴、晚小雨、小野供御人申棟別事無先規云々、可被催促停止之由、可申室町殿之旨、被成女房奉書於廣橋中納言、兼顯卿傳奏

十八日、辰甲晴、時々雨洒、日晝止、傳奏、廣橋小野棟別事、以奉書之趣、伺申室町殿之處、相懸事者有先規之帳而致沙汰哉、尋奉行可申之由被仰出之間、可尋布施下野守之旨傳奏被申云々、

廿一日、丁未晴、今夜亦寒氣、但劣昨夜、兩年預參之、自傳奏以使者小野棟別以何時例相懸哉、布施ニ相尋可申之由、室町殿被仰候間、被申遣布施下野守之處、清和泉齋藤上總(實名)以前、懸小野候之由令申云々、然者自其遣使於清和泉可被相尋云々、仍則以盛俊尋遣清和州處、以前花御所御造營時、棟別相懸小野候、

義政ニ命
ジテ僅促
ムナ停メシ

義政先規
ニ依リ棟
別ヲ課ス
ルヤ否ヤ
ナ奉行ニ
諸フ

花御所造
營ノ時棟
別ヲ課ス